

TA SIRO GA HA E
田代ヶ八重遺跡

綾北川総合開発建設事業に伴う埋蔵文化財調査報告書

1992・3

宮崎県教育委員会

田代ヶ八重遺跡 正誤表

P	I	誤	正
20		図15 繩文土器実測図 (4) (1/3)	図15 繩文土器実測図 (4) S A 1 出土土器 (1/3)
21		図16 繩文土器実測図 (5) (1/4)	図16 繩文土器実測図 (5) S A 2 出土土器 (1/4)
22		図17 繩文土器実測図 (6) (1/3)	図17 繩文土器実測図 (6) S A 2 出土土器 (1/3)
23		図18 繩文土器実測図 (7) (1/3・59~62は1/4)	図18 繩文土器実測図 (7) (1/3)
24		図19 繩文土器実測図 (8) (1/3)	図19 繩文土器実測図 (8) (1/3・59~62は1/4)
31		図26 繩文土器実測図 (15) (1/3・146 ~151 は1/4)	図26 繩文土器実測図 (15) (1/3・171 ~176 は1/4)
41	No. 49 の出土層	—	III
49	表10の左上	(空 横)	重量 (g)
59	18	早急には出そうにもない	早急には出せそうにもない

序

日頃、埋蔵文化財の保護・活用に対し、深い御理解をいただき、厚くお礼申し上げます。

宮崎県教育委員会では、宮崎県企業局の委託を受け、綾北川総合開発建設事業に伴う西諸県郡須木村田代ヶ八重遺跡の記録保存のための発掘調査を行ないました。

調査では、縄文時代から近世にかけての遺物が多量に出土しましたが、特に、縄文時代後期の土器から当時の文化交流を知る手がかりが得られるなど大きな成果を上げることができました。

本書が学術資料として、また学校教育、社会教育の資料として活用されることを願うと共に、埋蔵文化財に対する理解の一助となることを期待します。

なお、調査にあたっては、地元の須木村をはじめとして、各方面の機関、多くの人々のご協力をいただきました。

心よりお礼を申し上げ、刊行の言葉といたします。

平成4年3月

宮崎県教育委員会

教育長 高山 義孝

凡 例

1. 本報告書は、綾北川総合開発建設事業に伴い、宮崎県企業局の委託を受けて宮崎県教育委員会が実施した田代ヶ八重遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、平成2年8月24日から平成2年12月10日、平成3年4月30日から平成3年6月3日に至る期間実施した。
3. 調査関係者は次のとおりである。

調査主体 宮崎県教育委員会

教 育 長	児 玉 郁 夫 (平成2年度)
	高 山 義 孝 (平成3年度)
文 化 課 長	梨 囗 孝 (平成2年度)
	長 友 巍 (平成3年度)
文化課課長補佐	片野坂 次 彦 (平成2年度)
	串 間 安 圭 (平成3年度)
主幹兼庶務係長	小 倉 茂 光 (平成2年度)
庶 務 係 長	税 田 輝 彦 (平成3年度)
埋藏文化財係長	岩 永 哲 夫
主事(調査担当)	吉 本 正 典

特別調査員 出土遺物指導 木 村 幾多郎 (大分市歴史資料館館長)

4. 本報告書の執筆・編集は、吉本が担当した。
5. 本書に使用した方位は遺跡地形図(図2)を除いて、全て磁北である。図2は座標北である。
6. 出土土器について、富田紘一氏(熊本市立博物館)、柴畠光博氏(都城市文化課)に御教示いただいた。
7. 陶磁器について、大橋康二氏(佐賀県立九州陶磁文化館)に御教示いただいた。
8. 石器の石材の同定は、宍戸 章氏(元宮崎県文化課)に依頼した。
9. 出土遺物、諸記録は、宮崎県総合博物館埋藏文化財センターに保管している。

本文目次

Iはじめに	1
1. 調査に至る経緯	1
2. 遺跡の地理的・歴史的環境	1
II調査区の設定と調査の概要	3
1. 概要	3
2. 層序	3
III縄文時代の遺構と遺物	5
1. 遺構	5
2. 遺物	15
IV古代～近世の遺構と遺物	55
1. 遺構	55
2. 遺物	55
Vおわりに	58
1. 遺構・遺物の遺跡内での分布論	58
2. 縄文時代後期の土器について	58
3. 遺跡の性格	59
VI写真図版	60

挿図目次

図1 田代ヶ八重遺跡の位置 (1/50000)	2
図2 遺跡地形図 (1/2000)	4
図3 A～G-2～11区の状況 (1/500)	6
図4 Z～E-17～22区の状況 (1/500)	7
図5 層位断面図 (1) (1/60)	8
図6 層位断面図 (2) (1/60)	9
図7 A～G-2～11区遺構分布図 (1/500)	10
図8 Z～E-17～22区遺構分布図 (1/500)	11
図9 S A 1 実測図 (1/60)	12
図10 S A 2 実測図 (1/60)	13
図11 土坑・小穴実測図 (1/40・1/30)	14

図12	縄文土器実測図(1) (1/4・1/3)	17
図13	縄文土器実測図(2) (1/3)	18
図14	縄文土器実測図(3) (1/3)	19
図15	縄文土器実測図(4) (1/3)	20
図16	縄文土器実測図(5) (1/4)	21
図17	縄文土器実測図(6) (1/3)	22
図18	縄文土器実測図(7) (1/4・1/3)	23
図19	縄文土器実測図(8) (1/3)	24
図20	縄文土器実測図(9) (1/3)	25
図21	縄文土器実測図(10) (1/3)	26
図22	縄文土器実測図(11) (1/3)	27
図23	縄文土器実測図(12) (1/3)	28
図24	縄文土器実測図(13) (1/3)	29
図25	縄文土器実測図(14) (1/3)	30
図26	縄文土器実測図(15) (1/4・1/3)	31
図27	縄文土器実測図(16) (1/3)	32
図28	縄文土器実測図(17) (1/3)	33
図29	縄文土器実測図(18) (1/3)	34
図30	縄文土器実測図(19) (1/3)	35
図31	縄文土器実測図(20) (1/3)	36
図32	縄文土器実測図(21) (1/3)	37
図33	縄文土器実測図(22) (1/3)	38
図34	縄文土器実測図(23) (1/3)	39
図35	縄文土器実測図(24) (1/3)	40
図36	石器実測図(1) (2/3)	47
図37	石器実測図(2) (2/3)	48
図38	石器実測図(3) (1/2)	49
図39	石器実測図(4) (1/3)	50
図40	石器実測図(5) (1/3)	51
図41	石器実測図(6) (1/3・323・324のみ1/6)	52
図42	石器実測図(7) (1/3)	53
図43	土坑・集石遺構実測図(1/40)	55
図44	土師器・須恵器・陶磁器実測図(1/4)	56
図45	鉄器・土鍤実測図(1/3)	56

I はじめに

1. 調査に至る経緯

宮崎県西諸県郡須木村において、田代八重ダムの建設を中心とする綾北川総合開発建設事業が行なわれているが、ダム建設により水没する国道 265号線と県道田代八重綾線の付け替え工事に伴う土砂捨て場(ダム完成後は水没)として、旧田代八重小学校跡と付近の畠地の利用が計画された。ところが、当該地には土器片等の散布が認められ、埋蔵文化財の包蔵が予想された。そのため、平成元(1989)年6月、県企業局工務課長より文化財の有無の照会があり、平成2年3月に県文化課による試掘が行なわれた。試掘の結果、縄文時代前期土器等の遺物が出土したため、県企業局と県文化課による、埋蔵文化財保護についての協議が行なわれたが、計画変更は困難との結論に達し、記録保存の措置がとられるこことになった。発掘調査は、平成2年度に対象範囲の大部分について行なわれ、平成3年度に残りの700m²の2次調査が実施された。

2. 遺跡の地理的・歴史的環境(図1)

田代ケ八重遺跡は、宮崎県須木村大字中原字田代八重に所在する。

遺跡は、四万十層群(頁岩・砂岩を主とする)より成る、1000m級の山が連なる九州山地の中に盆地状に開けた河岸段丘上に立地する。九州山地に源を発する猿谷、蟬の谷といった谷川が合流し綾北川となり、蛇行しながら西流するところの左岸にその河岸段丘は形成されている。標高は最高位点で約318mである。遺跡の付近は奥深い山地の景観を呈するが、国道265号線や県道規木田代八重線が通る、山間部の要所である。古くから林業に従事する人が多く、集落を形成していたが、現在も居住している世帯はごくわずかである。

須木村内においては、今日までに実施された発掘調査は2例のみであり、表面採集資料を含めても考古学的アプローチを行なうには資料が不足している感が否めない。

焼烟農耕史研究会(代表藤原宏志宮崎大学助教授)による上床遺跡の学術調査では、発掘調査と同時にプラントオバール分析という理化学的調査も行なわれた。発掘調査では、縄文時代後期の遺物包含層が確認されている。出土土器には口縁部を肥厚させ把手を持つものや、斜方向・X字状の短沈線を施すものなどが見られ、報告では市来式土器の系統と位置付けられた。それらの資料と、本遺跡の当該期の土器群との間には、数多くの共通点が認められる。縄文時代後期・晩期の遺物は、現在、過疎センターのある尾殿遺跡からも出土している。

古墳時代の在地墓制である地下式横穴の発掘調査が、村役場建設に伴って行なわれた(上ノ原地下式横穴)。10基の地下式横穴から、直刀、鉄鎌などが出土しているが、特に、人骨に付着していた櫛は注目される。

(註)

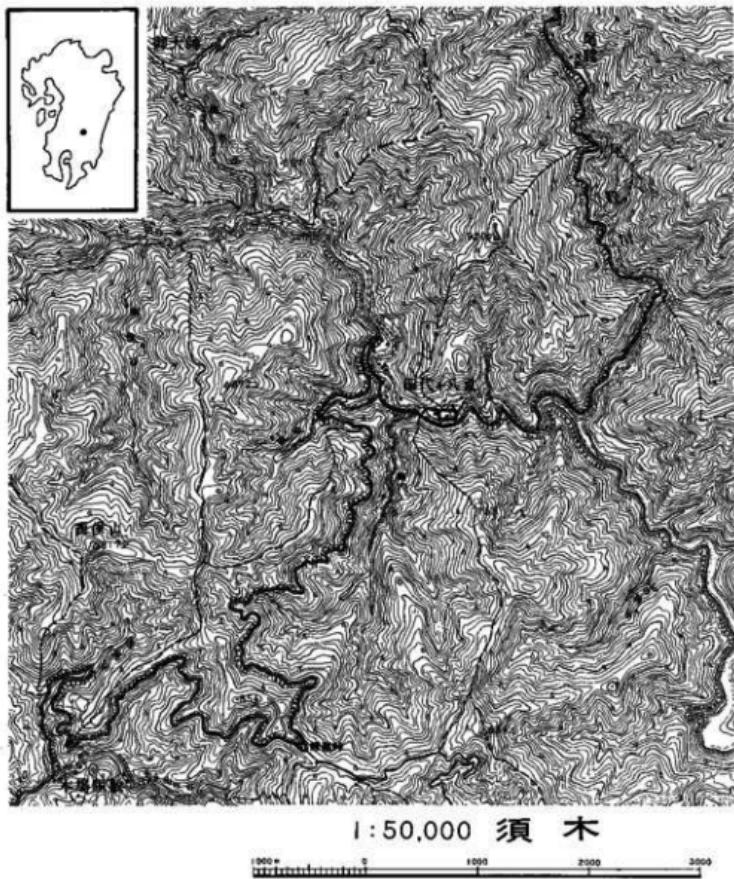


図1 田代ヶ八重遺跡の位置(1/50000)

1. 燒畑農耕史研究会 1984「西諸県郡須木村上床遺跡の調査」[宮崎考古]9
2. 茂山謙・岩永哲夫 1981「上ノ原地下式古墳群発掘調査」[宮崎県文化財調査報告書]23
宮崎県教育委員会

II 調査区の設定と調査の概要

1. 概要

遺跡はゆるやかな起伏を有する河岸段丘上に展開する。端部は遺物の出土が希薄になる。調査面積は、約3200m²である(図2)。調査開始時の遺跡は、東側においては開削が進み、数段の段々畑、棚田となり、中央部の最高位面は小学校の校舎および校庭、その西側の浅い谷状の部分は栗園、茶畠となっていた。

発掘調査に際しては、まずⅠ層の表土(近～現代の耕作土)の除去に機械力を使用し、調査区全体に10mのメッシュをかけ、東から1・2・3区、北からA・B・C区(ただし北端部はY区)とし、区画表示はその組合せで行なうこととした(図3・4)。

調査区のうち、12～16区にかけては小学校建設時にかなりの削平がなされたようで、E・F-12～15区、B-15区にトレントを入れて状況を見たところ、表土中にE-14区を中心縄文時代晚期の遺物が出土するものの、その下位にすぐ基盤の礫層があらわれたためこの区画については本格的な掘り下げは行なわなかった。

A～G-2～11区については、畑の区画にあわせて掘り下げを行なっていった。平坦な段々畑を造成しているため、標高の高い側は削平を受け、低い側については厚い客土が見られた。無遺物層のアカホヤ層(後述)および基盤の粘土・礫層の上面で旧地形を見ると、西側の川の方向に向かってゆるやかに下っているようであり、さらに北側にも谷が入っている。ここで注目すべきは縄文時代の時期ごとの遺物の分布で、縄文時代前期・中期の遺物はほぼB～F-3～5区のみに、縄文時代晚期の遺構・遺物はC～F-7～10区を中心認められた(図3)。

小学校をはさんで西側のY～E-17～22区は、複雑な小地形をなす。全体的には北から南に向かって傾斜しているが、Z-19区の南半付近が窪地になるようである。このまとまりには、縄文時代後期の遺構・遺物が見られた。特に住居跡と見られる落ち込みの検出と出土土器の多さは特筆できよう。若干の古代～近世の遺物も出土している(図4)。

2. 層序(図5・6)

基本層序として、以下に述べる6つの層を確認している。

Ⅰ層は前述の近～現代の耕作土で、水田の床の鉄分の凝集層が見られる。Ⅱ層は、おそらく近代期の開墾による客土で、色調はまだらとなり一定ではない。各時代の遺物を多く含むが、それらは当然原位置を止めていない。Ⅲ層は、小礫・遺物を多く含む黒褐色土層である。残りの良いB-18区付近では50cm程の厚さとなる。青磁など陶磁器を出土することから、おそらく中世に形成された層と考えられる。下位の縄文時代の包含層に影響を与えており、混入した縄文土器の出土も多い。Ⅳ層は黄褐色を呈する、本遺跡の主たる遺物

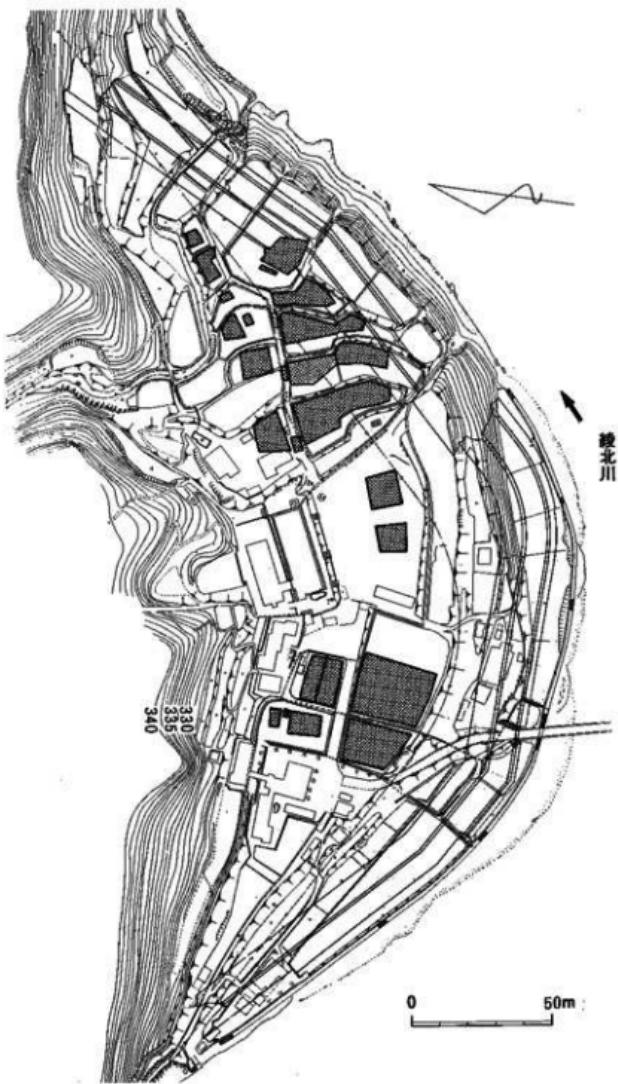


図2 遺跡地形図(1/2000)

包含層である。色調や粒子の特徴より、鬼界カルデラの噴出物であるアカホヤの土壤化層と考えられる。ただし、大きくⅣ層と一括した層の中でも、Z～B-17～20区では基盤の粘土層を母胎とするようであり、またD-5～6区付近では、より橙色味が強くなる。B～F-3～5区でa・bとした層も同様の色調を呈する(a層が若干黒く、砂質となる)。b層の下部からは縄文時代前期～中期土器の大きな破片が出土している。a層とb層の上部には中～近世の陶磁器が見られることから、その時期に攪乱を受けているようである。V層はアカホヤ層である。黄橙色を呈するガラス質の火山灰である。厚さは約10cm程で、消失している地区もある。その下位には、河岸段丘の基盤と考えられる疊混じりの粘土層となりおそらく疊層に統していくようである。

尚、A-19区、C-18区において、プラントオパール分析をおこなった。結果は付論として卷末に掲載している。

III 縄文時代の遺構と遺物

1. 遺構

縄文時代の遺構は、Ⅳ層土の覆土を基調とするものである。B・C-2～7区を除き調査区内にまんべんなく分布するが、そのうち時期の特定が可能なものは竪穴住居跡とした縄文時代後期の2基の落ち込みのみで、それ以外は出土遺物がほとんど見られない。ここでは、SA1・2と4基の土坑・小穴について触れる。

SA1(図9)

B-18区で検出した。北側と西側は削平のため、落ち際が不明瞭になる。南側と東側についても壁はなだらかな傾斜を示し、全体として平面形は捉えにくい。隅丸方形を呈するものであろうか。柱穴、煙突は確認していない。床面近くのレベルに大きめの礫が見られる。

遺物は、覆土中出土の土器の小片のみで、それらは遺構の機能していた時期を示す、一括遺物と認定できるものではない。住居廃絶後流れ込んだものと考えられる。後に行なう縄文時代後期土器の分類では、24-25-27がA類、23がC類、26がE類、30・31がF類となる。時期的な幅が認められよう。

SA2(図10)

Z・A-19・20区の区境に位置する。SA1同様、北側、西側の壁の立ち上がりは不明瞭である。地形や、覆土土層断面の様子から、南側より土が流れ込んだ様子がうかがえる。床面から落ち込む土坑と小穴が1基ずつ見られた。炉らしき部分は認められなかった。

遺物は覆土中から多量に出土している。土器では、32～34・40・42・43など、後の分類

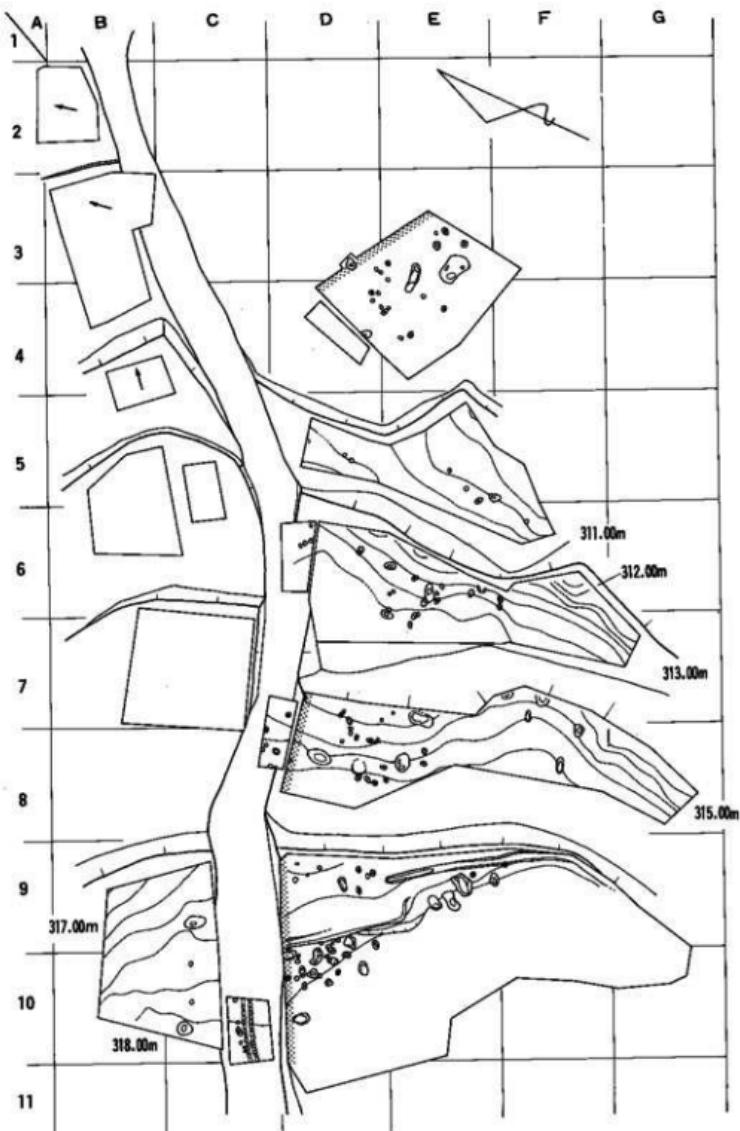
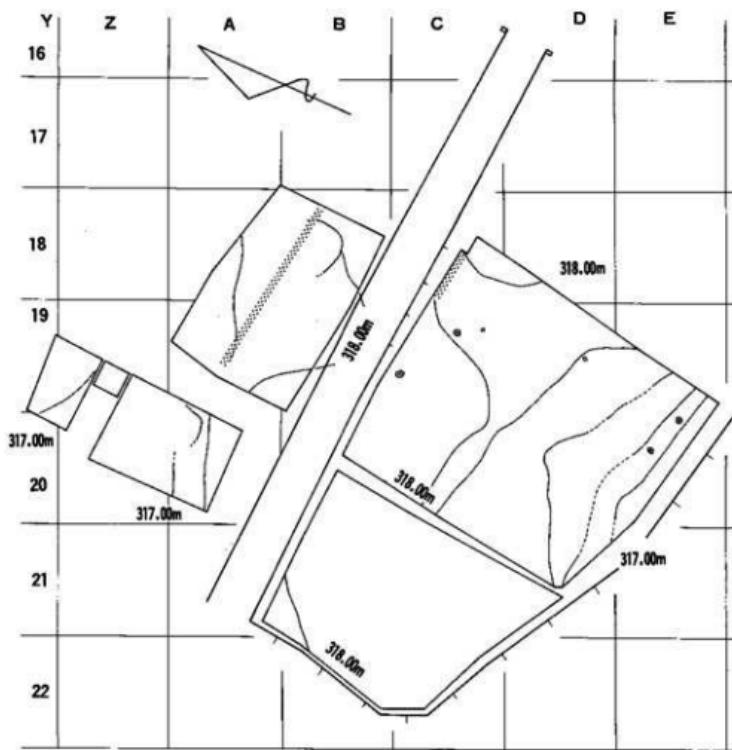


図3 A～G-2～11区の状況(1/500)



- 図3・4とも、グリッドは10mメッシュである。
- 図3中の矢印は、傾斜の方向を示す。
- 図3・4とも図中のスクリートーン部は層位断面図掲載地点である。

図4 Z~E-17~22区の状況(1/500)

でA類とした粗製の深鉢形土器や、35~39といった磨消繩文系やそれに伴うD類の一群、E類とした台付浅鉢・皿形土器である47・48などが見られる。そのうち比較的大きな破片である32は、口縁部が逆「く」字形に屈曲するもので、内外面ともに貝殻条痕を施す。市来式土器の新相に位置付けられる。35・36は北久根山式土器期の鉢で、平行沈線文を施し、その端部には押点が見られる。

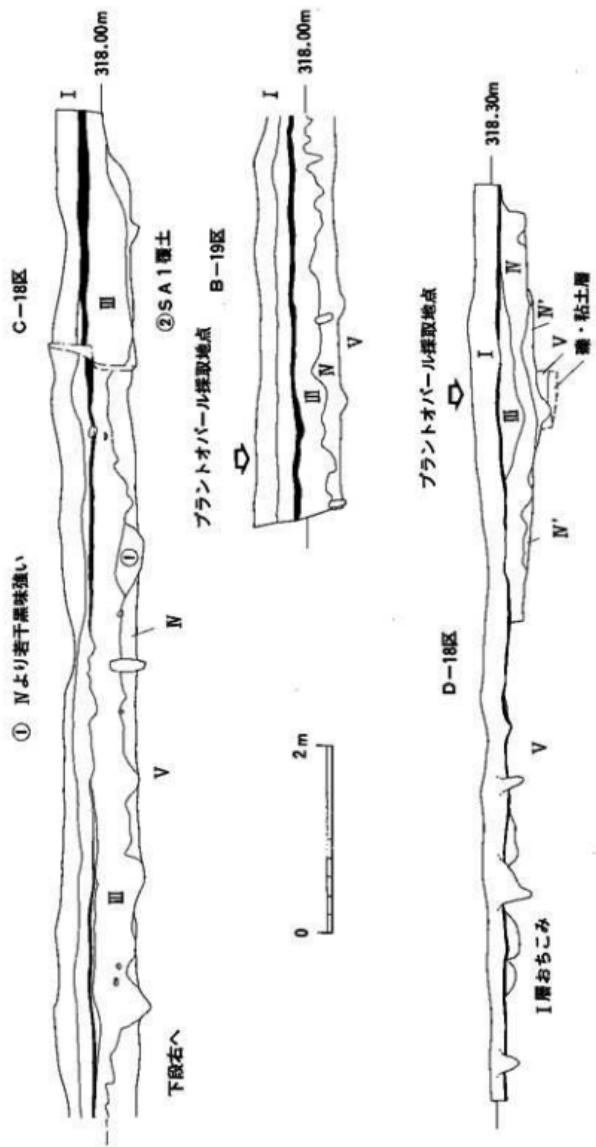


図5 層位断面図(1) (1/60)

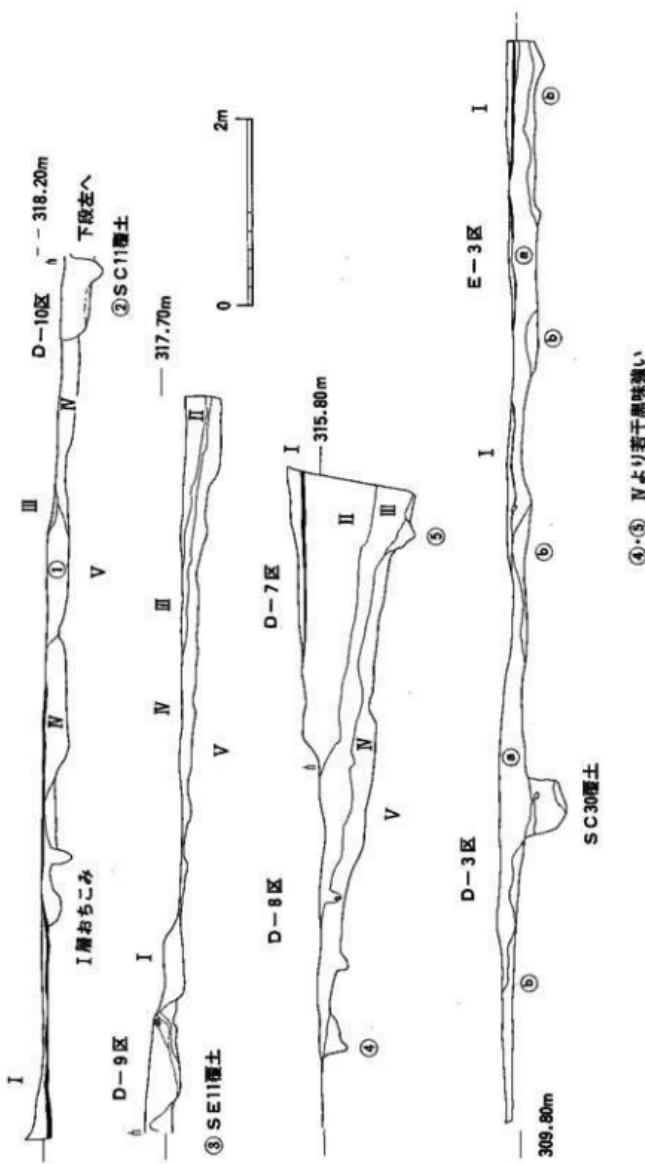


図6 層位断面図(2) (1/60)

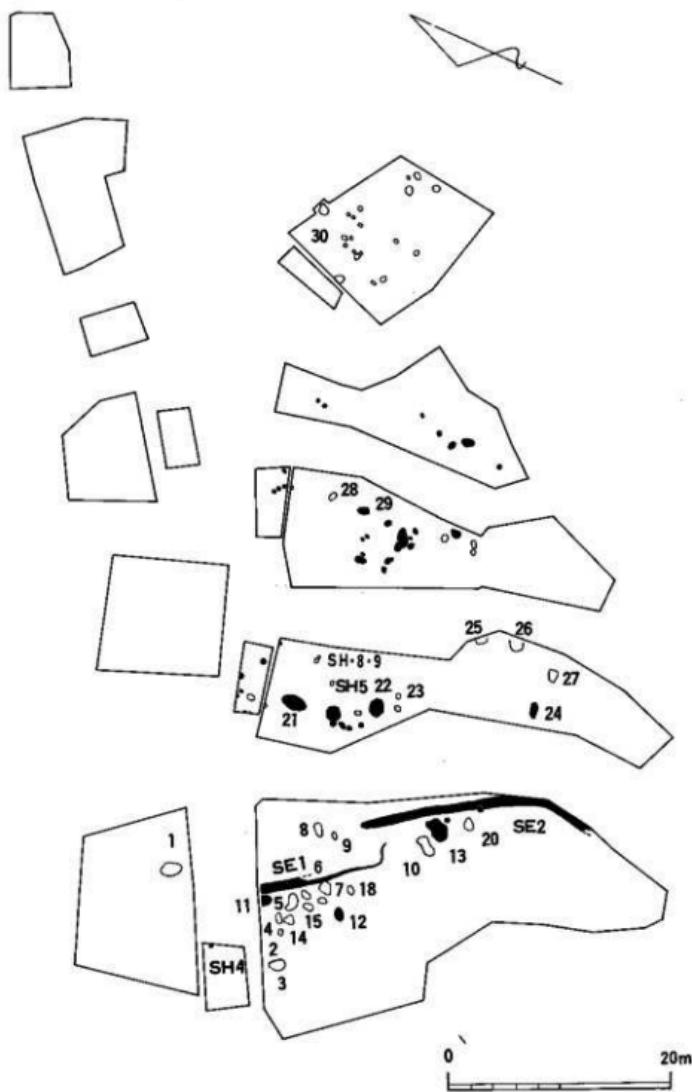
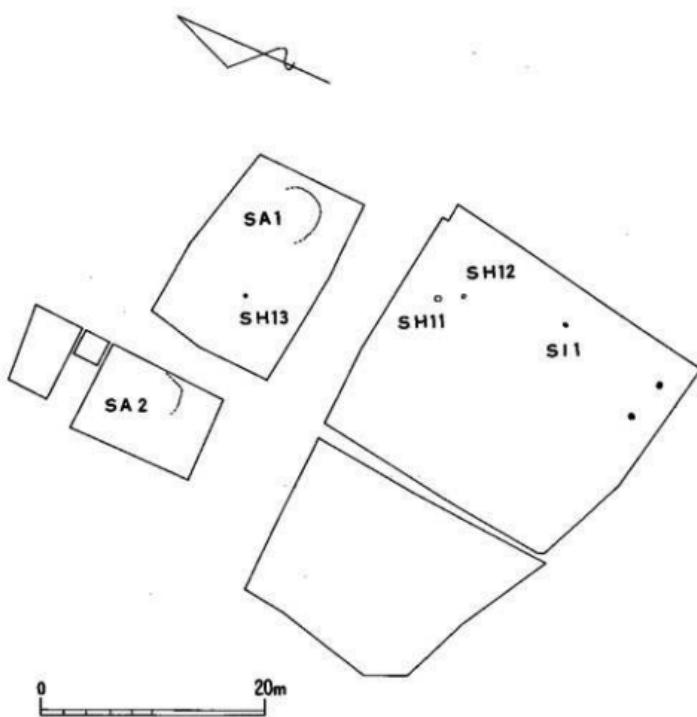


図7 A～G—2～11区 遺構分布図(1/500)



●図7・8とも白印は縄文時代、黒印は古代～近世の所産と考えられるものである。
●SAは竪穴住居跡、SEは溝、SHは小穴、SIは集石遺構を示す。無印は土坑で、
頭のSCを略している。

図8 Z～E-17～22区 造構分布図(1/500)

尚、SA2出土土器の形式（器種）別の出土数と百分率を、表1に示した。出土数は、
判断の可能な口縁部片を基にしている。それによると、粗製の深鉢・鉢、中でも無文のそ
れの多さが指摘できよう。

S C 4 (図11)

D-10区の土坑の集中区にあり、S C 2 や S C 14に近接する。長軸は約 110cm、短軸は約60cmで、南西側は床面からさらに掘り凹められている。壁から床面にかけて覆土中に炭化物を含む。また、覆面土上部には、赤変しもろくなつた礫が認められる。遺物は出土していない。

S C 6 (図11)

D-10区にあり、長軸は約 110cm、短軸は約60cmの楕円形となる。北東側の床面が掘り凹められ、その部分を中心には炭化物が見られる。S C 4 同様、炉としての機能が推定される。遺物は土器の小片 1 点のみで所屬時期は不明であるが、S C 4 も含めて、覆土土色や周辺の出土遺物から縄文時代晩期の所産と推定している。

S C 28 (図11)

D-6 区に位置する。長軸約 100cm、短軸約70cmの不整形の土坑である。西側は床面から約25cm程落ち込む。遺物は出土していないが、覆土中からカワニナと見られる巻貝が出士している。

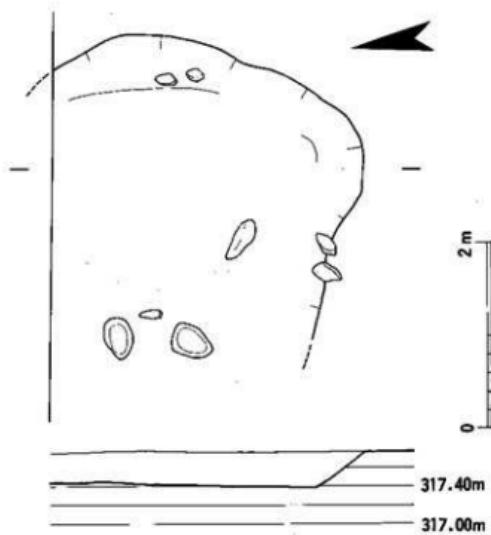


図9 SA I 実測図(1/60)



図10 SA 2実測図(1/60)

S H12 (図11)

D-19区で検出された埋鉢である。覆土上部で縄文時代晩期の浅鉢のまとった破片が出土している。273がそれで、口縁部内外面に沈線を巡らし、全体に研磨を施す。黒川式土器の特徴を有する。覆土はⅣ層土を基調とし、落ち込みは土器よりひとまわり大きい程度の楕円形（西側がくびれる）を呈する。273以外の遺物は出土していない。

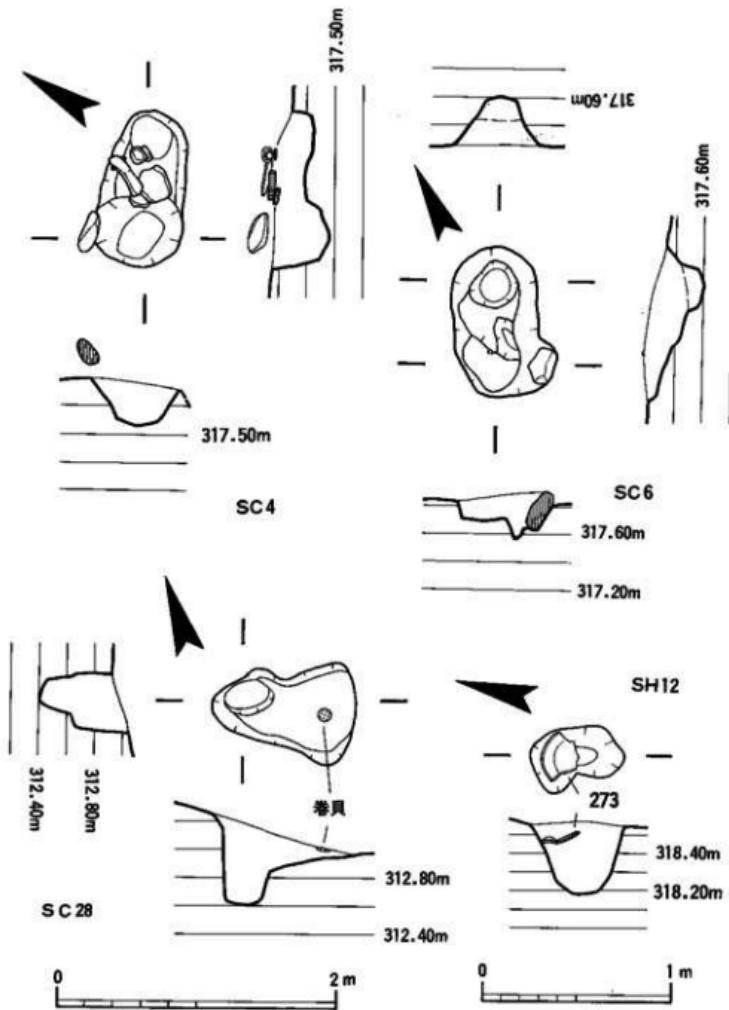


図11 土坑・小穴実測図(1/40・SH12のみ1/30)

2. 遺物

前述の通り、土器の分布域は時期ごとに異なる。出土状況を見ると、おそらくは生活面の重複や、後世の擾乱等の影響もあり、原位置を止めていないものと推測される。従って垂直位置から編年的な考察に関する情報を得ることは不可能と考えた。そこで土器については、まず遺物分布に見られるまとまりごとに分け、それらを形態により分類していくという順序で記述を進める。

石器についても、時期ごとの特徴を捉えていかねばならないが、その性格上、移動の可能性が高いと考えられる。ここでは一括して取り扱い、必要に応じて編年的な検討を加える。

前期～中期の土器(図12～14)

出土量は他の時期に比べて少なく、総破片数は約50点程である。

1・2は横位・斜位の突帯を巡らす轟B式土器である。3はD字形の密な連点文を施す。鉢形を呈するものか。4～6は曾畠式土器の系統の一群、7～10は貝殻腹縁圧痕文、連点文、押引文を施す一群、11は細い刻目突帯を付するもので、10・11は深浦式土器系統のものであろうか。また13～16は2・4条単位の平行沈線文を施す轟C・D式土器、17は外面継位の短沈線文を施すものである。1～3が前期前葉、4～17が前期後葉から終末と位置付けられよう。

19～21は同一個体と考えられる。口縁部が内湾し、細い刻目突帯を有する。22は2段R Lの繩文を地文とし、2条の突帯を巡らす。船元式土器の範疇に属するものと考えられる。

後期の土器(図15～33)

Z～B-18～20区を中心に多量に出土しており、出土量はコンテナ箱にして65箱分に上る。

分類は、まず形式(器種)の大別を行ない、精製・粗製の差異、口縁部の断面形、文様によりA類～H類を設定した。尚、ここで後期土器とまとめた中には、中期末の土器が含まれている可能性もあることを断っておきたい。また深鉢と鉢については、器高の求められる個体が希少であるため、判別可能なもの以外はひとくくりにする。

A類

深鉢・鉢のうち、口縁部を肥厚させる一群で、おしなべて造りがやや粗めである。在地系の日常容器と考えられる。さらに、断面形から以下に述べる8群に細分した。

- 1 (49～58) 肥厚部の下部に明瞭な段を形成する。2 (59～76) 1と比べて段が不明瞭。
- 3 (77～80) 肥厚部の中程を凹ませる。4 (81・82) 1に似るが、肥厚部の幅が狭い。
- 5 (83～120) 肥厚部の断面形が三角形を呈する。6 (121～124) 5の断面形を基調としその中程を凹ませる。7 (125～130) 5に似るが、肥厚部の幅が狭い。8 (131～138) 肥厚があまり顕著でない。尚、口縁部を全く肥厚させないので、文様・焼成の特徴からA類との共通性の認められる一群もここに含めた。

口縁部には、平坦口縁と波状口縁の二者が見られる。文様は肥厚部（口縁上部）に施される。1～8の各類型全てに共通して、横・斜位の沈線文、貝腹縁压痕文、連点文が見られる。1・2には無文の個体もある。調整はナデが主であるが、貝殻条痕も用いられる。このA類は、北久根山式土器の深鉢に類似し、同時期と推定される一群が主体となるが、107などの市来式土器も認められる。また63・64などからは、出水式土器の色あいが看取される。

B類 (139～141)

凹点や凹線文を特徴とする深鉢・鉢である。中期の阿高式土器の系譜を引くものである。

C類 (142～170)

沈線文や貝殻腹縁押圧による擬似繩文、竹管文を施す深鉢・鉢である。156・161など指宿式土器系統のものや、143～145など縄式土器とされる個体を含む。163は、A～19区よりまとまって出土した完形の鉢である。遺構に伴うものとも考えられたが、確認はできなかった。

D類 (171～183)

口縁部の特に肥厚しない無文土器の深鉢・鉢で、各様式に普遍的に存在していたと考えられる。出土量は最も多いが、紙数の関係で、掲載できた個体はごく一部にとどまった。

184～187は、A～Dの一部と推測されるが、所属不明の口縁部の把手・瘤状の突起であり、188～200は同じくA～D類の底部である。188～192はいわゆる網代底・木葉底の類である。

E類 (201～232)

磨消繩文土器系統の鉢・浅鉢をまとめた。ただし、216は便宜的にここに掲載しているが、阿高式土器系統に属する可能性もあり、検討を要する。このE類に包括した中には複数の系譜が存在するようであり、また時間的な幅も認められよう。201・204などの鐘崎式土器や、212などの幅の広い繩文施文帯を有する一群、213・214・217のような口縁部と肩部のみに繩文を施す一群（213は口唇部の特徴から瀬戸内地方からの影響が推測される）、出土数は少ないが、219のような西平式土器の特徴を持つ口縁部などが見られる。繩文は2段RLが多用される。230は底部の破片で、底面にも研磨が施される。

（上器実測図の凡例）

- 口縁部の傾きの不明なものは点線で示している。それ以外でも傾きに疑問のあるものは多い。
- 波状口縁のうち、Ⓐは波頂部、Ⓑはそれ以外の破片である。尚、直線での表現Ⓒは、波状口縁である、という記号である。また、小片の中には平坦口縁と波状口縁の区別の厳密につかないものもある。
- 調整のうち、ナデについては、特に図中に表現しない。ケズリに近いナデで方向のみわかる場合は矢印で示した。



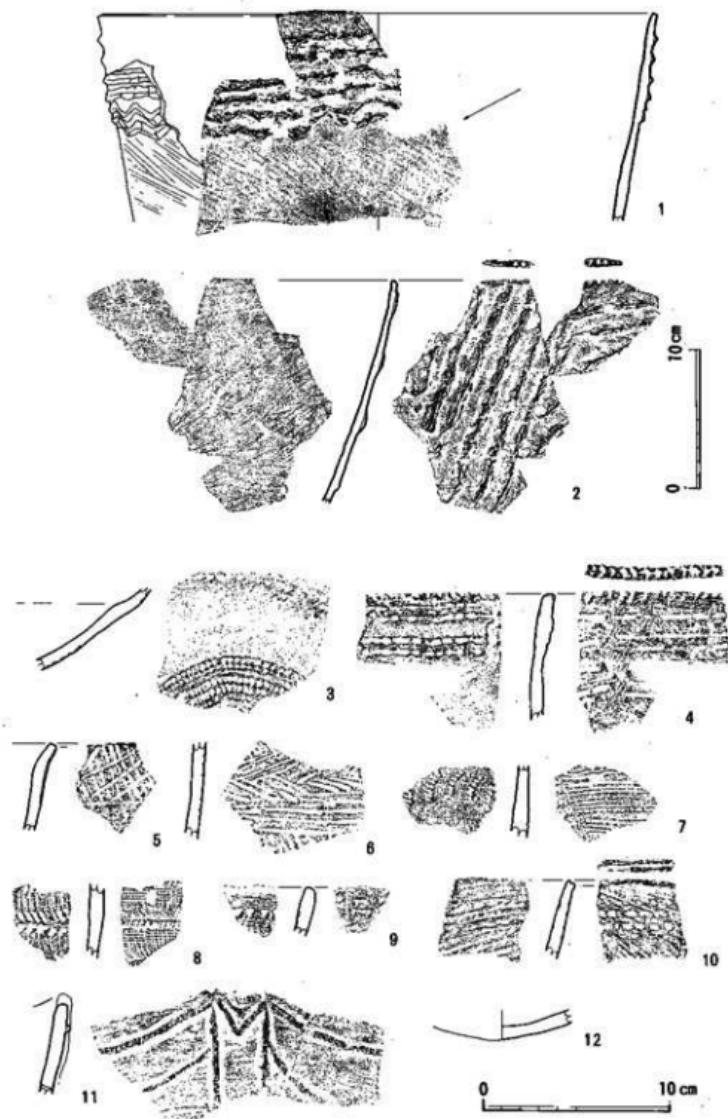


図12 縄文土器実測図(1) (1/3・1・2のみ1/4)

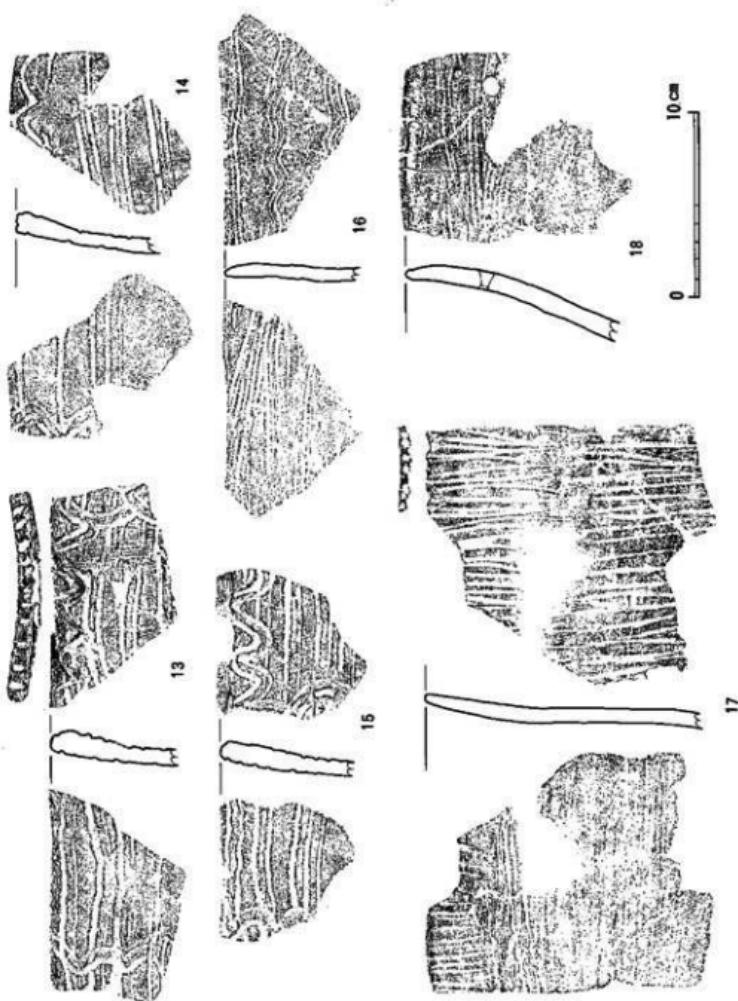


図13 縄文土器実測図 (2) (1/3)

244は形式の判別、様式の比定に苦慮した。福田KⅡ式土器の系統のものであろうか。

F類 (233~242)

脚台付の装飾浅鉢、皿をまとめた。口縁部上面を文様帶とするものが多く、沈線文、連点

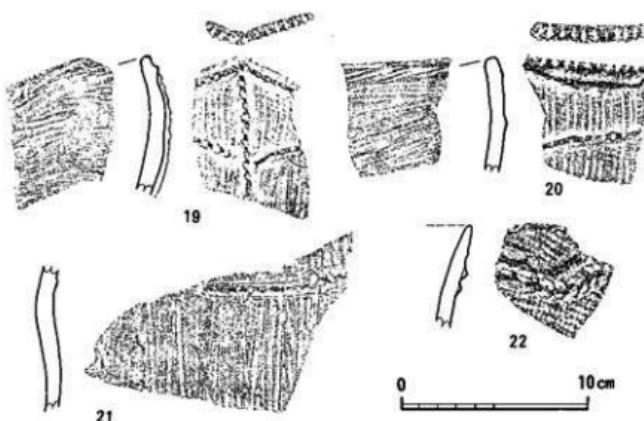


図14 條文土器実測図(3) (1/3)

文、貝殻腹縁圧痕文が施される。235は細かい貝殻腹縁圧痕文を施し擬似縄文に仕立てている。脚部文様も同様である。238・241は透かしの穿孔を有する。

G類 (243~246)

壺である(ただし前述した244については保留しておきたい)。244は口縁部を玉縁状に肥厚させるもので、三角形あるいは撥形の彫りこみによる文様を有する。ちょうど、胴部で屈曲するあたりで割れている。245は頸部と胴部の沈線間に貝殻腹縁圧痕文による擬似縄文を施す。胴部の貝殻腹縁圧痕文は、外側の沈線と頸部の沈線との間の空間と、内側の沈線の内部の空間に見られる。246は窄帯の部分に細かい貝殻腹縁圧痕文を付す。

H類 (247~258)

黒色磨研土器と考えられるものをまとめた。A・B-18・19区からE区方向にかけて少量出土している。249から253は外・内面とも研磨が施される。254~258は深鉢・鉢の底部である。下端部が外方に向かって張りだすようになる。

晩期の土器 (図34・35)

C・D-7~10区を中心に晩期該当の資料が出土している。259~270は深鉢、272~276は鉢・浅鉢、277は粗製の鉢である。底部は271などに見るよう、下端部が外方に大きく張りだす。278~283は孔列文土器で、図示しなかったものを含めて計12点の出土を見た。いずれも小片で、器形は知り得ない。

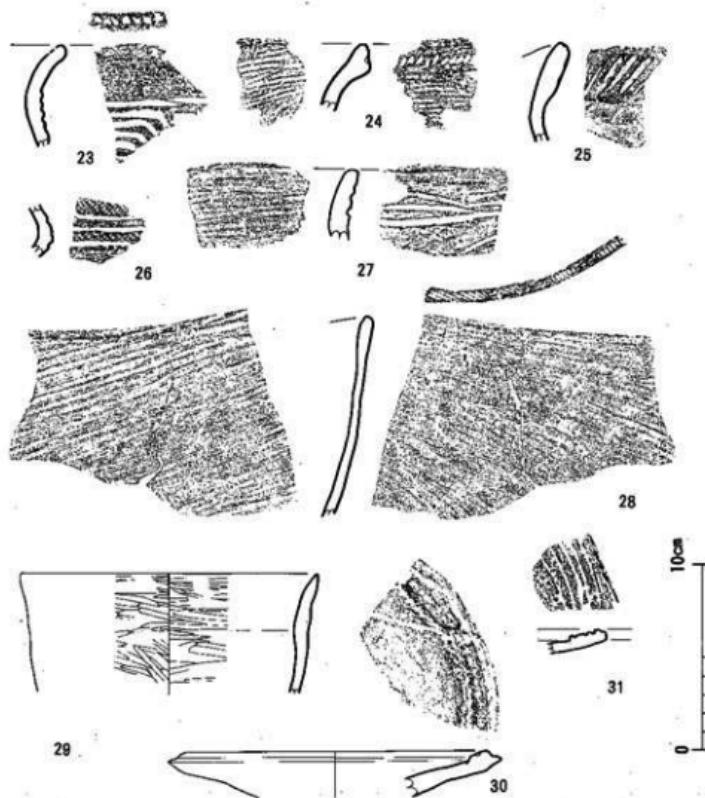


図15 縄文土器実測図(4) (1/3)

形式(器種)	深鉢・鉢			台付浅鉢皿	壺	総計
	深鉢	鉢	区別不能			
出土土器数	1	7	44	4	—	56
	52					
百分率(%)	93			7	0	

深鉢と鉢の区別は、器高が口径をこえるものを深鉢とするという基準に従ったが、必ずしも器高の判断としない個体で、推測で区別を行なっている例もある。

表1. SA2形式(器種)別出土数・比率

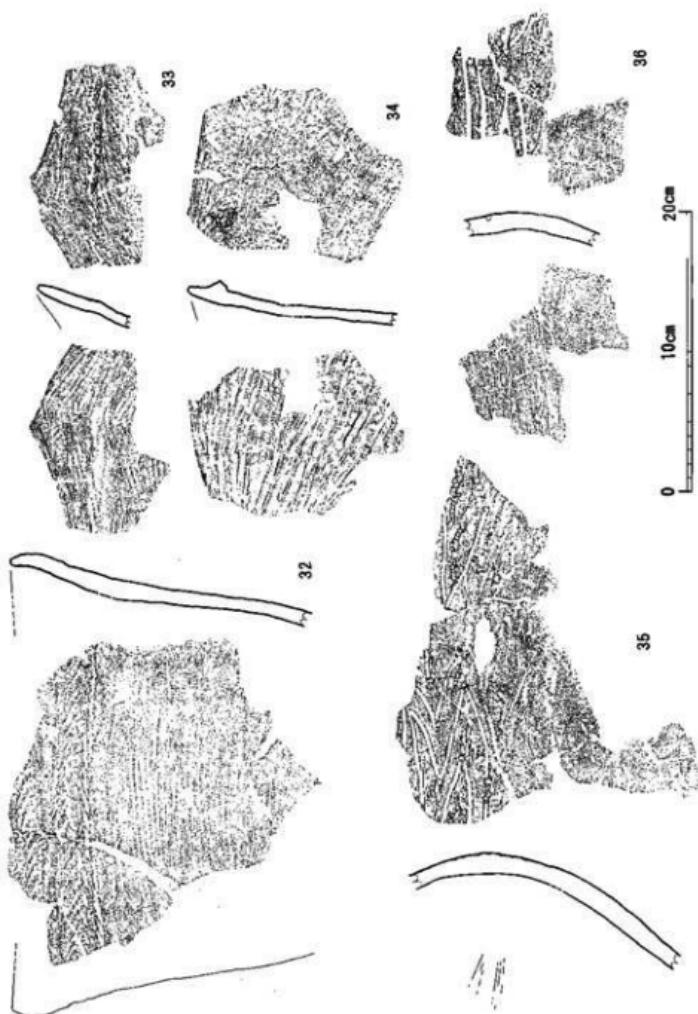


図16 縄文土器実測図(5) (1/4)

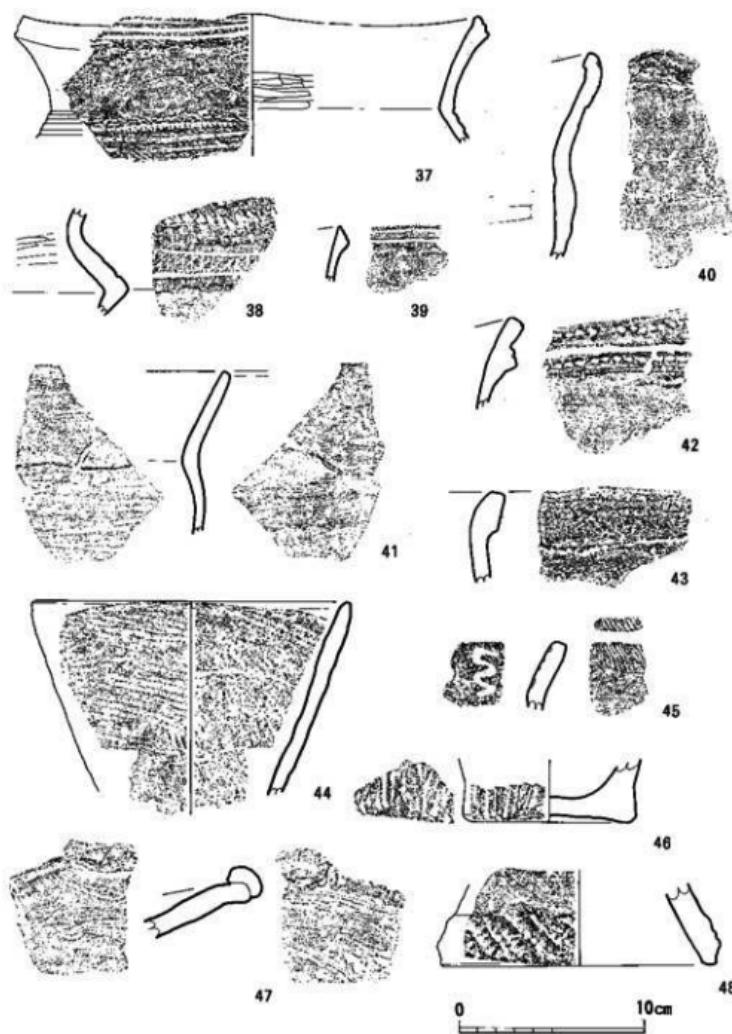


図17 縄文土器実測図 (6) (1/3)

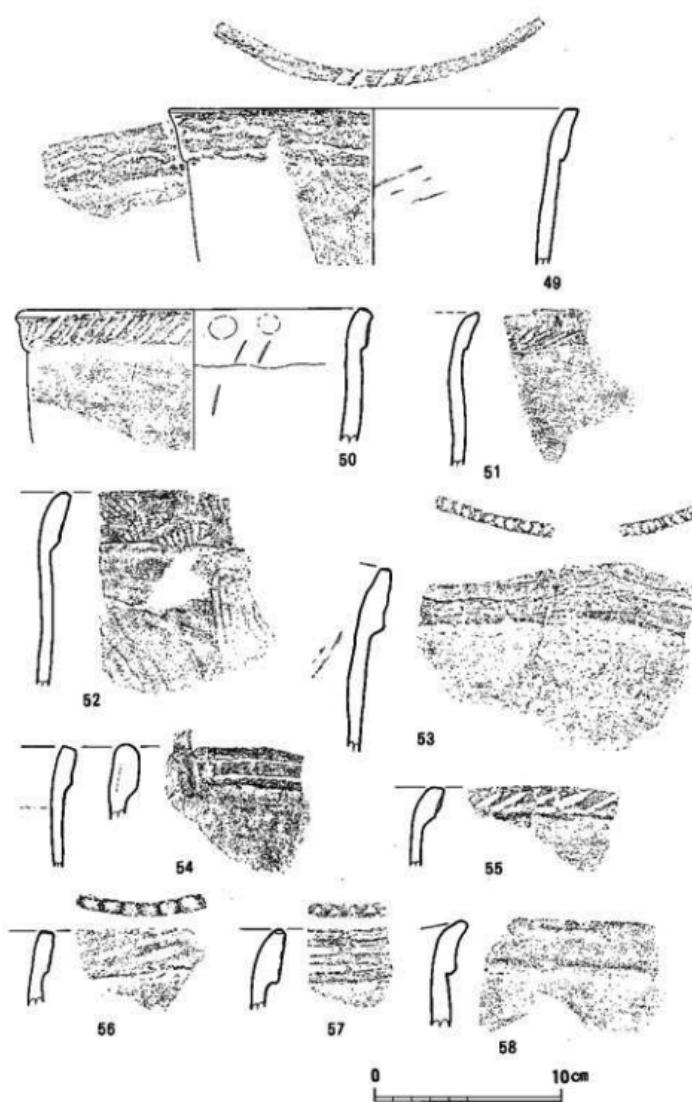


図18 縄文土器実測図(7) (1/3・59~62は1/4)

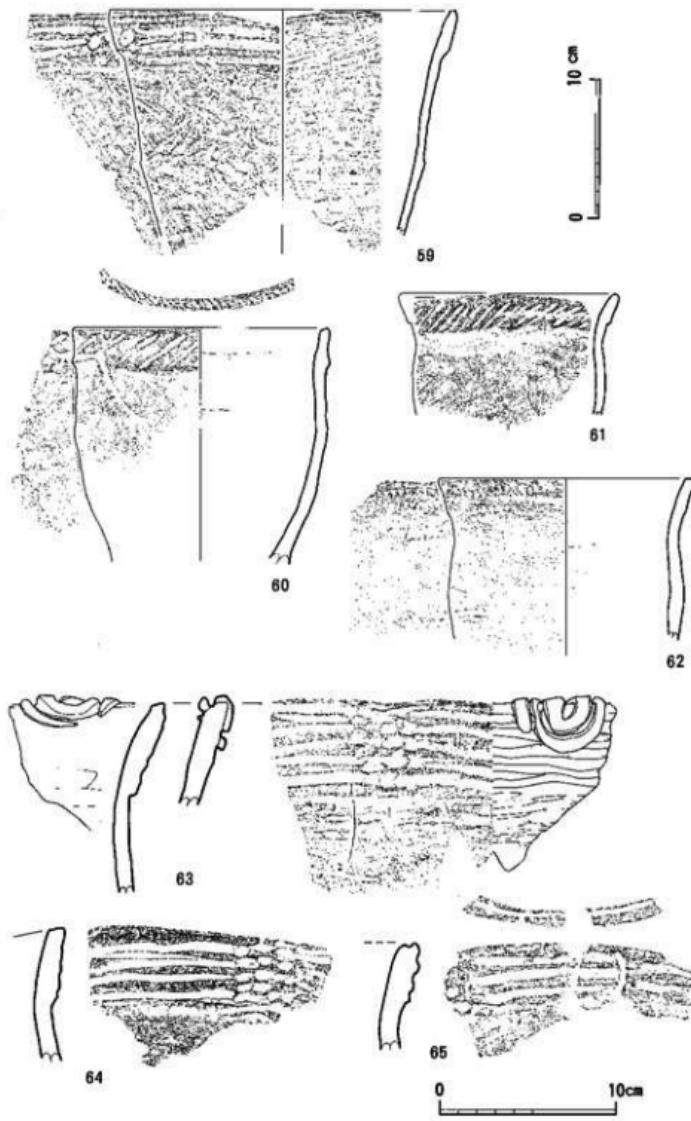


図19 縄文土器実測図 (8) (1/3)

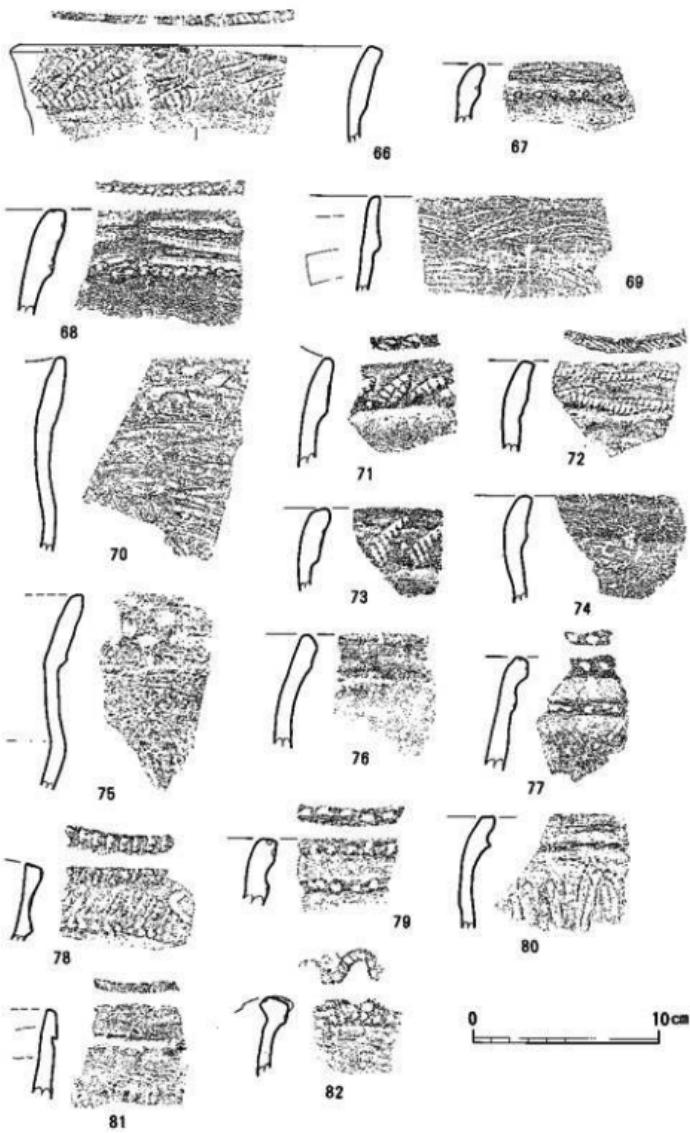


図20 繩文土器実測図(9) (1/3)

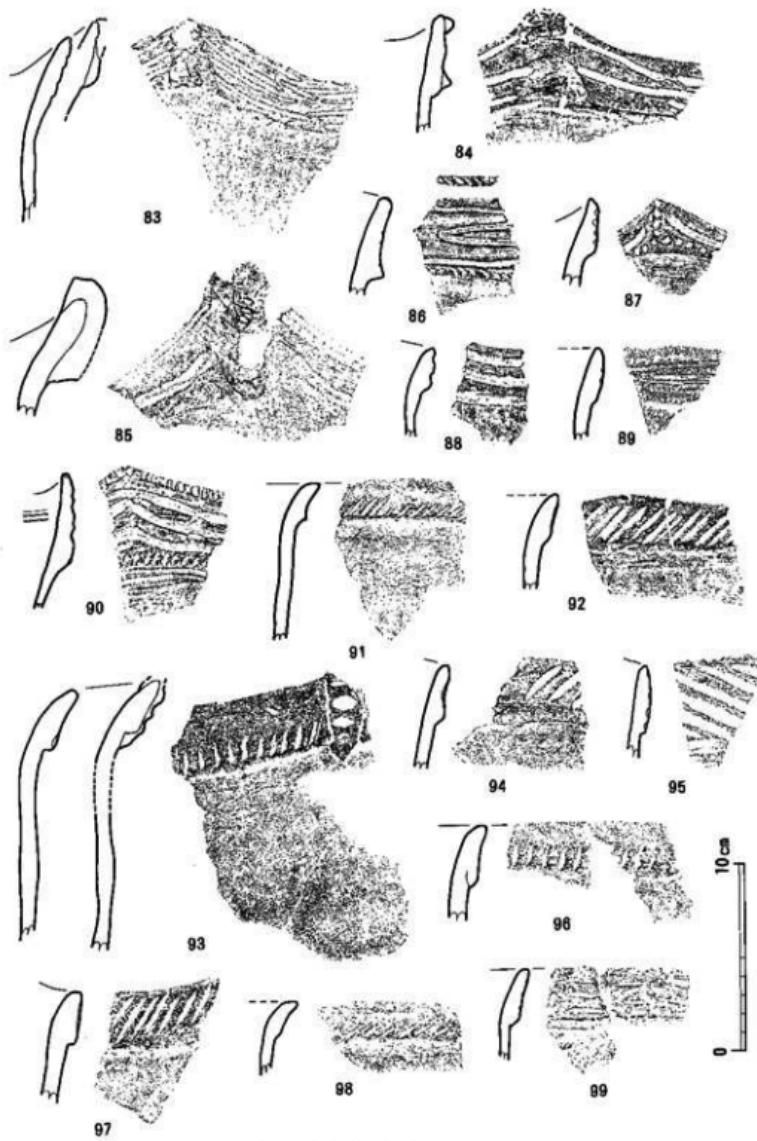


図21 縄文土器実測図 10 (1/3)

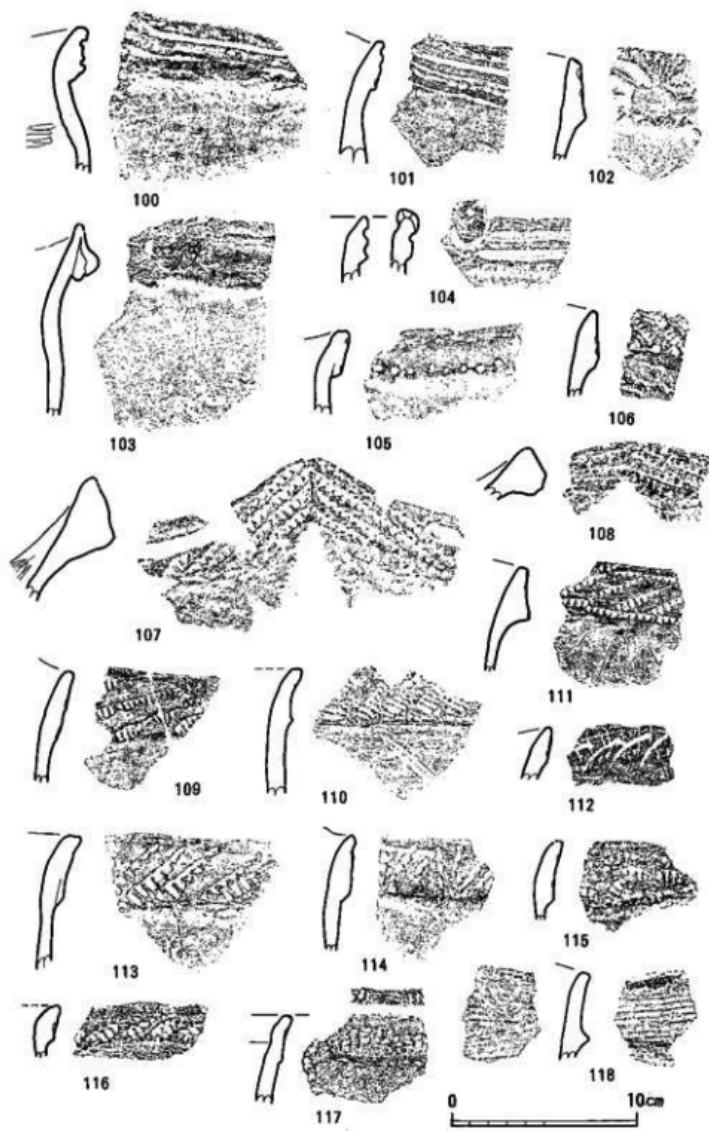


図22 繩文土器実測図 (1) (1/3)

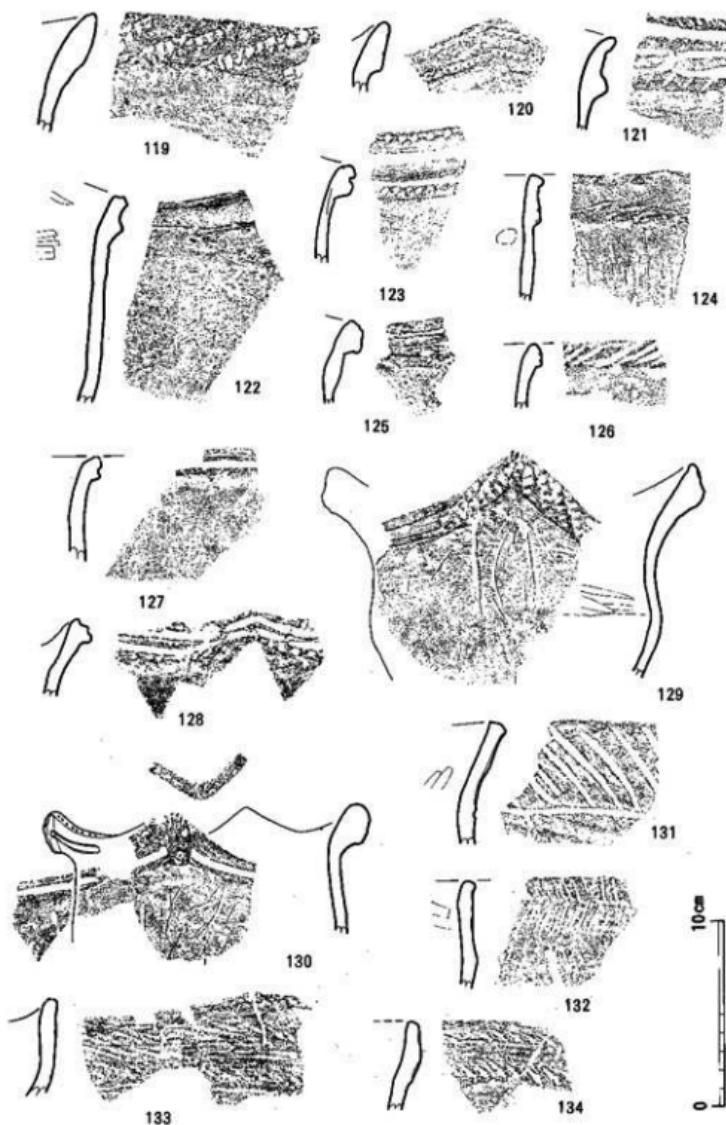


図23 縄文土器実測図 (12) (1/3)

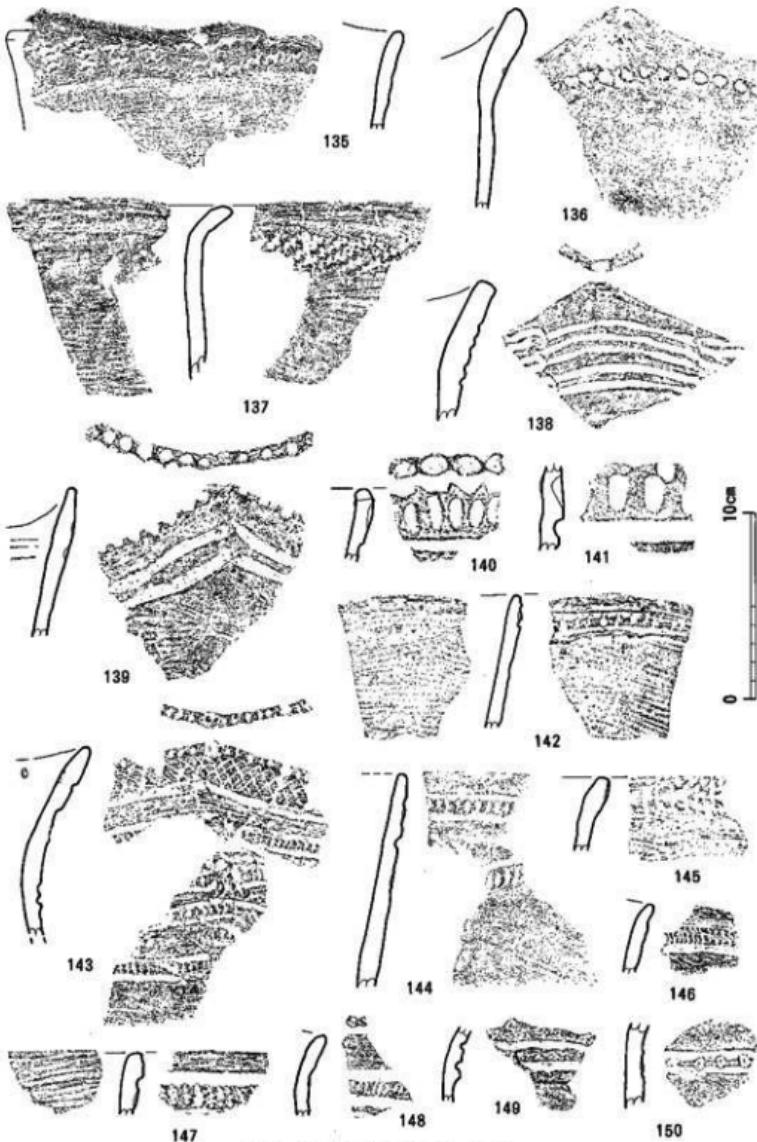


図24 縄文土器実測図 (15) (1/3)

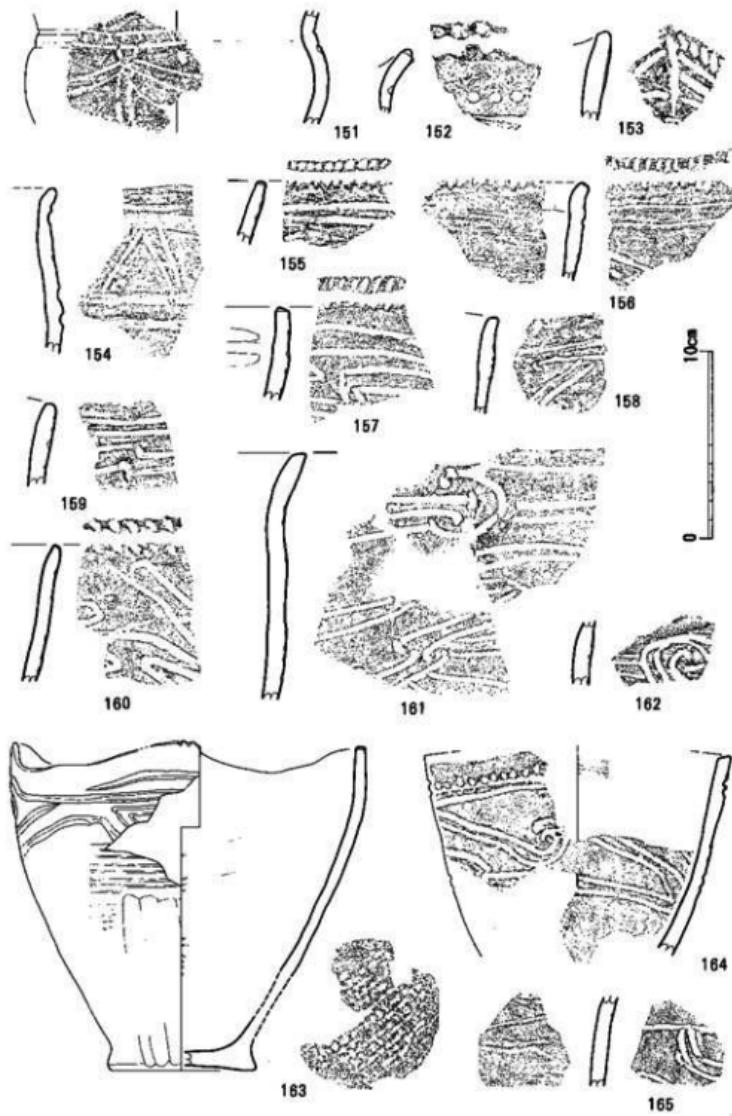


図25 縄文土器実測図 (14) (1/3)

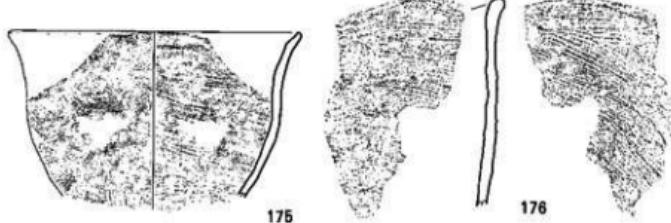
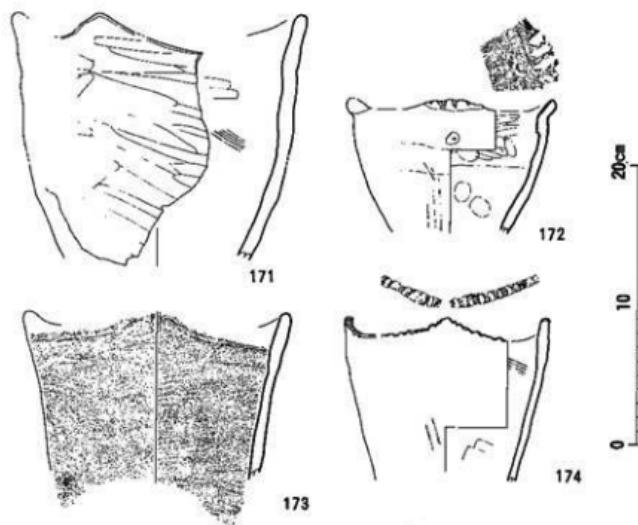
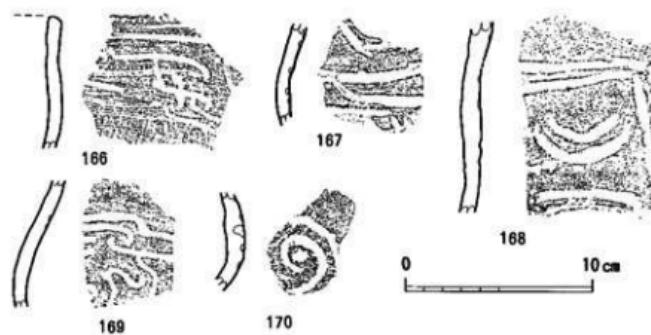


図26 純文土器実測図 (15) (1/3・146~151は1/4)

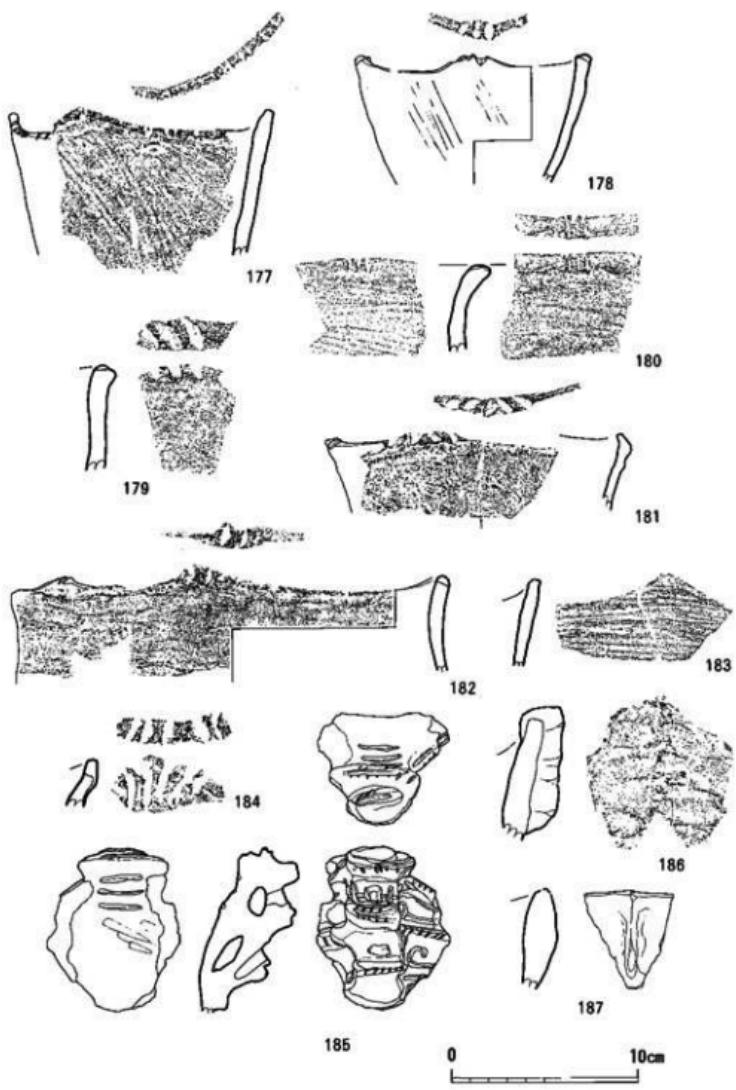


図27 縄文土器実測図 (6) (1/3)

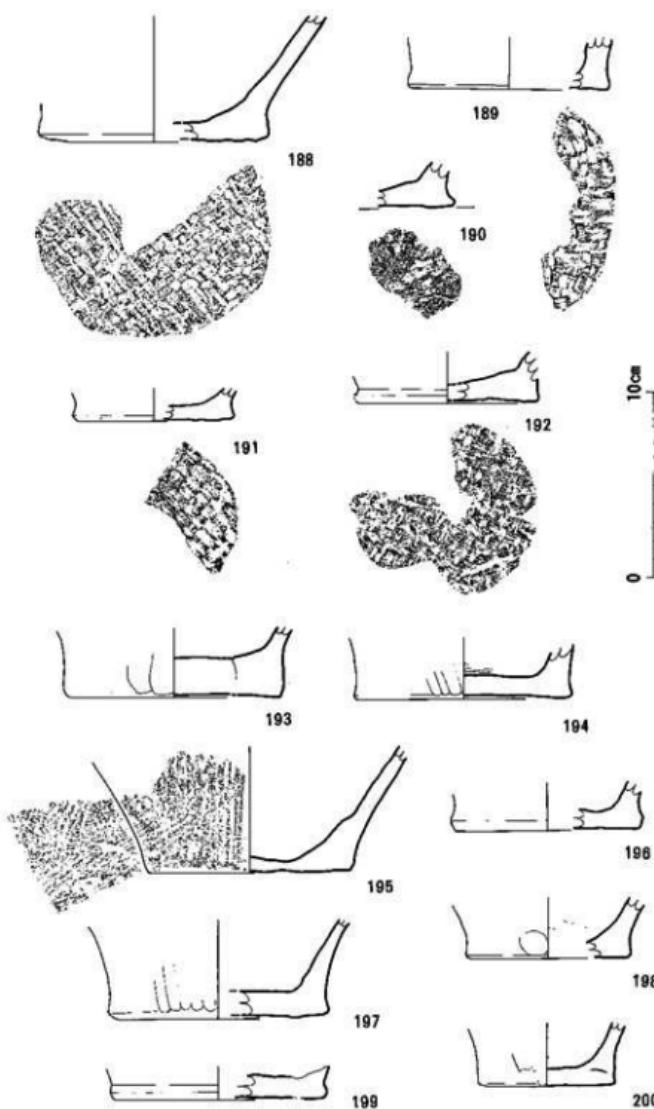


図28 縄文土器実測図 (17) (1/3)

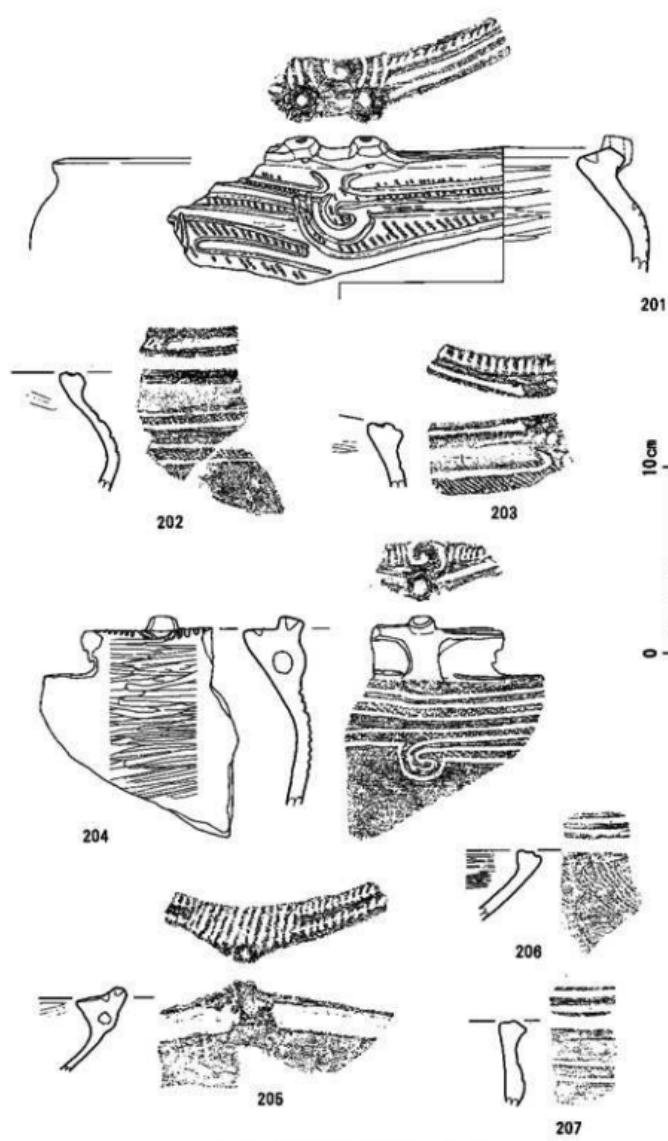


図29 繩文土器実測図 (18) (1/3)

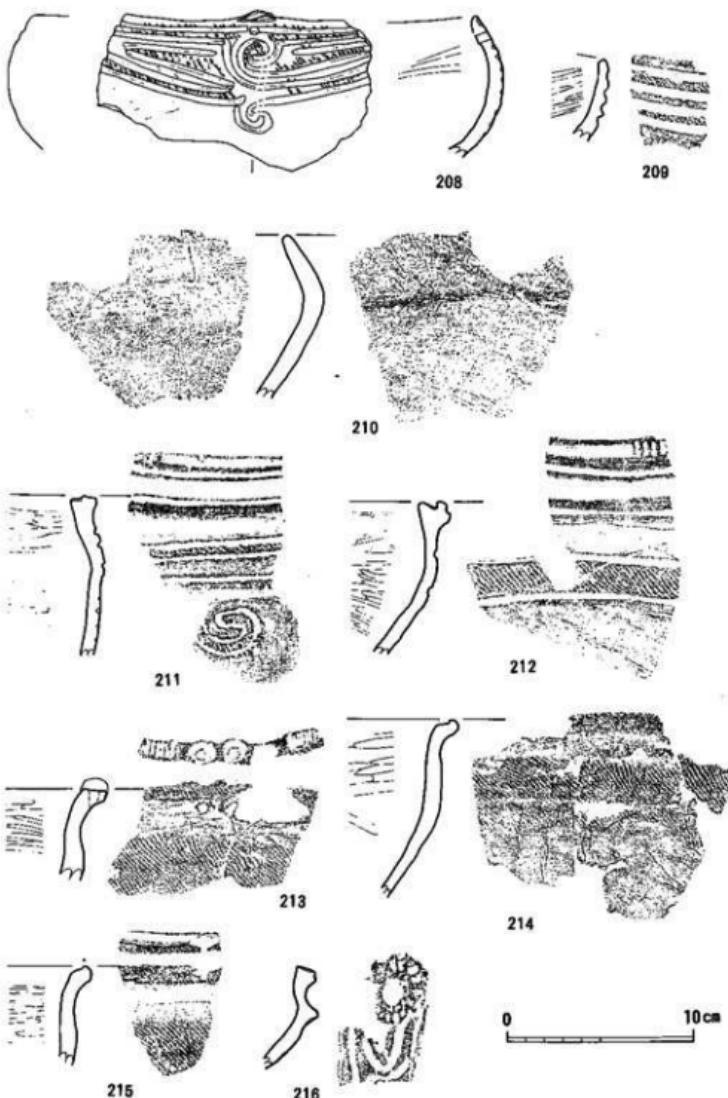


図30 縄文土器実測図 (19) (1/3)

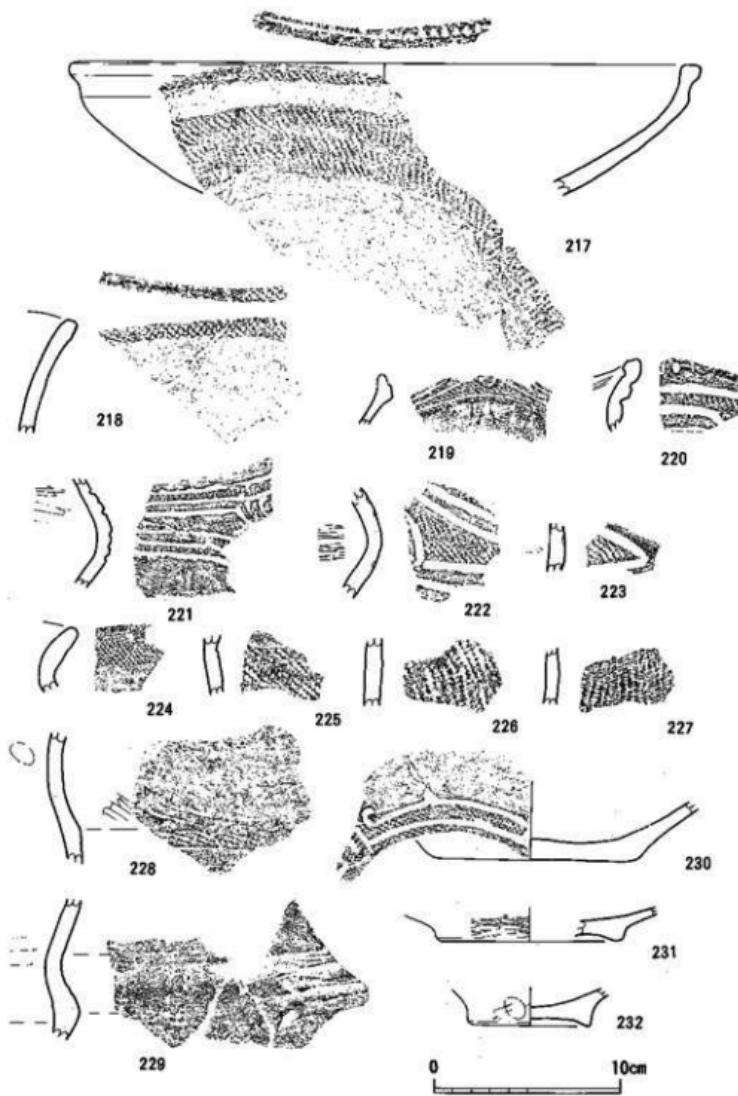


図31 縄文土器実測図 (20) (1/3)

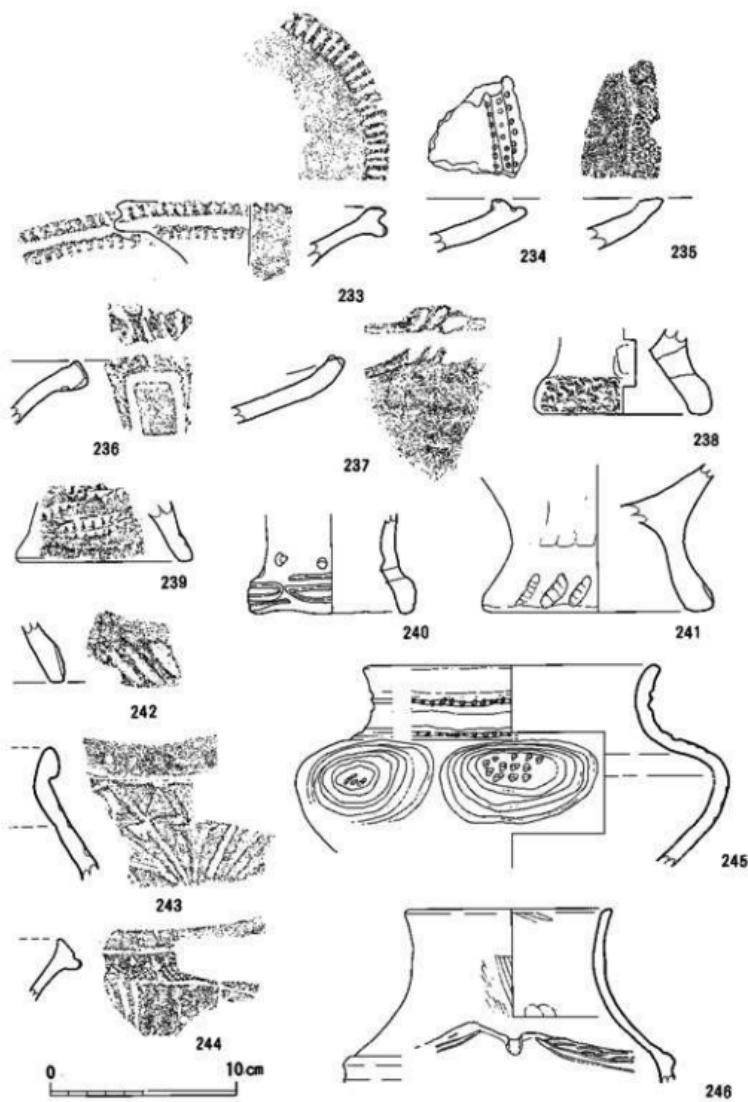


図32 繩文土器実測図(2) (1/3)

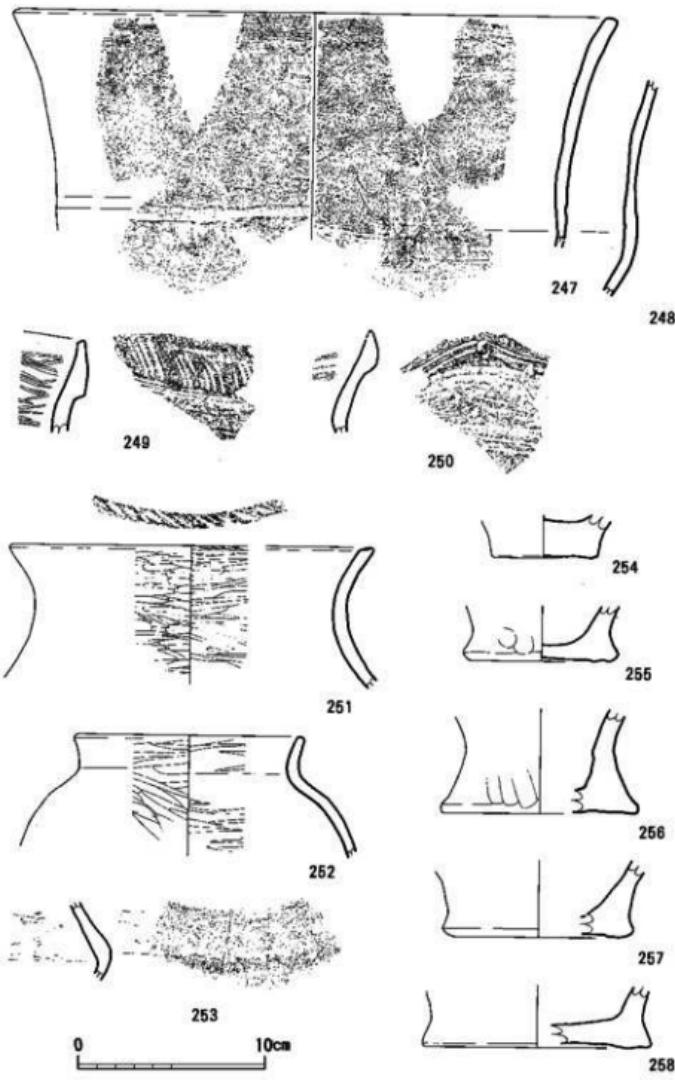


図33 縄文土器実測図 ㉙ (1/3)

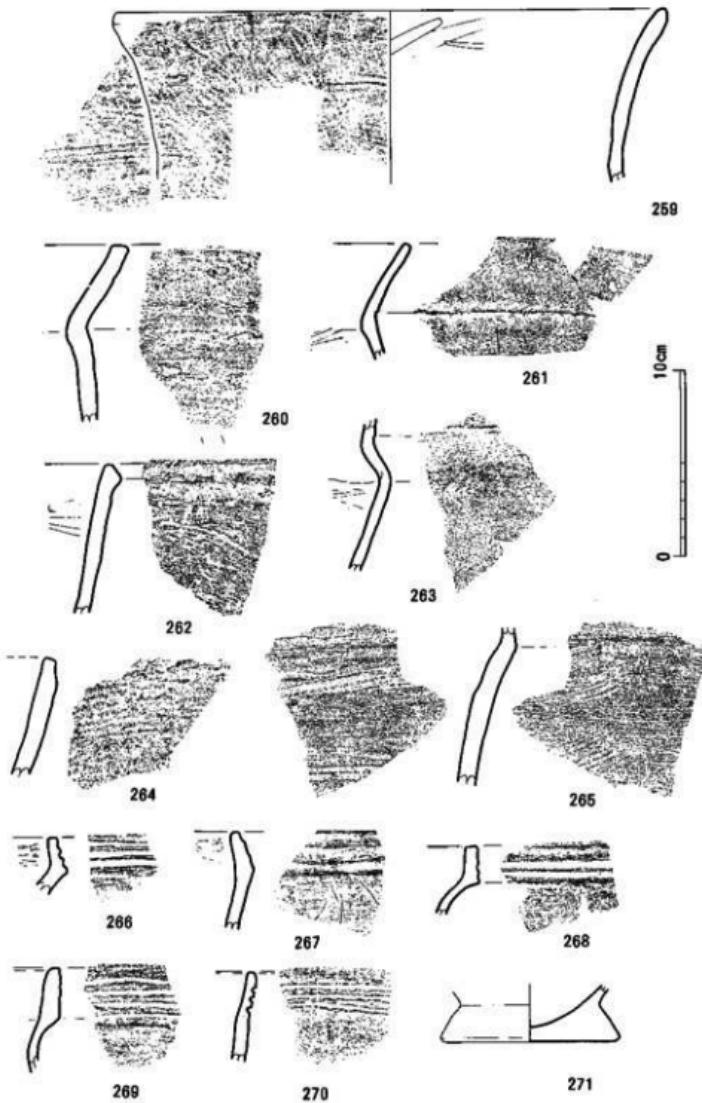


図34 橢文土器実測図 (23) (1/3)

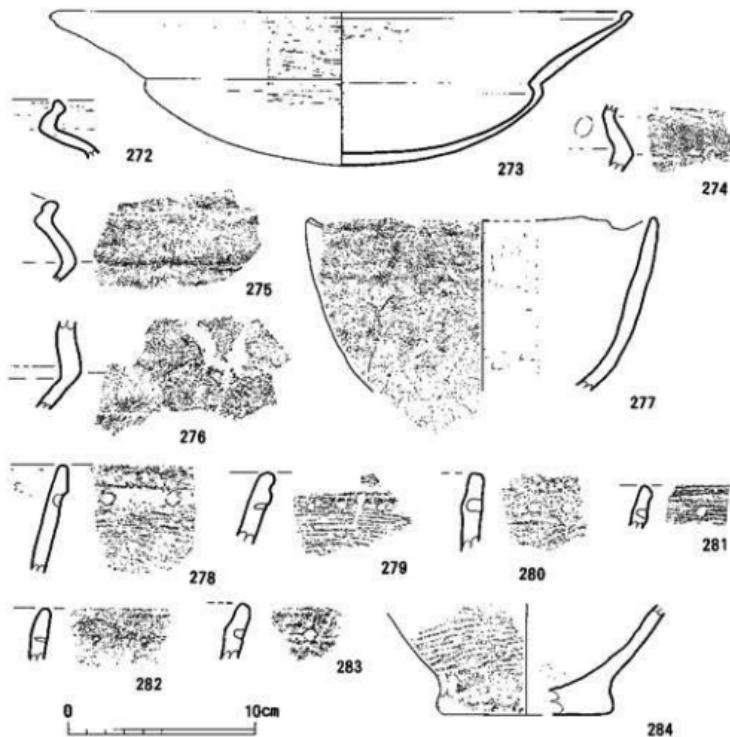


図35 繩文土器実測図 24 (1/3)

No	出土区	出土場	調査 ね よ び 文 標		附 土	色 調	備 考
			①	②			
1	D-4	b	~直線。	~マクラウド状。	1~2mmの薄片、白灰色。	青緑、褐色	③スヌ付箋
2	E-4	b	口縁部細く、腹部、下端に、	~マクラウド。	1.5~2mmの薄片状。	青緑、	④スヌ付箋
3	D-20	Ⅲ	「丁字ナガ」。 「D」字形、直線的。	丁字ナガ。	白。	白。	⑤スヌ付箋
4	D-8	Ⅲ	ノ共通の平行成綫文 △等間隔。	ナフ。斜行。	1.5mmの薄片、白色、薄灰色。	灰青緑、	⑥スヌ付箋
5	D-20	E	直線文。	ナフ。	1.5mmの薄片状。	青緑、	青緑
6	E-15	E	ナフ。短距離文。	~ナフ。	0.5~1mmの薄片、白色、薄灰色。	江戸・奈良、 近畿地方。	⑦スヌ付箋
7	C-9	E	直線短距離成綫文、斜行文。	ナフ。直線短距離成綫文	0.5~1mmの薄片、薄灰色、 0.5mmの薄片。	灰緑、	⑧スヌ付箋
8	C-10	I	直線短距離成綫文。	直線短距離成綫文	0.5~1mmの薄片、薄灰色。	青緑、	江戸・奈良
9	B-10	E	ナフ。直行文。	ナフ。直行文、直線短距離 成綫文。	0.5~0.5mmの薄片、褐色。	青緑、	⑨スヌ付箋
10	A-18	Ⅲ	~直角短距離、直点文。	~直角短距離、直点文。	0.5~2mmの薄片、青緑、薄灰色。	青緑、	江戸・奈良
11	C-19	Ⅲ	直角短距離、丁字。	ナフ。	0.5~1mmの薄片、褐色。	灰青緑、	⑩スヌ付箋
12	E-5	b	丁字短距離文。	ナフ。	1~2mmの薄片、淡青色、薄灰色。	江戸・奈 良青緑、	江戸・奈良付箋、豊見 川付箋
13	試掘坑	—	丁字短距離文、直行文。	ナフ。直行文。	0.5~2mmの薄片、深青色、薄灰色、ウニモ リ。	青、	⑪スヌ付箋
14	E-6	Ⅲ	丁点文、直行文。	同上。	0.5~2mmの薄片、褐色、薄灰色。	江戸・奈	江

No.	出土区	出土層	調査および文様		地 質	色	調	備考
			④	⑤				
15	E-6	b	ツバ、鉢底文。	同上	0mm以下は土色、0-1mmは褐色、1-2mmは褐色、2-3mmは褐色、3mm以上は褐色。	に赤い緑	明緑	④スズ付帯
16	D-10	IV	平行波線文。	メー波線。	1-2mmの褐色。	灰黒	暗灰黒	④スズ付帯
17	B-3	b	波線文、口縁周辺	波線文。	4mm以上の白色、灰色、褐色、少量。	に赤い緑	黄	④スズ付帯 赤化物付帯
18	E-3 D-3	b	ナゲ、口縁周辺。	→口縁周辺の波線。ナゲ。	0.5-1mmの乳白色、褐色、多量。	黒	黒	手取
19	E-4	b	口縁周辺。	メタリック→波線。	0.5mm以下は乳白色、褐色、少量。	に赤い緑	に赤い緑	④スズ付帯
20	D-4	b	同上。	メタリック、メタリック波線。	1-2mmは褐色、浅黄色、多量。	に赤い緑	に赤い緑	④スズ付帯
21	D-4	b	下部斜面。	メタリックに近いナゲ。	0.5-4mmの乳白色、灰色、多量。	明緑	緑	④スズ付帯
22	B-9	II	鰐文(波線L)実測	ナゲ。	0.5-2mmの乳白色、褐色。	に赤い緑	④スズ付帯	
23	S A 1	—	ナゲ、鉢底文。	ナゲ。	1mm以下の乳白色、白色、褐色、少量。	緑	に赤い緑	
24	S A 1	—	透点文、凸凹文。	口縁周辺。	透点文。	浅黄	明緑	④スズ付帯
25	S A 1	—	ナゲ、可塑性文。 口縁周辺文。	ナゲ。	1-2mmの赤褐色、少量。	黒	に赤い緑	④スズ付帯
26	S A 1	—	透点文(波線L)	ナゲ。	1mm以上の乳白色。	灰黒	灰黒	
27	S A 1	—	ナゲ、鉢底文。	→実測波線。	0.5-3mmの乳白色、灰色、少量。	に赤い緑	に赤い緑	
28	S A 1	—	メー直線波線、ナゲ、口縁周辺。	メタリック。	1mmの赤褐色、乳白色、多量。	に赤い緑	に赤い緑	④スズ付帯
29	S A 1	—	メー ナゲ。	メタリック。	4mm以上の白色、褐色。	黒	に赤い緑	④スズ付帯
30	S A 1	—	ナゲ。	ナゲ。	3-5mmの乳白色。	緑	緑	
31	S A 1	—	ナゲ。	ナゲ。	1mm以下の乳白色。	に赤い緑	に赤い緑	
32	S A 2	—	凸凹波線、 凸凹波線柱状。	凸凹波線。	0.5-3mmの乳白色、白色、浅灰色。	緑	に赤い緑	④スズ付帯
33	S A 2	—	同上。	凸凹波線。	1mm以下の乳白色、白色、褐色。	緑	に赤い緑	④スズ付帯
34	S A 2	—	メー直線波線、ナゲ。	→実測波線。	1-4mmの乳白色、多量。	に赤い緑	青緑	青緑
35	S A 2	—	ナゲ、鉢底文。	ナゲ。	3-5mmの乳白色。	緑	緑	
36	S A 2	—	メー直線波線。	ナゲ。	1-2mmの白色、白色、褐色、灰色。	緑	に赤い緑	④スズ付帯
37	S A 2	—	透点文。ナゲ。透点文。	ナゲ。メタリックに近いナゲ。	0.5-3mmの乳白色、褐色、白色。	に赤い緑	明緑	
38	S A 2	—	1.0g。凸凹文。	ナゲ。	0.5-3mmの白色、褐色、白色。	灰黒	暗灰黒	
39	S A 2	—	ナゲ、鉢底文。	ナゲ。	1mm以下の乳白色、褐色、白色。	に赤い緑	青緑	
40	S A 2	—	ナゲ、鉢底文。	メタリックナゲ。ナゲ。	0.5-3mmの乳白色、褐色、白色。	に赤い緑	明緑	④スズ付帯 赤化物付帯
41	S A 2	—	メー ナゲ。	ナゲ。	0.5-3mmの白色、白色、褐色。	緑	緑	④スズ付帯
42	S A 2	—	ナゲ、透点文、凸凹文。	ナゲ。	0.5-3mmの乳白色、白色。	に赤い緑	明緑	④スズ付帯
43	S A 2	—	ナゲ。	ナゲ。	0.5-3mmの白色、白色。	緑	に赤い緑	
44	S A 2	—	メー直線波線。	メタリック。	1-5mmの白色、白色、白色。	緑	に赤い緑	④スズ付帯 赤化物付帯
45	S A 2	—	鰐文(波線L)。ナゲ。	透点文(波線文)。	0.5-3mmの白色。	灰黒	暗灰黒	④スズ付帯
46	S A 2	—	ナゲ。ナゲに近いナゲ。	ナゲ。	0.5-1mmの乳白色、白色。	灰黒	暗灰黒	
47	S A 2	—	→実測波線。ナゲ。	→実測波線。	0.5-3mmの乳白色、白色。	緑	に赤い緑	④スズ付帯 赤化物付帯
48	S A 2	—	ナゲ、鉢底周辺透点文。	ナゲ。	0.5-3mmの白色、白色、白色。	に赤い緑	青緑	
49	B-16	—	ナゲ。凸凹波線柱状。	ナゲ。	1mmの白色、白色、白色。	に赤い緑	明緑	④ 赤化物付帯
50	E-20	II	ナゲ、鉢底透点文。	ナゲ。	0.5mm以下の白色。	灰黒	緑	④スズ付帯
51	B-19	III	同上。	ナゲ。	1-2mmの白色、白色。	緑	緑	④スズ付帯 赤化物付帯
52	B-18	III	ナゲ、鉢底周辺透点文。	ナゲ。	0.5-1mmの乳白色、白色。	灰黒	に赤い緑	④スズ付帯
53	B-19	IV	ナゲ、凸凹文。	ナゲ。	1-2mmの白色、白色。	に赤い緑	明緑	④スズ付帯
54	B-19	III	ナゲ。凸凹文。	ナゲ。	1.5mm以下の白色。	に赤い緑	明緑	④スズ付帯
55	B-18	III	ナゲ、鉢底透点文。	ナゲ。	1.5-2mmの白色。	明緑	明緑	
56	A-19	III	ナゲ、透点文、凸凹文。	ナゲ。	0.5-3mmの乳白色、0.5-2mmの白色。	灰黒	に赤い緑	
57	B-18	IV	同上。	ナゲ。	0.5-3mmの乳白色、白色。	灰黒	に赤い緑	
58	B-19	III	→ナゲ。	ナゲ。	1-2mmの乳白色、白色。	明緑	明緑	④スズ付帯
59	A-19	IV	貝壳文の複合。	貝壳透点。	1-2mmの白色、白色、白色。	に赤い緑	に赤い緑	④スズ付帯 貝壳付帯下層
60	B-19	III	ナゲ、鉢底透点文。	ナゲ。	1-3mmの白色。	に赤い緑	青緑	④ 貝壳物、付帯。

表3 縄文土器観察表(2)

No.	出土区	出土層	調査および文様	土		色調	備考
				①	②		
61	B-19	Ⅲ	丁寧なナデ。褐色斑紋。 口部は細かい波状。	丁寧なナデ。 0.5-1mmの褐色斑紋。	0.5-2mmの褐色斑紋。 0.5-1mmの褐色斑紋。	に高い層 に低い層 灰褐色	スヌ付 良化物付 スヌ付
62	A-19	Ⅳ	ナデ。瓦面細かい波状。 口部は細かい波状。	→ナデ。	0.5-3mmの褐色斑紋。	に高い層 灰褐色	スヌ付
63	B-18	Ⅲ	丁寧なナデ。波状文。 口部は細かい波状。	ナデ。	1-4mmの褐色斑紋。 0.5-2mmの褐色斑紋。	褐	斜付実物
64	B-18	Ⅳ	ナデ。波状文。口部は細かい波状。	ナデ。	0.5-3mmの褐色、灰色地、少斑。 透明感有り、多斑。	に高い層 に低い層	
65	B-18	Ⅴ	ナデ。波状文。口部は細かい波状。	ナデ。	0.5-3mmの褐色地、透明感有り、多斑。 2mm以下の褐色斑紋。	褐色	信 スヌ付
66	B-18	Ⅴ	ナデ。口部は細かい波状。 口部は細かい波状。	→ナデ。	0.5-1mmの白色。	白	灰褐色
67	B-19	Ⅳ	ナデ。網目文。	ナデ。	0.5-3mmの白色。	白	灰褐色
68	B-15	Ⅳ	ナデ。網目文。波状文。	ナデ。	0.5-3mmの白色。 0.5-2mmの白色。	白	灰褐色
69	B-18	Ⅲ	波状文。口部は細かい波状。	ナデ。	2mmの褐色地。 0.5mm以下の白色。	褐	灰褐色
70	A-19	Ⅳ	ナデ。波状文。	ナデ。	0.5-3mmの褐色地。 0.5-2mmの白色。	に高い層 に低い層 白	良化物付
71	Z-19	Ⅴ	ナデ。口部は細かい波状。 口部は細かい波状。	ナデ。	0.5-3mmの褐色地。 0.5-2mmの白色。	白	良化物付
72	B-18	Ⅳ	網目。	ナデ。	0.5mm以下の白色。	白	白
73	A-19	Ⅳ	ナデ。口部は細かい波状。	ナデ。	1mmの白色。	白	白
74	B-19	Ⅳ	ナデ。	ナデ。	2mmの褐色地、透明、少斑。 1mmの白色。	褐色 白	モリーフ スヌ付
75	A-19	Ⅳ	ナデ。波状文。	ナデ。	1-2mmの褐色地、白色。	白	白 スヌ付
76	A-19	Ⅳ	ナデ。波状文。	ナデ。	0.5-1.5mmの褐色地。 2mmの白色。	白 白	良化物付
77	B-18	Ⅳ	ナデ。波状文。口部は細かい波状。	ナデ。	1mm以下の白色地。 0.5-1mmの白色。	白	白
78	A-15	Ⅳ	ナデ。口部は細かい波状。 口部は細かい波状。	→貝殻底面。ナデ。	1mmの褐色地、白色、乳白色。	白 灰褐色	
79	B-18	Ⅳ	ナデ。波状文。口部は細かい波状。	ナデ。	1-2mmの褐色地、白色。	白	白
80	B-19	Ⅳ	1.5-2mmの波状。	ナデ。	0.5-2mmの褐色地、白色地、少斑。 1-1.5mmの褐色地、白色地。	白	良化物付 スヌ付
81	Z-19	Ⅳ	ナデ。	ナデ。	0.5-3mmの褐色地、白色地。	白	白 良化物付
82	B-18	Ⅳ	ナデ。波状文。	ナデ。	0.5-2mmの褐色地、2mmの褐色地を多斑。 褐色地を少斑。	白	白 良化物付
83	B-19	Ⅳ	ナデ。波状文。	ナデ。	0.5-3mmの褐色地、透明感有り、少斑。	白	白
84	B-18	Ⅳ	網目。	ナデ。	0.5-3mmの褐色地、白色地、少斑。 0.5-2mmの白色地、白色地、少斑。	白 白	スヌ付 良化物付 斜付実物
85	B-19	Ⅳ	ナデ。波状文。	ナデ。	0.5-3mmの褐色地、白色地、少斑。 0.5mmの白色地、少斑。	白	白 良化物付
86	B-19	Ⅳ	ナデ。波状文。 口部は細かい波状。	→ナデ。	1mmの白色地、少斑。 0.5-1mmの白色地、少斑。白色地有り。	白 白	白 良化物付
87	B-19	Ⅳ	ナデ。波状文。波状文。	→ナデ。	0.5-3mmの褐色地、白色地。 0.5-1mmの白色地。	白	白
88	A-18	Ⅳ	ナデ。波状文。	ナデ。	1mmの透明感有り、0.5-3mmの褐色地、白色地。 透明感有り、少斑。	白 白	白 良化物付
89	B-18	Ⅳ	ナデ。波状文。 →貝殻底面。	ナデ。	1mmの白色地、少斑。 0.5-1mmの白色地、白色地、少斑。	白	白 スヌ付
90	B-19	Ⅳ	一見波状。波状文。波状文。 口部は細かい波状。	ナデ。→貝殻底面。	0.5-2mmの褐色地、白色地、少斑。 0.5-1mmの白色地、白色地、少斑。	白 白	白 良化物付
91	B-19	Ⅳ	ナデ。波状文。	ナデ。	0.5-3mmの褐色地、白色地。	白	スヌ付
92	B-18	Ⅳ	網目。	ナデ。	0.5-2mmの褐色地、白色地、少斑。 0.5-1mmの白色地、白色地、少斑。	白	白 スヌ付
93	B-18	Ⅳ	網目。	ナデ。	0.1-2mmの白色地、白色地、少斑。	白	白 スヌ付 斜付実物
94	B-19	Ⅳ	網目。	ナデ。	1-3mmの白色地、透明感有り。	白	白
95	A-18	Ⅳ	網目。	ナデ。	0.5-1mmの白色地、白色地、少斑。	白	白
96	B-18	Ⅳ	丁寧なナデ。	丁寧なナデ。	0.2-0.4mmの褐色地、褐色地、石質。	白 白	入付 良化物付
97	B-19	Ⅳ	網目。	ナデ。	0.5-3mmの褐色地、透明感有り。 1-1.5mmの褐色地。	白	白 良化物付
98	B-19	Ⅳ	網目。	ナデ。	1mmの白色地、白色地、透明感有り、少斑。	白	白 良化物付
99	B-19	Ⅳ	1.5-2mmの波状。	ナデ。	0.5-1mmの褐色地、白色地、白色地。	白	白 良化物付
100	B-18	Ⅳ	1.5-2mmの波状。	ナデ。	0.5-1mmの褐色地、白色地、少斑。	白	白 良化物付
101	D-20	Ⅲ	ナデ。波状文。波状文。	→ナデ。	0.5-1mmの褐色地、白色地、透明感有り。 0.5-1mmの褐色地、白色地。	白 白	入付 良化物付
102	A-18	Ⅳ	網目。	ナデ。	1mmの白色地、白色地。	白	白 斜付実物
103	D-20	Ⅲ	ナデ。波状文。	ナデ。	0.5-1mmの褐色地、白色地、白色地。	白	スヌ付 良化物付
104	B-18	Ⅳ	ナデ。波状文。 口部は細かい波状。	ナデ。	1mmの白色地、白色地、0.5mmの透明感有り。 7mmの透明感有り、5mmの透明感有り。	白	白 良化物付
105	D-21	Ⅲ	ナデ。波状文。 口部は細かい波状。	ナデ。→貝殻底面。	0.5-3mmの透明感有り、白色地。	白	白 良化物付

表4 繩文土器観察表(3)

No.	出土区	出土層	圓盤および文様		土	色調		備考
			◎	◎		◎	◎	
106	A-18	III	ナデ。貝殻面模印文。	→ナデ。	0.5-3mmの赤色、褐色地、少量。 1mmの褐色地、少量。	に古い赤褐色 灰褐色	灰	④ スト付番
107	B-19	IV	ナデ。貝殻面模印文。	ナデ。	2mmの白色、1-3mmの褐色地、多量。	明るめ 暗め	暗め	
108	A-19	III	ナデ。貝殻面模印文。	ナデ。	1-2mmの白色、褐色地、 0.5-1mmの褐色、灰褐色。	に古い褐色 灰褐色	灰褐色	
109	A-18	II・III	ナデ。	ナデ。	0.5-3mmの褐色、褐色、白色地。	に古い褐色 灰褐色	暗め	
110	B-18	III	ナデ。貝殻面模印文。 口沿部。貝殻面模印文。	ナデ。	1.5mmの白色、褐色地、黑色地。	に古い褐色 灰褐色	褐色	
111	B-19	IV	ナデ。貝殻面模印文。 口沿部。貝殻面模印文。	ナデ。	1mmの白色、乳白色、白色地、少量。 1mmに少しつぶれ。	に古い赤褐色 灰褐色	灰褐色	
112	B-18	III	ナデ。貝殻面模印文。貝殻面模印文。	→貝殻面模印文。ナデ。	0.5-2mmの褐色、乳白色、灰褐色地。	に古い褐色 灰褐色	灰褐色	
113	A-18	IV	ナデ。貝殻面模印文。 口沿部。江戸文。	ナデ。	0.2-2mmの褐色、灰褐色、白色地。	に古い褐色 灰褐色	灰褐色	④ スト付番 変化物付番
114	A-18	III	口沿部。	ナデ。	0.5-3mmの褐色地、褐色、灰褐色、多量。	に古い褐色 灰褐色	暗め	④ スト付番
115	A-18	III	口沿部。	ナデ。	0.2-3mmの褐色地、白色地、灰色地、黑色地、 褐色地、白色地、黑色地、灰色地。	に古い褐色 灰褐色	暗め	
116	A-18	III	口沿部。	ナデ。	0.5-3mmの褐色地、褐色地、少量。	に古い褐色 灰褐色	灰褐色	
117	B-18	III	ナデ。貝殻面模印文。 口沿部。貝殻面模印文。	ナデ。	1mmの白色地。	に古い赤褐色 灰褐色	灰褐色	
118	A-18	IV	ナデ。貝殻面模印文。	ナデ。	0.5-2mmの褐色地、褐色、白色、灰褐色地。	に古い褐色 灰褐色	灰褐色	
119	A-19	IV	ナデ。貝殻面模印文。	ナデ。	0.5-3mmの褐色地、褐色、灰褐色、多量。	に古い褐色 灰褐色	暗め	
120	B-18	III	口沿部。	ナデ。	0.2-3mmの褐色地、褐色地、白色地、黑色地、少量。	に古い褐色 灰褐色	暗め	④ スト付番
121	A-19	IV	ナデ。貝殻文。透点文。	→ナデ。	2mmの白色地、褐色地、少量。 0.5mm以下の褐色地、褐色地、白色地。	に古い褐色 灰褐色	灰褐色	
122	B-19	III	口沿部。直線文。	ナデ。	0.5-1mmの褐色地、褐色地、少量。 透明感。	透明感 褐色	透明感 褐色	④ スト付番 変化物付番
123	B-18	III	ナデ。貝殻文。透点文。 透点文。	ナデ。	1-2mmの白色地、1mmの黄色地。	透明感 褐色	褐色	④ 变化物付番
124	B-18	III	口沿部。	ナデ。	1mmの白色地、白色地、 0.5mm以下の褐色地、透明感。	透明感 褐色	褐色	④ スト付番 変化物付番
125	A-19	III	ナデ。貝殻文。	ナデ。	0.5-3mmの褐色地、褐色地、少量。 0.5mm以下の褐色地、少量。	に古い褐色 灰褐色	灰褐色	
126	Z-19	IV	ナデ。透点文。	ナデ。	0.5mm以下の褐色地、少量。	透明感 褐色	褐色	④ スト付番
127	B-18	III	ナデ。貝殻文。	貝殻面模印文。	0.5-3mmの褐色地、褐色地、少量。 0.5mm以下の褐色地、少量。	に古い褐色 灰褐色	灰褐色	
128	B-18	III・IV	ナデ。貝殻文。透点文。	ナデ。	0.5-3mmの褐色地、褐色地、白色地、灰色地。	褐色	褐色 二重い透明感	
129	B-19	IV	ナデ。貝殻面模印文。 透点文。	ナデ。	1-2mmの褐色地、2mmの褐色地、多量。	に古い赤褐色 灰褐色	暗め	④ スト付番 変化物付番
130	B-18	III	ナデ。貝殻文。透点文。	ナデ。	0.5mm以下の褐色地、 1-2mmの褐色地、白色地。	褐色	褐色	④ 变化物付番
131	A-18	III	透点文。	ナデ。	2mmの白色地。	に古い褐色 灰褐色	暗め	
132	B-19	IV	ナデ。貝殻面模印文。	→ナデ。	0.5mm以下の褐色地、 1mm以下の褐色地。	に古い褐色 灰褐色	暗め	④ 变化物付番
133	Z-19	IV	貝殻文。貝殻面模印文。	→貝殻面模印文。	0.5-3mmの褐色地、褐色地、灰褐色地、 0.5mm以下の褐色地。	に古い褐色 灰褐色	暗め	④ スト付番
134	E-20	II	ナデ。透点文。	ナデ。	1mmの白色地、白色地。	に古い褐色 灰褐色	暗め	
135	B-18	III	ナデ。貝殻面模印文。	ナデ。	0.5-3mmの褐色地、褐色地、少量。	灰褐色	褐色	④ スト付番
136	B-19	IV	ナデ。貝殻面模印文。	ナデ。	0.5mm以下の褐色地。	に古い褐色 灰褐色	暗め	
137	B-18	IV	貝殻文。	ナデ。	1mmの褐色地、褐色地、少量。	褐色	褐色	④ スト付番
138	B-19	III	ナデ。貝殻文。	ナデ。	0.5-3mmの褐色地、白色地、透明感、少量。	透明感 褐色	褐色	
139	B-19	III	M上。	ナデ。	1-2mmの褐色地、 1mmの白色地、白色地。	透明感 褐色	褐色	に古い褐色
140	B-19	IV	透点文。透点文。	→貝殻面模印文。	1mmの褐色地、褐色地。	に古い褐色 灰褐色	暗め	④ 变化物付番
141	B-18	III	ナデ。貝殻文。透点文。	ナデ。	0.5-1mmの褐色地、褐色地、白色地、 少量。	に古い褐色 灰褐色	暗め	
142	A-21	III	貝殻文。	→貝殻面模印文。	0.5-1mmの褐色地、褐色地、白色地、 0.5mm以下の褐色地、褐色地、少量。	に古い褐色 灰褐色	暗め	
143	A-18	II	貝殻文。	ナデ。透点文。	貝殻面模印文。	に古い褐色 灰褐色	暗め	④ スト付番
144	B-19	III	透点文。透点文。	ナデ。	1-2mmの褐色地、 1mmの白色地、白色地。	に古い褐色 灰褐色	暗め	に古い褐色
145	B-19	III	ナデ。貝殻面模印文。	→貝殻面模印文。	0.5-1mmの褐色地、 0.5mm以下の白色地。	に古い褐色 灰褐色	暗め	
146	B-18	III	ナデ。貝殻文。貝殻面模印文。	→貝殻面模印文。	1-2mmの褐色地、白色地、 0.5mm以下の褐色地。	に古い褐色 灰褐色	暗め	
147	B-18	IV	ナデ。貝殻文。貝殻面模印文。	→貝殻面模印文。	0.5-1mmの褐色地、白色地、 0.5-1mmの褐色地、白色地、少量。	に古い褐色 灰褐色	暗め	④ スト付番
148	B-18	IV	ナデ。貝殻文。貝殻面模印文。	→貝殻面模印文。	0.5-1mmの褐色地、白色地、 1mmの白色地、白色地。	に古い褐色 灰褐色	暗め	
149	B-18	III	ナデ。貝殻文。貝殻面模印文。	ナデ。	0.5-1mmの褐色地、白色地、 1mmの白色地、白色地。	透明感 褐色	褐色	④ 变化物付番
150	B-19	IV	ナデ。貝殻文。貝殻面模印文。	ナデ。	1mmの褐色地、褐色地、少量。	褐色	褐色	

表5 桶文土器観察表(4)

※	出土区	出土場	調査および文様		土	色	圖	備考
			①	②				
151	D-9	II	ナゲ。波点文、波線文。	ナゲ。	0.5mmの褐色、淡褐色。 0.5~3mmの褐色、褐色。	褐色	15	入江・清雅 田代・行春 谷・文化物販
152	B-19	II	ナゲ。點文、波線文。 口唇部斜目。	ナゲ。	1~2mmの褐色、白色、褐色。	褐色	15	入江・清雅 田代・行春 谷・文化物販
153	A-18	II	ナゲ。波点文、波線文。	ナゲ。	0.5~3mmの褐色、白色、褐色、多量。 1mmの褐色。	褐色	15	入江・清雅 田代・行春 谷・文化物販
154	B-19	II	ナゲ。波点文、波線文。 口唇部斜目。	ナゲ。	1mmの褐色、白色。 0.5~1mmの褐色、褐色。	褐色	15	入江・清雅 田代・行春 谷・文化物販
155	A-18	II	ナゲ。波点文、 口唇部斜目。	ナゲ。	1~2mmの褐色、白色。	褐色	15	入江・清雅 田代・行春 谷・文化物販
156	B-19	Ⅲ	ナゲ。波点文、 口唇部斜目。	ナゲ。	0.5~3mmの褐色、白色、褐色。	褐色	15	入江・清雅 田代・行春 谷・文化物販
157	B-19	II	ナゲ。波点文、 口唇部斜目。	ナゲ。	0.5~1mmの褐色、白色。 0.5~2mmの褐色、白色。	褐色	15	入江・清雅 田代・行春 谷・文化物販
158	A-18	II	ナゲ。波点文。	ナゲ。	0.5~1mmの褐色、白色。	褐色	15	入江・清雅 田代・行春 谷・文化物販
159	A-19	II	ナゲ。	ナゲ。	1mm以下の褐色、白色、褐色。	褐色	15	入江・清雅 田代・行春 谷・文化物販
160	C-10	I・II	ナゲ。波点文。 口唇部斜目。	ナゲ。波点文、 口唇部斜目。	0.5~3mmの褐色、白色。 0.5~1mmの褐色、白色。	褐色	15	入江・清雅 田代・行春 谷・文化物販
161	B-19	II・IV	ナゲ。波点文。	ナゲ。	0.5~3mmの褐色、白色、褐色。	褐色	15	入江・清雅 田代・行春 谷・文化物販
162	B-19	II	ナゲ。波点文。	ナゲ。	0.1~2mmの褐色、淡褐色、灰褐色。	褐色	15	入江・清雅 田代・行春 谷・文化物販
163	A-19	II	ナゲ。波点文、 口唇部斜目。	ナゲ。	1mmの褐色、白色。	褐色	15	入江・清雅 田代・行春 谷・文化物販
164	B-19	II	ナゲ。波点文、 波線文。	ナゲ。	0.5~1mmの褐色、白色、褐色。	褐色	15	入江・清雅 田代・行春 谷・文化物販
165	B-18	II	ナゲ。波点文。	ナゲ。	1mmの褐色、白色。	褐色	15	入江・清雅 田代・行春 谷・文化物販
166	D-20	II	ナゲ。波点文、波線文。	ナゲ。	1mmの褐色、2mmの褐色。	褐色	15	入江・清雅 田代・行春 谷・文化物販
167	B-18	II	ナゲ。波点文。	ナゲ。	0.5~1mmの褐色。	褐色	15	入江・清雅 田代・行春 谷・文化物販
168	B-19	II・IV	ナゲ。波点文。	ナゲ。	2~3mmの褐色、白色、少量。	褐色	15	入江・清雅 田代・行春 谷・文化物販
169	B-18	II	ナゲ。	ナゲ。	0.5~3mmの褐色、白色、褐色。	褐色	15	入江・清雅 田代・行春 谷・文化物販
170	A-19	II	ナゲ。波点文、波線文。	ナゲ。	0.5~3mmの褐色、白色、褐色。	褐色	15	入江・清雅 田代・行春 谷・文化物販
171	B-18	II	ナゲ。	ナゲ。	1~2mmの褐色、白色。	褐色	15	入江・清雅 田代・行春 谷・文化物販
172	B-19	II	ナゲ。口唇部斜目。	ナゲ。	0.5~1mmの褐色。	褐色	15	入江・清雅 田代・行春 谷・文化物販
173	B-18	II・IV	ナゲ。	ナゲ。	1~3mmの褐色、白色、褐色。	褐色	15	入江・清雅 田代・行春 谷・文化物販
174	A-19	II	ナゲ。口唇部斜目。	ナゲ。	1~2mmの褐色。	褐色	15	入江・清雅 田代・行春 谷・文化物販
175	A-18	II	ナゲ。	ナゲ。	1~2mmの褐色。	褐色	15	入江・清雅 田代・行春 谷・文化物販
176	B-18	II	ナゲ。口唇部斜目。	ナゲ。	0.5~2mmの褐色、白色。	褐色	15	入江・清雅 田代・行春 谷・文化物販
177	A-19	II	ナゲ。	ナゲ。	1~2mmの褐色。	褐色	15	入江・清雅 田代・行春 谷・文化物販
178	A-19	II	ナゲ。口唇部斜目。	ナゲ。	0.5~1mmの褐色、白色。	褐色	15	入江・清雅 田代・行春 谷・文化物販
179	A-19	II	ナゲ。口唇部斜目。	ナゲ。	1~2mmの褐色。	褐色	15	入江・清雅 田代・行春 谷・文化物販
180	B-19	II	ナゲ。口唇部斜目。 波線文。	ナゲ。	1~2mmの褐色。	褐色	15	入江・清雅 田代・行春 谷・文化物販
181	B-19	II	ナゲ。口唇部斜目。	ナゲ。	0.2~1mmの褐色、白色、褐色。	褐色	15	入江・清雅 田代・行春 谷・文化物販
182	B-18	II	ナゲ。口唇部斜目。	ナゲ。	1~2mmの褐色、白色。	褐色	15	入江・清雅 田代・行春 谷・文化物販
183	B-18	II	ナゲ。	ナゲ。	0.5~1mmの褐色、白色。	褐色	15	入江・清雅 田代・行春 谷・文化物販
184	B-18	II	ナゲ。口唇部斜目。	ナゲ。	1~2mmの褐色、白色。	褐色	15	入江・清雅 田代・行春 谷・文化物販
185	B-19	II	ナゲ。波点文、波線文。	ナゲ。	0.5~1mmの褐色、白色、褐色。	褐色	15	入江・清雅 田代・行春 谷・文化物販
186	B-19	II	ナゲ。	ナゲ。	1~1.5mmの褐色。	褐色	15	入江・清雅 田代・行春 谷・文化物販
187	D-20	II	ナゲ。	ナゲ。	1~2mmの褐色。	褐色	15	入江・清雅 田代・行春 谷・文化物販
188	B-18	II	ナゲ。	ナゲ。	0.5~3mmの褐色、白色、灰色、乳白色。	褐色	15	入江・清雅 田代・行春 谷・文化物販
189	B-18	II	ナゲ。	ナゲ。	0.5~1mmの褐色、白色。	褐色	15	入江・清雅 田代・行春 谷・文化物販
190	B-19	II	ナゲ。	ナゲ。	0.5~1mmの褐色、白色。	褐色	15	入江・清雅 田代・行春 谷・文化物販
191	B-18	II	ナゲ。	ナゲ。	0.5~1mmの褐色、白色。	褐色	15	入江・清雅 田代・行春 谷・文化物販
192	A-19 D-19	II・IV	ナゲ。	ナゲ。	1mmの褐色。	褐色	15	入江・清雅 田代・行春 谷・文化物販
193	B-19	II	ナゲ。	ナゲ。	2~3mmの褐色。	褐色	15	入江・清雅 田代・行春 谷・文化物販
194	B-19	II	ナゲ。	ナゲ。	1~2mmの褐色、白色。	褐色	15	入江・清雅 田代・行春 谷・文化物販
195	B-18	II	ナゲ。	ナゲ。	1~2mmの褐色。	褐色	15	入江・清雅 田代・行春 谷・文化物販

表6 織文土器観察表(5)

No.	出土区	出土層	縄 織 わ よ び 文 横		跡 土	色 虞	考
			砂	西			
196	B-18	II	ナガ。	ナガ。	0.5~1mmの白色、灰褐色、淡黃褐色。多量。 0.5mm以下の砂。	褐色系 褐色系	
197	B-19	II	ナガ。	ナガ。	1~2mmの白色、灰白色。	褐色系 褐色系	に古い歴史
198	A-19	IV	ナガ。	~実物多量。	0.5~1mmの白色、灰褐色、灰白色。 0.5mm以下の白色、淡黃褐色、淡褐色。	褐色 褐色	
199	B-18	II	ナガ。	ナガ。	0.5~1mmの白色、灰褐色、淡褐色、少量。 0.5mm以下の白色、白色、淡褐色、少量。	褐色 褐色	に古い歴史
200	B-19	IV	~実物多量。	ナガ。	1~2mmの白色、灰褐色、淡褐色。 1mm以下の白色、淡褐色、少量。	褐色系 褐色系	に古い歴史 古文化付帯 古文化下部
201	B-18	II	→ミサキ、織物織文(2段目) RL)	→ミサキ。	1mm以下の白色、淡褐色、少量。	褐色 褐色系	灰褐色 灰褐色
202	B-19	II・IV	ミサキ、織物織文。	ミサキ。	0.5~1mmの白色、乳白色。 2mmの褐色。	褐色 褐色系	
203	B-19	II	ナガ、織物織文。 L付帯、W付帯。	ナガ。	0.5~1.5mmの白色、淡褐色、少量。 2mmの褐色。	褐色系 褐色系	に古い歴史
204	B-19	II	→ミサキ、織物織文。	→ミサキ。	1mmの白色、灰褐色、少量。	褐色 褐色	計多
205	B-18	II	ナガ、L付帯織物織文。 W付帯。	ナガ(に古いテテ。 織物織文)。	0.5~1mmの白色、少量。1~1.5mmの褐色。 0.5~1.5mmの白色、淡褐色、少量。	褐色 褐色	褐色
206	B-19	II	ミサキ(に古いテテ。 織物織文)。	ミサキ。	0.5~1mmの白色、少量。1~1.5mmの褐色。 1mmの白色。	褐色系 褐色系	
207	A-18	IV	ナガ、織物織文。	ナガ。	0.5~1mmの白色、淡褐色、淡褐色。 0.5~1.5mmの白色、淡褐色、淡褐色。	褐色系 褐色系	
208	A-18	II	ナガ、織物織文。	→ナガ。	0.5~1mmの白色、少量。 1mmの白色。	褐色系 褐色系	に古い歴史 古文
209	B-19	VI	ナガ、織物織文。	→ミサキ(に古いテテ。 織物織文)。	0.5~1mmの白色、少量。 0.5~1mmの白色、淡褐色。	褐色系 褐色系	に古い歴史
210	B-18	II	→ミサキ、織物織文(2段目)。	→ナガ。	1~2mmの白色、少量。 1mmの白色、淡褐色、少量。	褐色 褐色系	に古い歴史
211	B-19	II	→ミサキ、織物織文。 L付帯織文、W付帯。	→ミサキ。	0.5~1mmの白色、少量。1~1.5mmの褐色。 1mmの白色。	褐色 褐色	に古い歴史
212	A-16	III・IV	→ミサキ、織物織文。 (2段目)、W付帯。	→ミサキ。	0.5mmの褐色、0.1~0.5mmの乳白色、乳白色。 0.5~1mmの白色。	褐色系 褐色系	に古い歴史
213	B-16	III・IV	ナガ、(に古いテテ。 W付帯)。	→ミサキ。	1mmの白色、白色、褐色、淡褐色。	褐色系 褐色系	に古い歴史 古文
214	B-16	III	→ミサキ、(に古いテテ。 W付帯)。	→ミサキ。	1mmの白色、白色、白色。	褐色系 褐色系	に古い歴史
215	D-20	II	网上	→ミサキ。	0.5~1mmの白色、淡褐色、白色。多量。	褐色系 褐色系	に古い歴史
216	C-19	IV	ナガ、織物織文。	→ナガ。	0.5mmの白色、1mmの乳白色、褐色。	褐色系 褐色系	褐色系
217	B-18	II	→ミサキ、織物織文(2段目)。 丁寧なナガ。	丁寧なナガ。	0.5~1mmの白色、灰褐色、褐色、淡褐色、白色。 1mmの白色。	褐色 褐色	褐色
218	B-18	II	~ミサキ、織物織文(2段目)。	ミサキ。	1mmの白色。	褐色系 褐色系	に古い歴史
219	A-19	III	ナガ、織物織文(2段目)。 織物織文。	ナガ。	0.5mmの白色、褐色、褐色、灰褐色。	褐色系 褐色系	に古い歴史
220	A-18	IV	ナガ、織物織文。	→ミサキ。	1mmの白色、淡褐色、灰褐色、多量。 2mmの白色。	褐色系 褐色系	に古い歴史 に古い歴史
221	B-18	II	ミサキ、織物織文。	→ミサキ。	0.5mmの白色、0.5~1mmの白色、白色。 1mmの白色。	褐色系 褐色系	褐色
222	A-18	II	网上	→ミサキ。	0.5mmの白色、0.5~1mmの白色、白色。 1mmの白色。	褐色系 褐色系	に古い歴史
223	E-20	II	网上	ミサキ。	0.5mmの白色。	褐色系 褐色系	に古い歴史
224	Z-19	III	ナガ、織物織文(2段目)。	ナガ。	1~2mmの白色、灰色。1~3mmの多量褐色。 少量、淡褐色。	褐色系 褐色系	に古い歴史 褐色系
225	D-20	II	网上	ナガ。	0.5~1mmの白色、少量。	褐色系 褐色系	に古い歴史
226	C-8	II	織文。	→ナガ。	0.5~1mmの白色、褐色。	褐色系 褐色系	に古い歴史
227	A-18	II	織文。	→ナガ。	2~3mmの白色、少量。 1mmの白色、褐色、白色。	褐色系 褐色系	に古い歴史
228	A-19	IV	~ミサキ、貝殻織物(2段目)。	ナガ。	1~1.5mmの白色、白色、乳白色、褐色。 1mmの白色。	褐色系 褐色系	に古い歴史 古文化下部
229	E-9	II	→ナガ。	→ナガ。	1~1.5mmの白色、白色、褐色。 1mmの白色、白色。	褐色系 褐色系	④ 人骨
230	A-16	IV	→ミサキ、織物織文。	ナガ。	2mmの白色。	褐色系 褐色系	
231	A-18	IV	→ミサキ。	ナガ。	1~2mmの白色、白色、白色。	褐色系 褐色系	に古い歴史
232	Z-19	IV	ナガ。	ミサキ(に古いテテ)。	1mmの白色、白色、少量、白色。 1mmの白色、白色、白色。	褐色系 褐色系	に古い歴史
233	B-19	II	ナガ、口唇部、胸郭部、脇部。 織物織文。	ナガ。	1mmの白色、0.5~1mmの白色、淡褐色、淡褐色。 0.5~1mmの白色、白色、白色、白色。	褐色系 褐色系	に古い歴史 新石器時代
234	Z-19	II	ナガ。	透点文。	ナガ。透点文。 1mmの白色、白色、白色。	褐色系 褐色系	に古い歴史
235	A-20	II	→ナガ。	ナガ。	1mmの白色、白色、白色。 0.5~1mmの白色。	褐色系 褐色系	に古い歴史
236	A-18	II	ナガ、口唇部、脇部。	→ナガ。	0.5~1mmの白色、白色、白色、白色。	褐色系 褐色系	
237	A-19	II	ナガ、口唇部、脇部。	ナガ。	1mmの白色、白色、白色。	褐色系 褐色系	に古い歴史
238	A-18	II	ナガ、貝殻織物(2段目)。	ナガ。	1~2mmの白色、白色、乳白色、白色。 1mmの白色、白色、白色。	褐色系 褐色系	に古い歴史
239	A-18	II	网上	ナガ。	4mmの白色、0.5~1mmの白色、淡褐色、淡褐色。 0.5~1mmの白色、白色、白色。	褐色系 褐色系	に古い歴史
240	B-18	II	ナガ、透点文。	ナガ。	1~2mmの白色、白色、白色、白色。 1mmの白色。	褐色系 褐色系	古文

表7 縄文土器観察表(6)

No	出土区	出土層	調査および文様		胎土	色調		備考
			①	②		③	④	
241	B-18	Ⅲ	ナガ。口縁部斜め取抜。テテ。		1~3mmの褐色・淡褐色・灰褐色・黑色。	に古い樹脂	陶器、白色物付帯	
242	B-18	Ⅲ	ナガ。口縁部斜め取抜。テテ。		1~4mmの褐色・灰色・淡褐色・多色。	に古い樹脂	陶器	④ 花形付帯
243	A-18	Ⅲ	ナガ。口縁部に近いテテ。丁寧なテテ。		0.5~1mmの褐色・0.5~1mmの褐色・灰色。	に古い樹脂	陶器	
244	B-19	Ⅲ	ナガ。口縁部斜め取抜。テテ。	→1ガタ。	0.5~1mm以下の褐色・多色。1mm以下の褐色・浅褐色・少色。	に古い樹脂	陶器	④ 花形付帯
245	A-18	Ⅲ	ナガ。口縁部・底部斜め取抜。丁寧なナガ。		0.5~3mmの褐色・灰色・灰褐色・多色。1mm以下の褐色・少色。	に古い樹脂	陶器	④ 花形付帯
246	B-19	Ⅲ	ナガ。口縁部斜め取抜。テテ。		0.5~3mmの褐色・灰色・灰褐色・多色。1mm以下の褐色・少色。	に古い樹脂	陶器	④ 花形付帯
247	A-19 B-18	Ⅲ・Ⅳ	→1ガタ。	→1ガタ。	1mm以下の褐色・淡褐色・灰色。1~3mmの褐色・灰色。2~3mmの褐色・少色。	に古い樹脂	陶器	④ スヌ付帯
248	A-19 B-18	Ⅲ・Ⅳ	口縁部。	→1ガタ。	2~3mmの褐色・灰色・淡褐色・少色。	に古い樹脂	陶器	④ スヌ付帯
249	A-19	Ⅲ	ナガ。口縁部斜め取抜。テテ。	→1ガタ。	1~3mmの褐色・灰色・灰褐色・黑色。黒褐色の内底部。	陶器	陶器	④ スヌ付帯
250	A-19	Ⅲ	ナガ。口縁部斜め取抜。テテ。	→1ガタ。	1mm以下の褐色・0.5~1mmの褐色・灰色。	陶器	陶器	④ スヌ付帯
251	B-19	Ⅲ	→1ガタ。口縁部斜め取抜。	→1ガタ。	0.5~1mmの褐色・灰色・白色。	に古い樹脂	陶器	④ 太付帯
252	B-18	Ⅲ	→1ガタ。	→1ガタ。	1~3mmの褐色・少色。1~3mmの褐色・少色。	陶器	陶器	④ 花形付帯
253	B-19	Ⅲ	ナガ。	→1ガタに近いナガ。	0.5~3mmの褐色・乳白色・淡褐色。	陶器	陶器	④ 花形付帯
254	E-19	Ⅲ	ナガ。	テテ。	0.5~4mmの褐色・褐色。	陶器	陶器	④ 花形付帯
255	A-18	Ⅲ	ナガ。	テテ。	0.5~3mmの褐色・灰色・淡褐色。	に古い樹脂	陶器	
256	D-20	Ⅲ	ナガ。	ナガ。	0.5~3mmの褐色・灰色。	に古い樹脂	陶器	
257	D-20	Ⅲ	ナガ。	ナガ。	0.5~4mmの褐色・灰色・淡褐色・多色。0.5~1mmの褐色・灰色・淡褐色・少色。	陶器	陶器	④ 花形付帯
258	B-18	Ⅲ	ナガ。	ナガ。	0.5~4mmの褐色・灰色・淡褐色・少色。0.5~1mmの褐色。	陶器	陶器	④ 花形付帯
259	D-9	Ⅲ・Ⅳ	→1.5mm斜め取抜。ナガ。	ナガ。	0.5~4mmの褐色・灰色・淡褐色・少色。1~4mmの褐色・灰色・淡褐色・少色。	に古い樹脂	陶器	④ 花形付帯
260	D-9	Ⅲ	→1ガタ。	→1ガタ。	4mmの褐色・少色。1~3mmの褐色・褐色。	に古い樹脂	陶器	④ スヌ付帯
261	C-10 D-9	Ⅲ・Ⅳ	1ガタに近いナガ。		0.5~3mmの褐色・淡褐色。	陶器	陶器	④ 太付帯
262	C-10	Ⅲ	→1ガタ。	ナガ。	0.5~3mmの褐色・灰色。	陶器	陶器	④ スヌ付帯
263	C-9	Ⅲ	ナガ。	1ガタに近いナガ。	0.5~3mmの褐色・少色。0.5~1mmの褐色・少色。	陶器	陶器	
264	D-10	Ⅲ	→1.5mm斜め取抜。	ナガ。	1mmの褐色・灰色・淡褐色・多色。0.5~1mmの褐色・灰色・淡褐色・少色。	に古い樹脂	陶器	④ 太付帯
265	D-9	Ⅲ	→1ガタに近いナガ。	→1ガタに近いナガ。	0.5~4mmの褐色・少色。0.5~1mmの褐色・灰色。	に古い樹脂	陶器	④ スヌ付帯
266	D-20	Ⅰ	1ガタ。底部斜め取抜。	1ガタ。	0.5~3mm以下の褐色・灰色。	陶器	陶器	④ 花形付帯
267	E-13	Ⅰ	2ガタ。口縁部。	1ガタ。	褐色の底部・口縁部。1~3mmの褐色・灰色。	陶器	陶器	④ 花形付帯
268	C-9	Ⅲ	ナガ。口縁部。	ナガ。	0.5~1mmの褐色・灰色・淡褐色・少色。0.5~1mmの褐色・灰色・淡褐色・少色。	陶器	陶器	④ 花形付帯
269	C-9	Ⅲ	ナガ。口縁部。	ナガ。	1~3mmの褐色・乳白色・淡褐色・少色。	陶器	陶器	④ 花形付帯
270	D-10	Ⅲ	ナガ。口縁部。	ナガ。	1~2mmの褐色・褐色・少色。	に古い樹脂	陶器	④ 花形付帯
271	D-5	Ⅲ	ナガ。	ナガ。	0.5~3mmの褐色・灰色・淡褐色・少色。0.5~1mmの褐色・灰色。	陶器	陶器	④ 花形付帯
272	D-10	Ⅲ	→1ガタ。	→1ガタ。	0.5~3mmの褐色・少色。多色。	に古い樹脂	陶器	
273	S H12	—	→1ガタ。	→1ガタ。	0.5~1mmの透明色・褐色・灰色・少色。	陶器	陶器	④ ⑤ 花形付帯
274	C-9	Ⅲ	丁寧なナガ。	ナガ。	0.5~3mmの褐色・乳白色・淡褐色・褐色。	に古い樹脂	陶器	
275	S C 3	—	丁寧なナガ。	ナガ。	0.5~3mmの褐色・乳白色。	に古い樹脂	陶器	④ 太付帯
276	E-9	Ⅲ	→1ガタ。	→1ガタ。	4mmの褐色・灰色・褐色。	に古い樹脂	陶器	
277	D-6	Ⅲ・Ⅳ	ナガ。	→1ガタ。2ガタ。	0.5~3mmの褐色・灰色・乳白色・淡褐色・少色。0.5~1mmの褐色・灰色。	に古い樹脂	陶器	④ 太付帯
278	D-9	Ⅲ	→1ガタ。	→1ガタ。	0.5~3mmの褐色・灰色。	に古い樹脂	陶器	④ 太付帯
279	C-9	Ⅲ	→1.5mm斜め取抜。口縁部。	ナガ。	1mmの褐色・少色。	陶器	陶器	
280	C-10	Ⅲ	→1ガタ。	ナガ。	0.5~3mmの褐色・灰色・淡褐色・褐色。	陶器	陶器	④ 花形付帯
281	C-9	Ⅲ	→1.5mm斜め取抜。	→1ガタ。	1mmの褐色・灰色・褐色。	陶器	陶器	④ 花形付帯
282	C-10	Ⅲ	ナガ。	ナガ。	0.5~3mmの褐色・灰色・褐色。	に古い樹脂	陶器	④ 花形付帯
283	C-10	Ⅲ	→1ガタ。	ナガ。	0.5~3mmの褐色・灰色・褐色。	に古い樹脂	陶器	④ 花形付帯
284	E-9	Ⅲ	→1.5mm斜め取抜。ナガ。	→1.5mm斜め取抜。ナガ。	0.5~1mmの褐色・灰色・褐色・黑色・赤褐色・褐色。	に古い樹脂	陶器	

表8 純文土器観察表(7)

円盤形土製品

土器の破片の側面を磨り、円形にするものである。図示はしていないが、37点出土している。

石器 (図36~42)

石器については、機能・用途により大枠の分類を行ない、補助的に素材・加工による分類を行なった。

垂飾品 (285)

蛇紋岩製のものである。薄く磨り上げ、径3mm程の穿孔がなされる。図の左上の側は、欠けており、上方に続いている。明瞭な製品ではないが、同様のものがもう1点ある。

石鎌 (286~299)

調査区内にまんべんなく分布している。表は基部の形状、すなわち抉りの有無や深さの程度から分類を試みたものである。石材は、チャート、黒曜石が多く用いられる。288は、片面に主要剝離面を残す剥片鎌である。

石匙 (300・301)

2点出土している。どちらも横型のものである。300の方は主要剝離面が大きく残る。

石錐 (303~308)

欠損品を含めると計126点になる。重量別の度数分布によれば、50~60gの刻みに属する個体が最も多い(表10)。長軸方向に細かい切れ目を入れるのがほとんどで、打ち欠きによるものは307などごくわずかである。305は有溝のものである。使用石材は、当然のことながら付近で採取可能な頁岩が主である。

打製石斧 (309~312)

309~311は頁岩製の打製石斧である。図示した以外にも10点程あり、未製品の可能性のある頁岩製の長方形の剥片の出土も多い。309と311の刃部の片面には線状痕が見られる。どちらも刃部の線に対して直交せず、10~20°偏する。同様の例は、鹿児島市の草野貝塚の報告でも紹介されている。

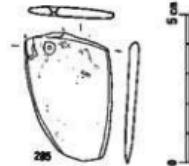
磨製石斧 (313~319)

7点掲載したが、その他にも7点出土している。313は小形で柱状となる。蛇紋岩製である。315は柱状に、316は基部に向けて先細りとなる形状の、どちらも大形のものである。

石斧形敲打器 (320)

草野貝塚の報告で用いられた分類を借用した。砂岩製の製品が1点出土している。

石皿 (323・324)



基部の形状による類型	掲載した典型資料	出土個数
平基無茎鐵	286・287	3
凹基無茎鐵 	a / b が 0.1以下 288・289・290	10
	0.1~0.25 291~297	23
	0.25以上 298・299	13

表9 石鐵の形態分類

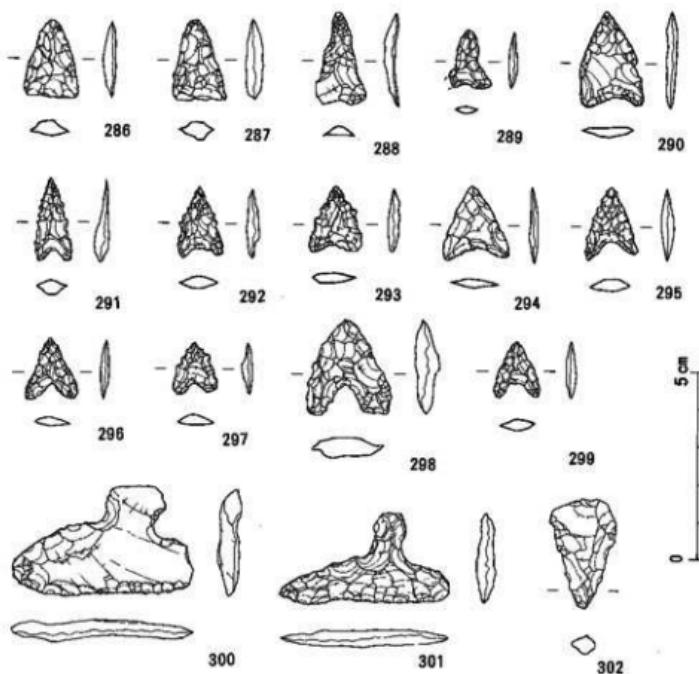


図37 石器実測図(2) (2/3)

	出土個数	掲載資料	重量	出土個数	掲載資料
10未満	•	303	60~70	•••••○○○○○○	306
10~20	••••		70~80	○○○●●●●●○○○	
20~30	●●●●●●●●●●		80~90	○●●●●●●●●●○○	
30~40	○●●●●●●●●●○	304	90~100	●●●●●●●●●○○○	
40~50	●●●●●●●●●●○○○○	305	100~	●●●●●●●●●○○○	307 308
50~60	●●●●●●●●●●○○○○○○			● 完形品 ○一部欠損品	

表10 石錘重量度数分布

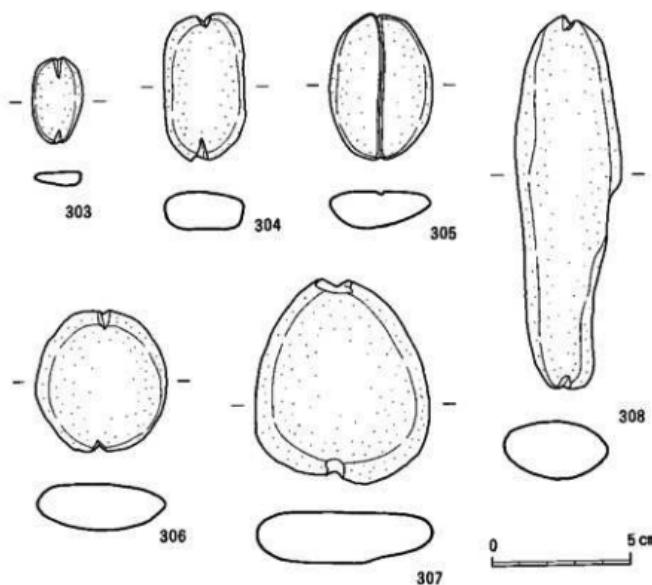


図38 石器実測図 (3) (1/2)

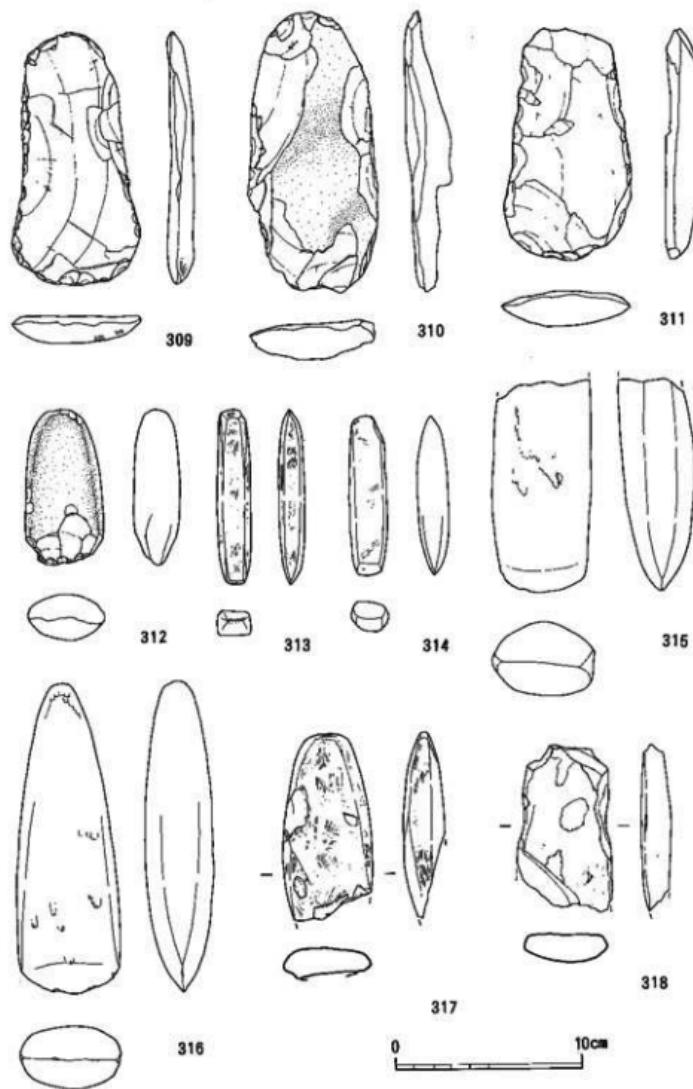


図39 石器実測図(4) (1/3)

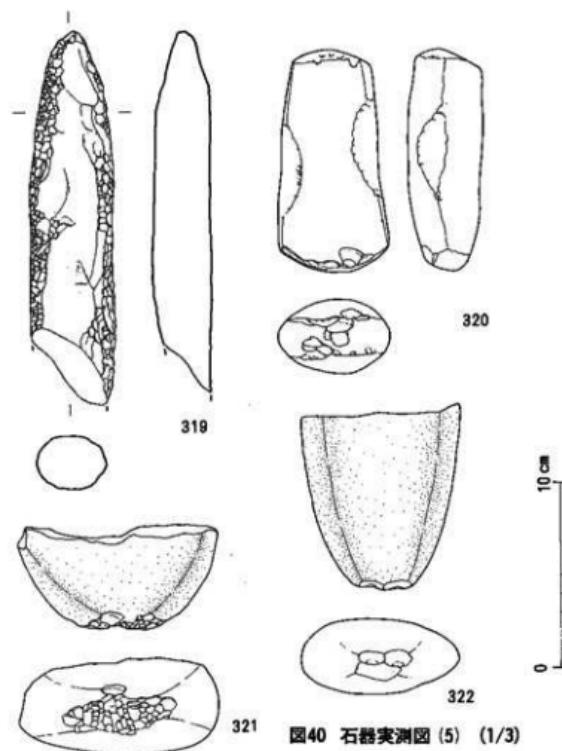


図40 石器実測図 (5) (1/3)

No.	種別	区	区	幅(cm)	横(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石 材
285	石 器	D-9	IV	(4.4)	3.0	0.35	7.3	蛇紋岩
286		S C 1-2	-	2.1	1.5	0.4	1.1	チャート
287		D-10	III	2.2	1.5	0.5	1.4	チャート
288		B-18	III	2.5	1.3	0.3	0.8	黒曜石
289		S H 6	-	1.1	1.2	0.2	0.3	チャート
290		E-9	I	2.6	1.7	0.3	1.3	チャート
291		C-9	II	2.2	1.0	0.4	0.6	ホルンフェルス
292		Z-19	III	1.9	1.2	0.35	0.6	黒曜石
293		A-18	III	1.8	1.5	0.3	0.6	黒曜石
294		C-7	II	2.0	1.8	0.3	0.7	安山岩
295		C-21	I	2.0	1.5	0.35	0.6	チャート
296		D-10	IV	1.6	1.4	0.3	0.4	チャート
297		E-5	IV	1.3	1.2	0.3	0.3	黒曜石
298		S A 2	-	2.6	2.3	0.55	2.2	黒曜石
299		C-8	IV	1.5	1.25	0.35	0.4	チャート
300	石匙	S C 30	-	3.0	4.9	0.6	5.9	ホルンフェルス

表11 石器観察表 (1)

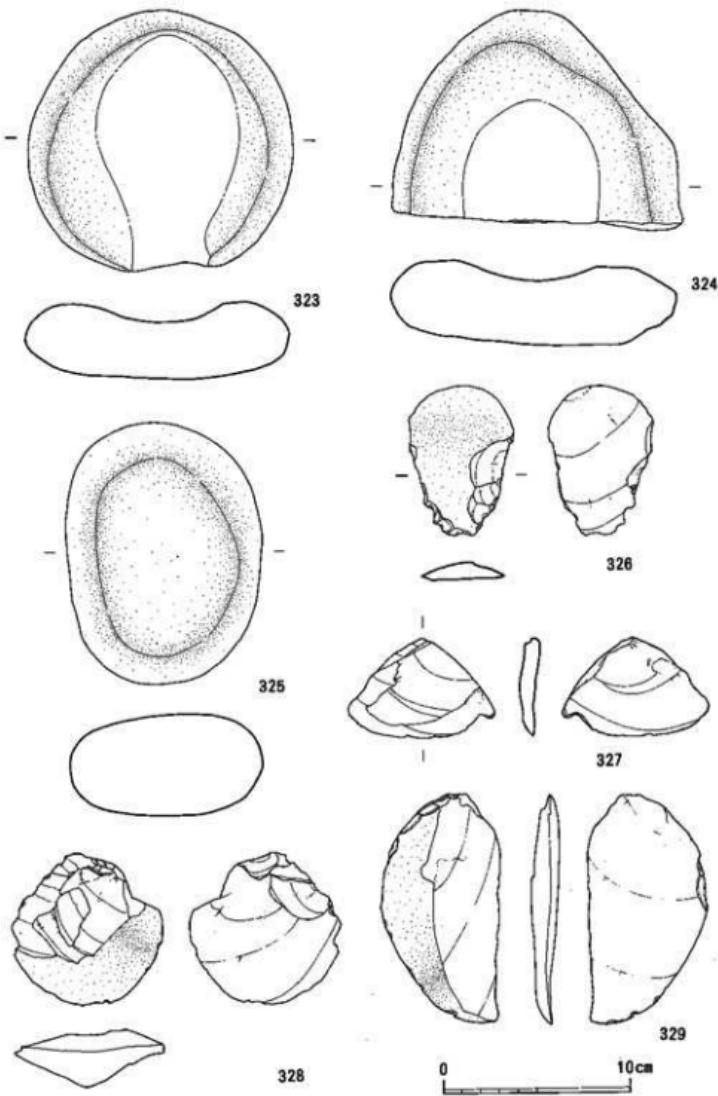


図41 石器実測図(6) (1/3・323・324のみ1/6)

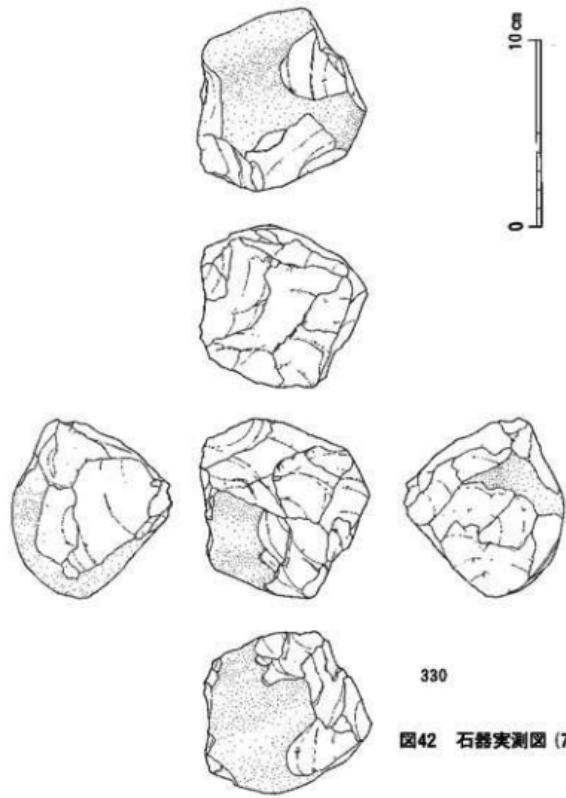


図42 石器実測図(7) (1/3)

No.		K	層	幅(cm)	横(cm)	厚さ(g)	重量(g)	石 材
301	石 劍	B-19	IV	2.4	4.5	0.55	3.5	ホルンフェルス
302	石 錐	B-10	II	3.0	1.8	0.5	3.7	ホルンフェルス
303		A-18	I	3.0	1.8	0.5	5.0	真岩
304	石 刀	S A 2	—	5.3	2.9	1.4	31.0	真岩
305		S A 1	—	5.2	3.3	0.85	40.0	砂岩
306	石 鍬	F-6	III	5.1	4.6	1.6	60.0	砂岩
307		S A 2	—	7.4	6.3	1.8	117+ α	真岩
308		D-19	III	13.4	3.3	2.3	150.0	真岩
309	打 石	Z-20	IV	13.6	6.8	1.5	204.0	真岩
310	製 石	B-18	III	15.2	7.0	2.2	250.0	真岩
311		D-9	II	12.4	6.8	1.9	188.0	真岩
312	斧	D-20	II	8.3	4.1	2.5	118.0	ホルンフェルス
313	磨 石	A-18	IV	9.4	1.8	1.4	42.0	蛇紋岩
314		C-9	IV	8.6	2.1	1.7	51.0	真岩
315	石 斧	E-4	IV	11.4	5.3	4.0	388.0	ホルンフェルス
316		C-19	I	16.7	5.6	3.5	476.0	真岩

表12 石器観察表(2)

No	種別	区	層	幅(cm)	横(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石材
317	磨製	C-9	I	10.0	4.8	1.7	130.0	頁岩
318	石斧	B-18	II	8.9	5.1	1.6	98.0	蛇紋岩
319		D-9	IV	20.1	4.5	3.0	384.0	頁岩
320	鍛打器	A-19	III	12.0	5.4	4.0	440.0	砂岩
321		S C21	-	5.6	7.7	5.2	381.0	砂岩
322	敲石	E-8	IV	10.1	8.6	4.1	457.0	砂岩
323	石墨	S A 2	-	28.3	28.0	8.65	900	砂岩
324		S A 2	-	31.0	23.3	9.3	9250	砂岩
325	磨石	F-8	III	14.1	10.6	5.5	1000	砂岩
326		S A 2	-	8.1	5.6	1.0	56.0	頁岩
327	剥片	Z-20	IV	5.4	7.9	1.1	38.0	頁岩
328		B-19	IV	8.1	8.1	3.0	137.0	頁岩
329		S C14	-	12.3	6.4	1.5	98.0	頁岩
330	石核	B-18	IV	9.1	9.7	8.6	836.0	頁岩

表13 石器觀察表(3)

2点見られた。323がA-20区のS A 2付近、324がS A 2の覆土中より出土しており、どちらも縄文時代後期の所産と認められよう。

剥片(326~329)

コンテナ箱にして20箱近くという、膨大な量の出土を見た。ほとんどは頁岩で、付近に露頭がある。E-9区に特に集中する箇所が存在した。

石核(330)

握拳大の不定型の石核である。打面を転移しながら剥片を剥取している。

(註)

1. 縄文時代前期～中期土器の様式比定、編年については、下記の文献を参考にしたが、未消化の部分も多い。

桑畠光博 1987「南九州における曾畠式土器の動態とその背景」『鹿大考古』6

水ノ江和同 1990「中・南九州の曾畠式土器」『肥後考古』7

2. 縄文時代後期の様式比定、編年については下記の文献を参考にした。

前川威洋 1979「九州縄文文化の研究」

高田紘一 1986『戸坂遺跡発掘調査報告書』熊本市教育委員会

3. 出口浩・兩宮瑞生他 1988『草野貝塚』鹿児島市教育委員会

IV 古代～近世の遺構と遺物

1. 遺構

古代以降については、遺物の出土が各時代にわたって認められるものの、屋敷地など居住関連の空間は確認できなかった。検出された遺構は、いずれも遺物の出土が僅少で、詳細な時代・時期を特定できるものは皆無であった(図7・8)。典型的な遺構2基について触れる。

S C 29 (図43)

覆土中に礫が見られる。礫については、被熱などによる変化は特に見られない。同種の土坑は多く、S C 12・13・24などがそれに当たるが、機能・用途は不明である。

S I 1 (図43)

集石遺構としたこの遺構は、土坑の覆土上部に熱を受け赤く変化した礫を含む。

2. 遺物 (図44・45)

I～III層より土師器、須恵器、布痕土器、陶磁器類、鉄器、土錘などが出土している。

331・332はいずれも土師器で331がヘラ切りの杯、332が高台付の椀であろう。333は黒色土器A類で、高台付の椀と推定される。334も土師器で、糸切りの皿であろうか。341～343は土師器の甕、345～347は須恵器の甕である。348は布痕土器で、外面には指頭圧

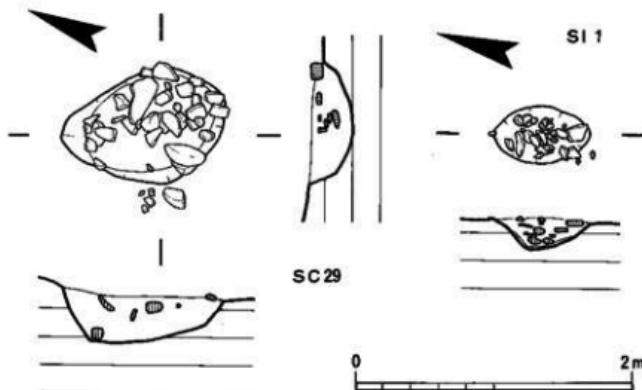


図43 土坑・集石遺構実測図 (1/40)

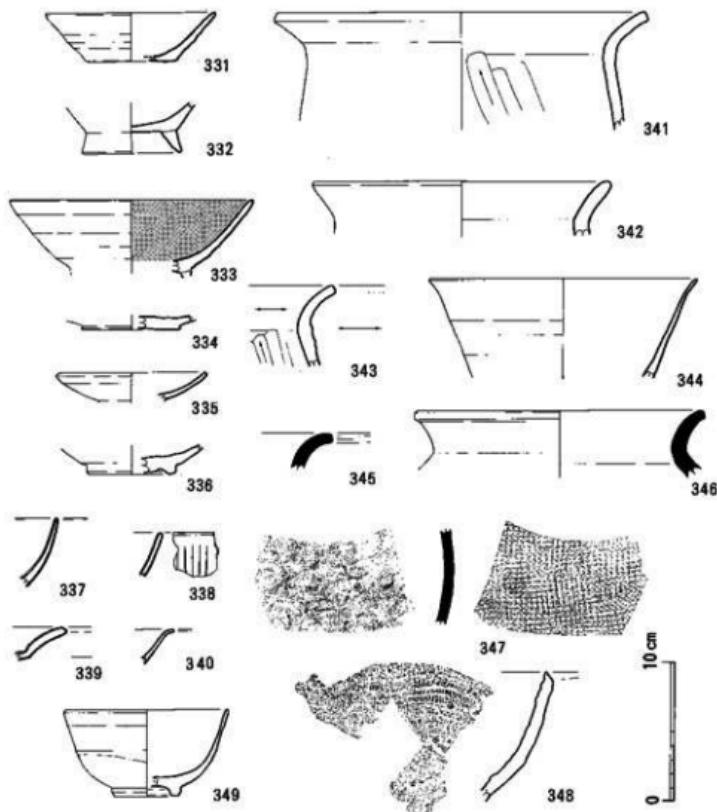


図44 土器・須恵器・陶磁器実測図 (1/4)

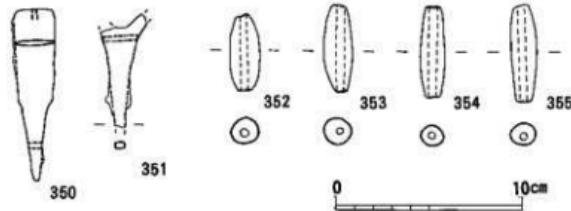


図45 鉄器・土錘実測図 (1/3)

No.	種別	出土区	出土層	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調		胎土	備考
							外面	内面		
331	土 師 器	D-8	I				白	白	1mmの褐色、灰白色多量 2mmの黑色粒	ヘタ切り
332		D-6	II				淡黃褐色	にぼい黄褐色	乳白色、透明の光沢粒	高台
333		A-19	III				にぼい黄褐色	白	0.5~1mmの褐色粒 4mmの白色粒	褐色土器
334		E-4	II				白	白	0.5mm以下の褐色乳白色粒 少量	赤切り
335	白 磁	S-H 4	-		5.3	灰白 オリーブ色	灰白	白	白	
336	磁	A-19	II		6.4	灰 灰白	灰 灰白	白	白	
337	青 磁	E-20	III			オリーブ灰 オリーブ色	白	白	白	
338	青 磁	D-8	III			■點一(内一) ■點二(外一) ■點三(内一)	白	白	白	
339		A-19	II			明暎灰 明暎灰	白	白	白	
340	白磁	D-20	III			灰白 灰白	灰白 白	白	白	
341	土 師 器	B-18	III	2.62			にぼい黄褐色 にぼい黄褐色	にぼい黄褐色 にぼい黄褐色	1mmの赤褐色、乳白色、淡褐色、褐色 淡褐色、2mmの透明色粒 褐色の褐色の褐色	④ にぼい黄褐色 ⑤ 黒色の付着物
342		D-20	III	21.0			にぼい黄褐色	白	0.5~3mmの褐色 白色粒 多量	
343		D-7	III			明暎灰 明暎灰	白	白	1mmの赤褐色、褐色粒多量 透明の光沢粒	⑥ えす付着 ⑦ 脱鉛ヘタケヅシ
344		A-19	II			白 にぼい黄褐色	白 白	白	1~2mmの褐色、灰白色多量	
345	須	E-20	III			灰白 にぼい黄褐色	にぼい黄褐色 にぼい黄褐色	白 白	0.5~3mmの褐色、白色、白色、淡褐色 ・黑色粒多量	
346	恵	A-18	III			淡黄褐色 にぼい黄褐色 にぼい黄褐色	白 白 白	白 白 白	5mmの乳白色 0.5~1mmの 乳白色、淡黄色、褐色、褐色粒少量	
347	器	C-18	III			灰 白	灰 白	白 白	0.5~2mmの乳白色 白色粒少量	各子母口
348	赤土器	Z-19	III			白	白	白	1~8mmの多褐色の丸い瘤多量	
349	陶器	Z-19	II	11.6	6.2	4.6	灰オリーブ にぼい赤褐色	灰オリーブ にぼい赤褐色	0.5~2mmの褐色、褐色粒	

No.	種別	出土区	出土層	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	形態・手法の特徴はか	色調	胎土
350	鐵 錐	試掘坑	I	9.15	2.3	0.3	26.1			
351		D-8	II	6.1	2.15	0.25	16.0			
352	土 錐	D-10	II	4.15	1.65	1.4	8	にぼい黄褐色	0.5~2mmの茶褐色、灰色粒	
353		E-5	III	4.7	1.5	1.4	9	橙	きめ細か	
354	錐	D-19	III	4.9	1.35	1.1	6	灰 黄	きめ細か	
355		Z-20	III	5.2	1.45	1.2	8	にぼい黄褐色	9mm細か、0.5~1mmの黑色粒 少量	

表14 古代～近世の遺物 観察表

痕が残る。いびつな形状となる。335・336・337は白磁で、335は小皿、336は皿の底部で、蛇の目釉はぎがなされる。337～339は青磁で、337・338が碗、339が菱花皿である。338は剣先形蓮弁文を施す。これら輸入陶磁器類の年代は、概ね14世紀末～16世紀におさまるようである。

349は、唐津の灰釉系の陶器である。17世紀初頭の所産と見られる。土錐はI～III層より計17点出土している。

V おわりに

1. 遺構・遺物の遺跡内での分布論

ここで、発掘調査および整理時に気付いた2~3の点について触れておく。

縄文土器については、繰り返し述べてきたように時期ごとの分布域の変化が捉えられ、縄文時代後期について、2基の竪穴住居跡の存在から主たる生活空間の範囲が把握できた。他方、縄文時代前期～中期の明確な遺構は見当らず、また縄文時代晚期については、D-10区を中心に、S C 4などの炉跡と推定される土坑が見られ、ほぼ同一の標高上に並ぶ付近の土坑群も、土器の分布状況より当該期の所産と考えられたが、住居跡については確認できなかった。縄文時代前期～中期については、遺物の出土量の少なさから、遺跡を形成した集団の成員の少なさや、行動が漂遊的であったことが原因と考える。縄文時代晚期については、標高が最も高く削平の進んだA-15区（旧小学校跡の校舎・校庭）付近に住居跡が存在していた可能性があり、実際、E-14区でI層中より縄文時代晚期の土器が出土している。

古代以降についても不明な点が多いが、遺物の分布から、少なくとも中世以降については現代の居住範囲と重なっていたことも推測される。

2. 縄文時代後期の土器について

縄文時代後期の土器はその出土量の多さが注目されるが、中でも、無文土器をまとめたD類とA類の出土量が相対的に多い。このうちA類は、北久根山式土器の深鉢・鉢と、市来式土器のそれという2つの系譜が認められる。数量的には前者が多い。さらにそれらはそれぞれに時間幅を有し、比較的長期間存続した可能性も指摘できる。前者の中には、出水式土器（遅れば阿高式土器）からの流れが看取できるものが存在するなど、おそらくこのA類は、前時代から深鉢の特徴を色濃く残した、変化の度合いの小さい粗製の在地土器と考えられる。それにE類とした磨消縄文系の鉢・浅鉢が精製の器種として加わり、当地域の一様式を形成していた可能性も考えられる。しかしながら、脚台付装飾浅鉢・皿を在地の系譜の精製土器とすれば、それほど単純には理解できない。

本遺跡出土の縄文時代後期土器の故地を見ると（文様要素のみも含む）、瀬戸内から東九州、北部～中九州、そして南九州と、本遺跡の地理的位置を反映して多様であり、それだけに土器相は複雑となっている。例えば磨消縄文土器の流入の在り方を見ても鐘崎式土器系統、福田K II式土器（？）系統、指宿式土器系統（指宿式土器そのものが磨消縄文土器の影響を受けた土器様式であるが）と各方面にわたる。

いずれにしても本遺跡での出土状況のみにより、当地における土器様式を認識、設定することは不可能であり、それについては今後に残された課題と言える。近隣の熊本県の球磨地方の当該期の資料との比較検討も行なわねばならない。

3. 遺跡の性格

本遺跡の性格、特に縄文時代後～晩期について考える際に鍵となる遺構・遺物として、石錐、巻貝を出土した土坑、夥しい量の剝片と未製品の石斧類などが挙げられよう。それに古代以降の布旗土器、土錐が加わる。それらの資料から、狩猟・漁撈を行い、交易を繰り返していた集落の姿が復原できる。

生業の中でも、狩猟活動については、本遺跡の立地条件からある程度その盛行は推測され、また植物質の食料の採集も当然想定できるのであるが、網（投げ網？）を使用した漁労活動も大きな比重を占めていたことが石錐の多量の出土からうかがえる。

剝片については、「産物」として交易のルートに乗っていたのかどうかは不明であるが、未製品の存在と共に、とりあえず注目しておきたい。

尚、プラントオパール分析を行なうにあたっては、各時代における農耕（焼畑農耕を含めて）の存在を念頭に置いたが、当地域に農耕が根付いたのは比較的最近（近代期？）のことのようである。もっとも、焼畑農耕を想定する（あるいは否定する）場合には、そこがどのような集落であったのか（耕地と集落との位置関係や耕地の移動に伴い住居が移動するか否かなど）を把握せねばならぬ、結論は早急には出そうにもない。

今回の報告を行なうにあたっては絶対的な紙数の制約があり、必要と考える遺物の全てについて掲載できていない。特に遺構と縄文後期土器についての記載が不十分である。なるべく、分類を行ない、典型を掲載し、図示ができないものについては数量を示すという手段をとったが、それとて十分とは言い難い。資料を基にした考察を全くなし得なかったことも含め、今後、何らかの形で、不備な点の補足、訂正を行ないたい。

（註）

1. 松永幸男 1990 「土器様式変化の一類型—縄文時代後期の東南九州地方を事例として」『横山浩一先生退官記念論文集Ⅰ 生産と流通の考古学』
2. 宮本 勝 1984 「東南アジア焼畑農耕民の集落」『季刊考古学』7 雄山閣出版

IV 写真図版



1. 遺跡全景（北東より）



2. D~F-3~5区の状況



3. 調査区西半の状況



4. D-7区北壁層位の状況



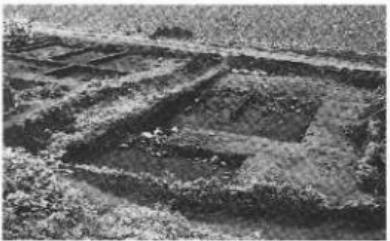
5. B・C-4・5区の状況



6. D~F-7・8区の状況



7. C~E-9~10区の状況



8. Z~C-18~20区の状況



9. C~F-18~21区の状況



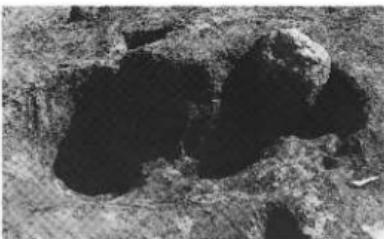
10. SA1 (南東より)



11. SA2 (東より)



12. SC 2・4 (南西より)



13. SC 6 (西より)



14. SC 28(北より)



15. SC 9 (北東より)



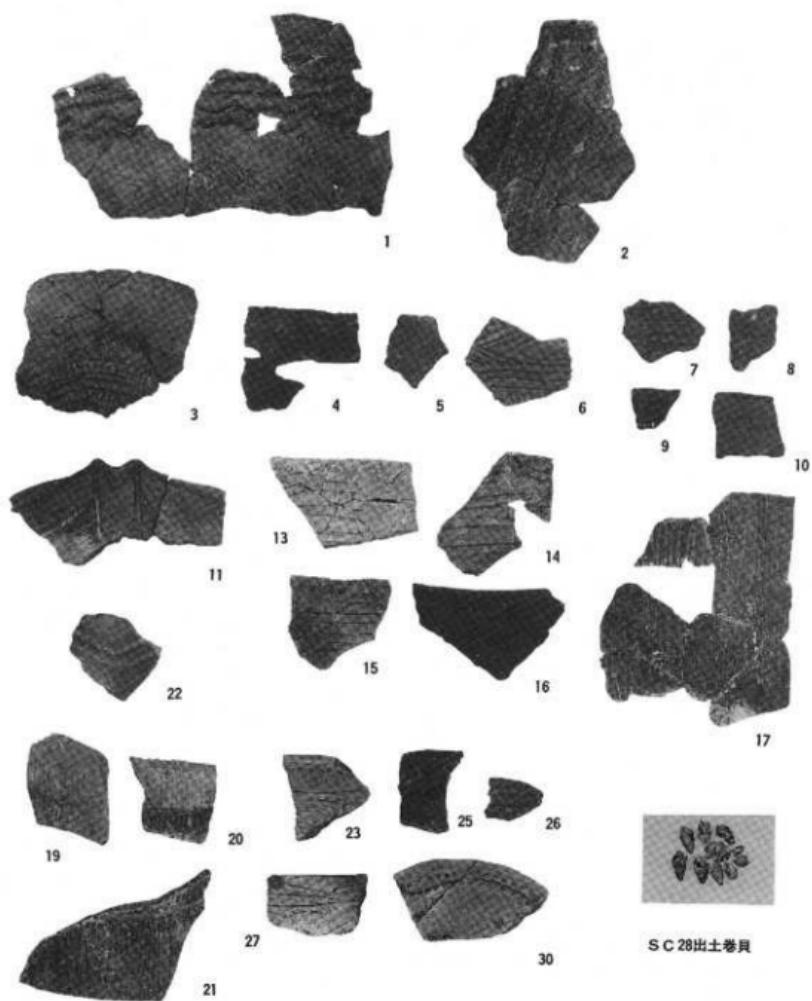
16. SH12 遺物出土状況(西より)



17. SI 1 磨の状況(西より)

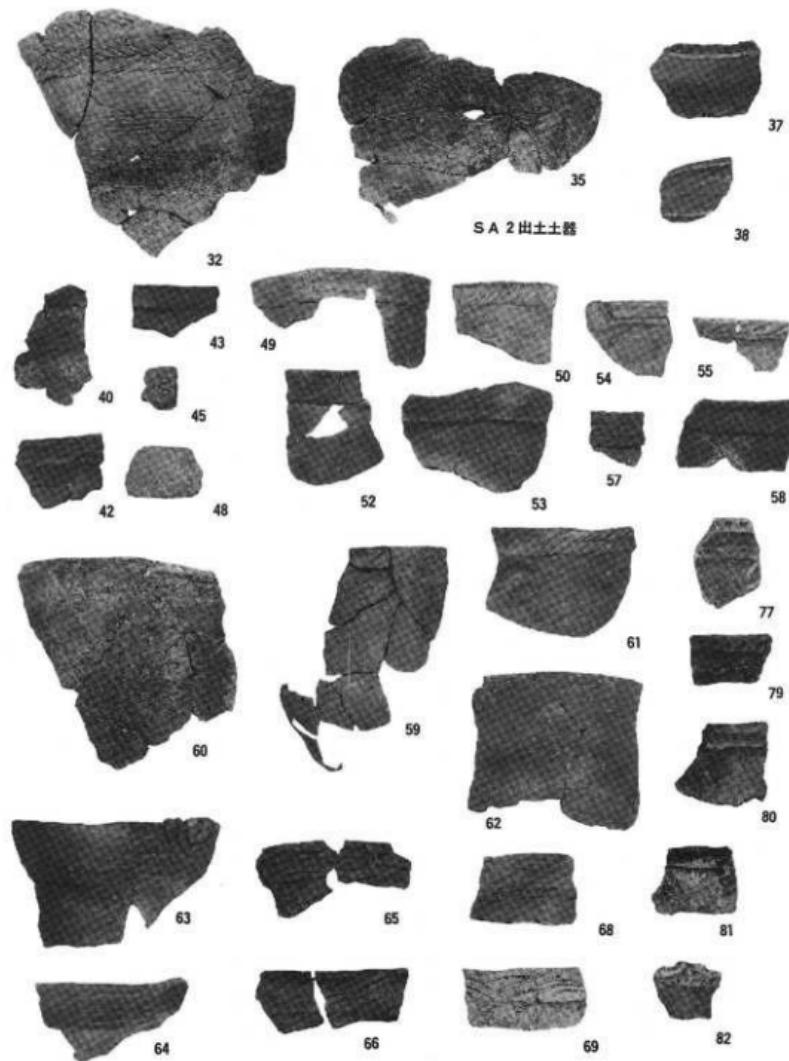


18. SC 29 検出状況(北より)

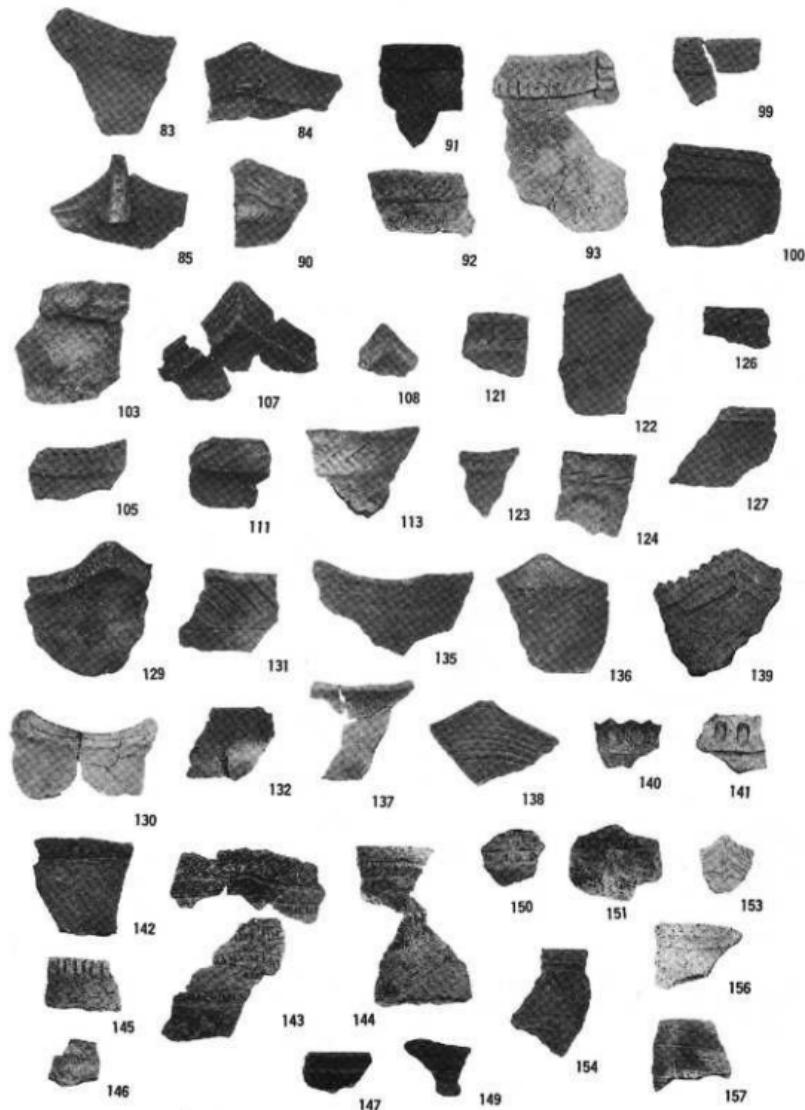


S C 28出土卷貝

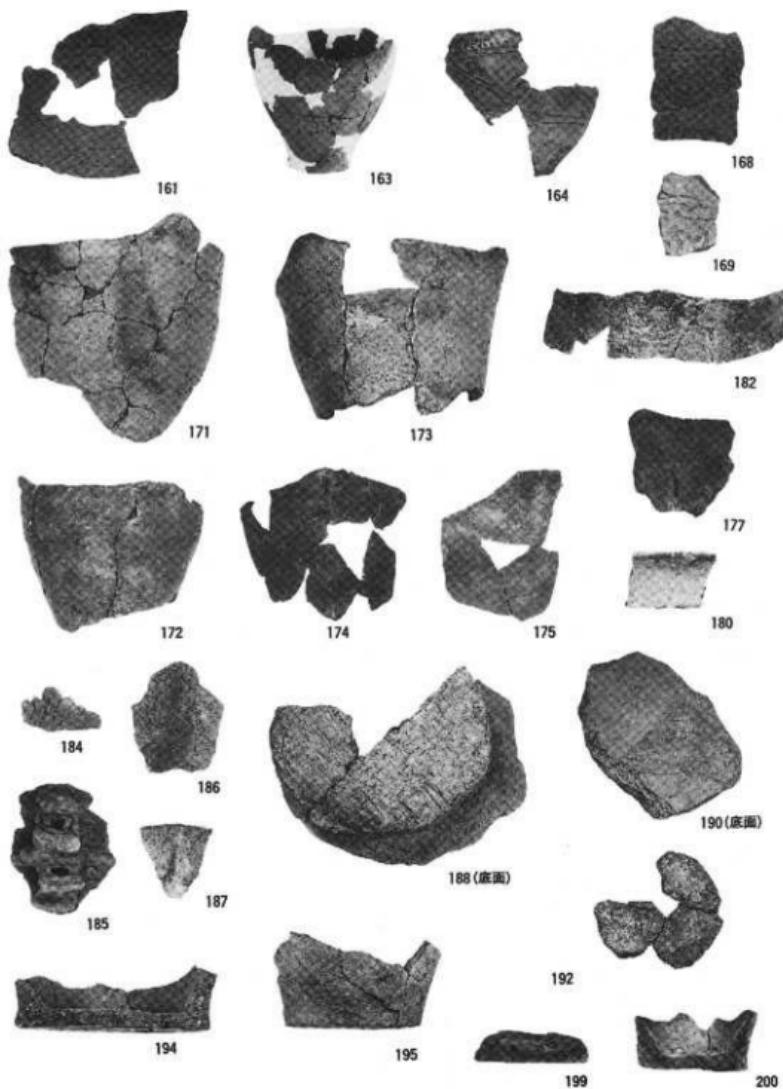
19. 繩文土器(1)・自然遺物



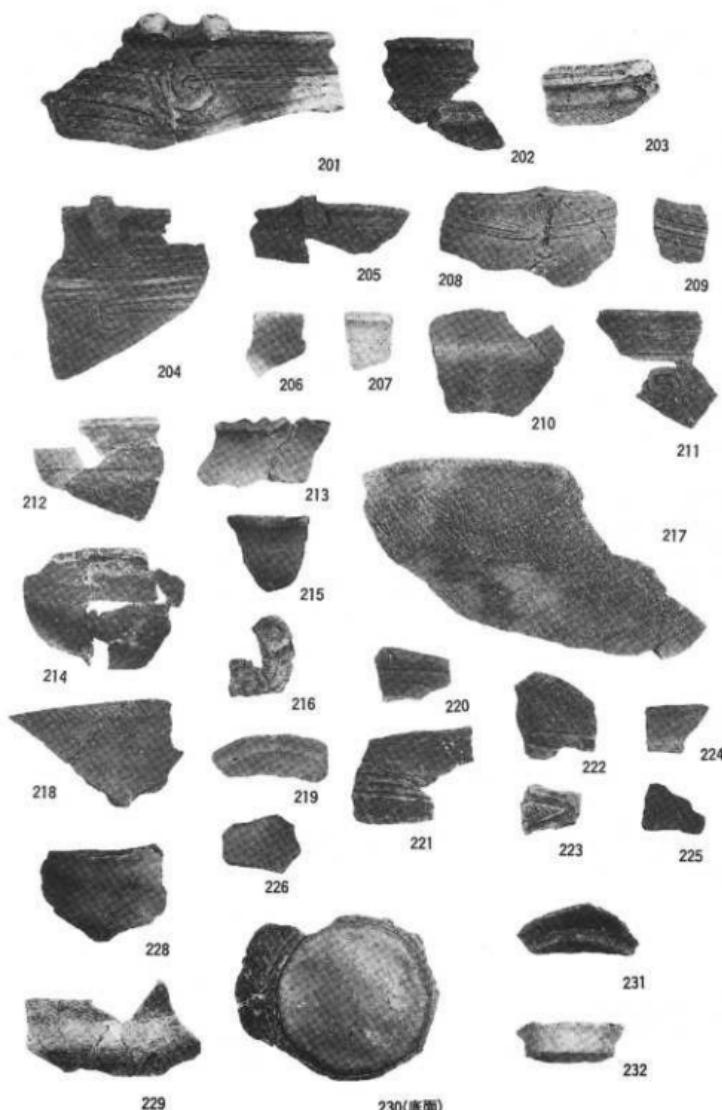
20. 繩文土器(2)



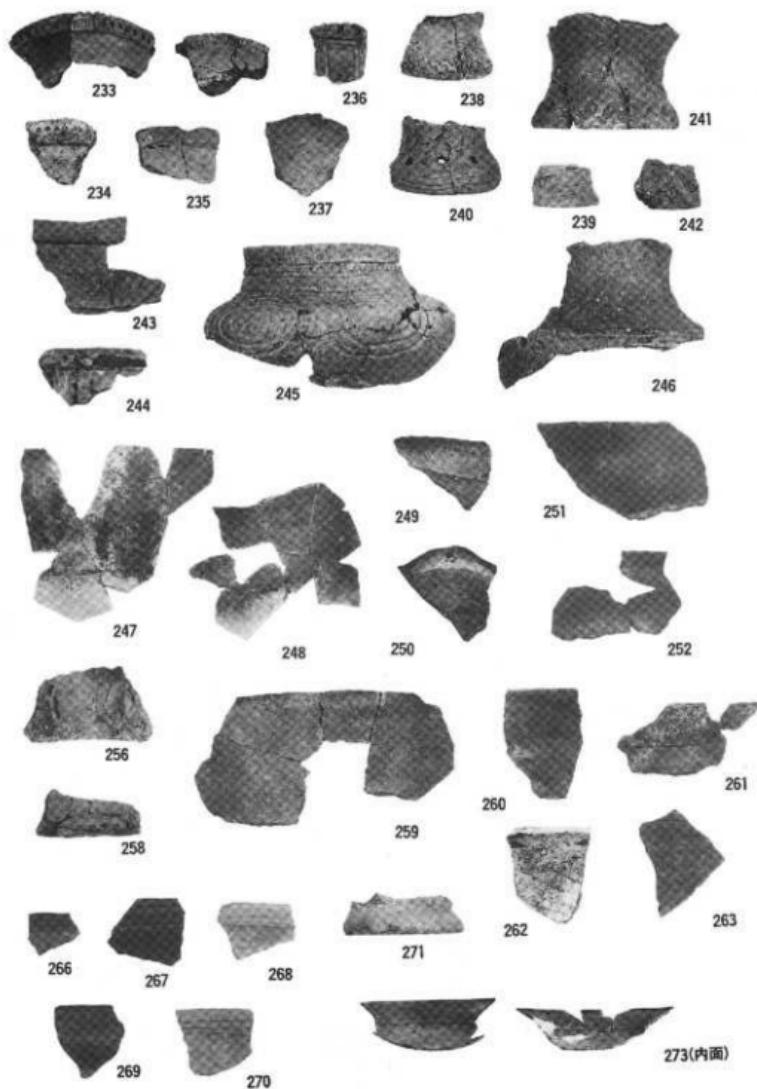
21. 繩文土器(3)



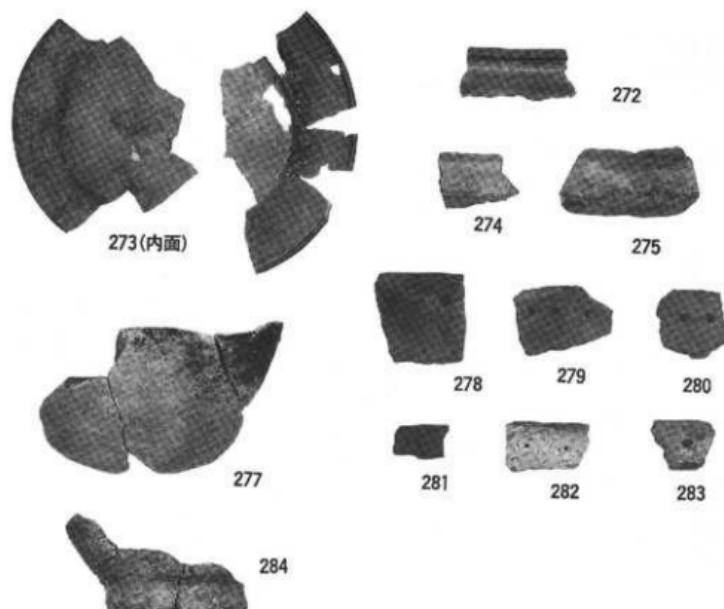
22. 繩文土器(4)



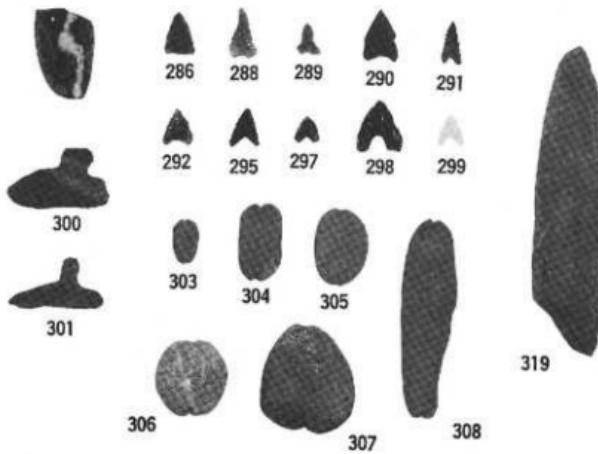
23. 縄文土器(5)



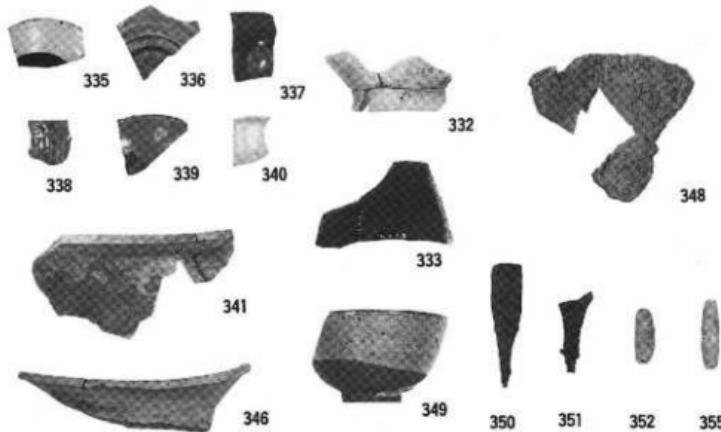
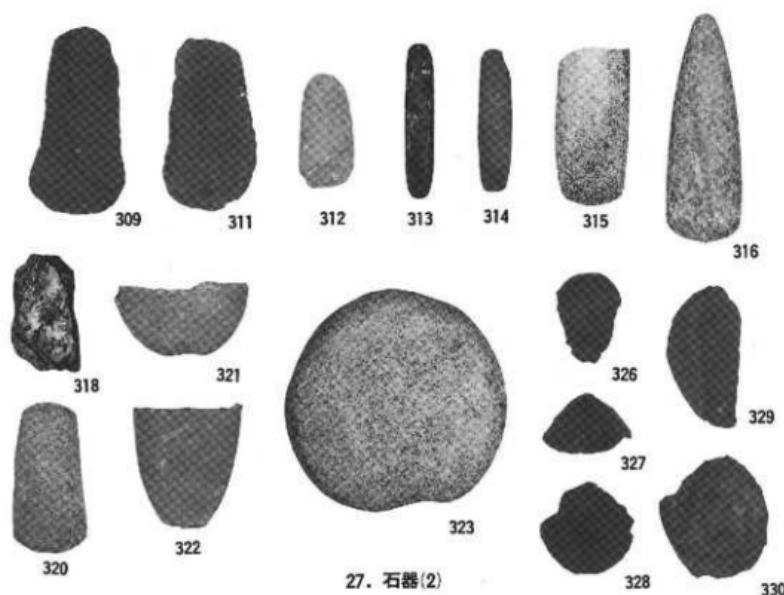
24. 縄文土器(6)



25. 縄文土器(7)



26. 石器(1)



28. 土師器・須恵器・陶磁器・鉄器・土錘

(付論)

須木村・田代ヶ八重遺跡におけるプラント・オパール分析

古環境研究所

1. はじめに

この調査は、プラント・オパール分析を用いて、田代ヶ八重遺跡におけるイネ科栽培植物の検討および古環境の推定を試みたものである。

2. 試 料

1990年11月26日に現地調査を行った。調査地点は、C-18地点およびA-19地点である。調査区の土層は1層～4層などに分層された。このうち、1層は現表土、3層は中世、4層は縄文時代後期とされ、4層直下にはアカホヤ火山灰層、その下層には砂礫層の堆積が見られた。

試料は、容量50mlの採土管などを用いて、各層ごとに5～10cm間隔で採取した。試料数は計8点である。

3. 分析法

プラント・オパールの抽出と定量は、「プラント・オパール定量分析法（藤原、1976）」をもとに、次の手順で行った。

- (1) 試料土の絶乾（105℃・24時間）、仮比重測定
- (2) 試料土約1gを秤量、ガラスピーブ添加（直径約40μm、約0.02g）
※電子分析天秤により1万分の1gの精度で秤量
- (3) 電気炉灰化法による脱有機物処理
- (4) 超音波による分散（300W・42KHz・10分間）
- (5) 沈底法による微粒子（20μm以下）除去、乾燥
- (6) 封入剤（オイキット）中に分散、プレバラート作成
- (7) 検鏡・計数

同定は、機動細胞珪酸体に由来するプラント・オパール（以下、プラント・オパールと略す）をおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスピーブ個数が300以上になるまで行った。これはほぼプレバラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスピーブ個数に、計数されたプラント・オパールとガラスピーブ個数の比率をかけて、試料1g中のプラント・オパール個数を求めた。

4. 分析結果

分析試料から検出された分類群は次のとおりである。イネ科について、イネ、ヨシ属、ウシクサ族（スキ属やチガヤ属などが含まれる）、キビ族（ヒエ属などが含まれる）。タケ亜科について、Ala タイプ（ネザサ節など）、A2 タイプ（マダケ属など）、B1 タイプ（クマザサ属など）、B2 タイプ（メダケ属など）、その他。給源が不明なものとして、A タイプ（キビ族類似）、B タイプ（ウシクサ族類似）、C タイプ（ウシクサ族類似、大型）、D タイプ、表皮毛起源、茎部起源、棒状珪酸体、その他（未分類）。および樹木起源（ブナ科）である。卷末に各分類群の顕微鏡写真を示す。

5. 考 察

(1) イネ科栽培植物の検討

プラント・オパール分析で同定される分類群のうち、栽培植物が含まれるものには、イネをはじめキビ族（ヒエなどが含まれる）やムギ類、ジュズダマ属（ハトムギが含まれる）などがある。このうち、同遺跡ではイネおよびキビ族が検出された。

イネのプラント・オパールは、C-18地点の1層（現表土）のみで検出され、2層（中世）以下ではまったく見られなかった。のことから、同遺跡で稻作が開始されたのは中世以降の比較的最近になってからと推定される。

キビ族もイネと同様に1層のみで検出され、2層（中世）以下ではまったく見られなかった。同族には、ヒエやアワなどが含まれるが、現時点ではプラント・オパールの形態からこれらの栽培種とイヌビエやエノコログサなどの野・雑草とを識別するには至っていない（杉山ほか、1988）。

なお、イネ科栽培植物の中には未検討のものもあるため、不明（未同定）としたものの中にも栽培種に由来するものが含まれている可能性が考えられる。これらの分類群の給源植物の究明については今後の課題したい。

(2) 古環境の推定

その他の分類群では、タケ亜科（おもにクマザサ属）をはじめ、樹木起源（ブナ科）や棒状珪酸体などが多く見られた。このうち、3層下部から4層にかけては、クマザサ属が著しく卓越しており、同時に樹木起源（ブナ科）の増加が認められた。のことから、これらの層準の時期には調査地点周辺にブナ科などの森林植生があり、その林床などでクマザサ属が繁茂していたものと推定される。

なお、1層（現表土）ではこれらの分類群が減少し、かわってネザサ節の増加が認めら

れた。ネザサ節は林床では生育しにくいことから、この時期には森林が開かれ、そこで稻作が開始されたものと推定される。

【参考文献】

- 杉山真二・松山隆二・藤原宏志. 1988. 機動細胞珪酸体の形態によるキビ族植物の同定とその応用—古代農耕追究のための基礎資料として—. 考古学と自然科学、20:81-92.
- 藤原宏志. 1976. プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)—数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法—. 考古学と自然科学、9:15-29.
- 藤原宏志. 1979. プラント・オパール分析法の基礎的研究(3)—福岡・板付遺跡(夜臼式)水田および群馬・日高遺跡(弥生時代)水田におけるイネ (*O. sativa* L.) 生産総量の推定—. 考古学と自然科学、12:29-41.
- 藤原宏志・杉山真二. 1984. プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)—プラント・オパール分析による水田址の探査—. 考古学と自然科学、17:73-85.

表1 須木村、田代ヶ八重遺跡におけるプラント・オパール(植物珪酸体)分析結果

(単位: ×100個/g)

分類群	C - 18 北壁					A - 19 北壁		
	1	3-1	3-2	4	アカホヤ	砂レキ	3	4
イネ科								
イネ	112							
ヨシ属		8						
ウシクサ族(ススキ属など)	26	56	89	33	7		3434	14
キビ族(ヒエ属など)	17							
タケ亞科								
A1 a タイプ(ネザサ節など)	78	8					43	
B1 タイプ(クマザサ属など)	164	298	402	442	21		60	72
A2 タイプ(マダケ属など)	26						9	
B2 タイプ(メダケ属など)	43	24	15				60	
その他	164	73	89	55	7	7	179	29
不明								
A タイプ(キビ族類似)	17	24	15		7		9	
B タイプ(ウシクサ族類似)	43	89	164	44			68	58
C タイプ(同、大穂)		8						
D タイプ		16	30	55			26	43
表面毛起源	26	24	15	22	7		34	
茎部起源	17	8						
棒状珪酸体	337	226	238	238	199	21	451	159
その他	130	185	327	365	27	7	111	231
樹木起源(ブナ科)	9	24	89	99	14		34	43
(滋賀骨材)	9	8						
プラント・オパール 総数	1210	1072	1473	1316	110	14	1115	649

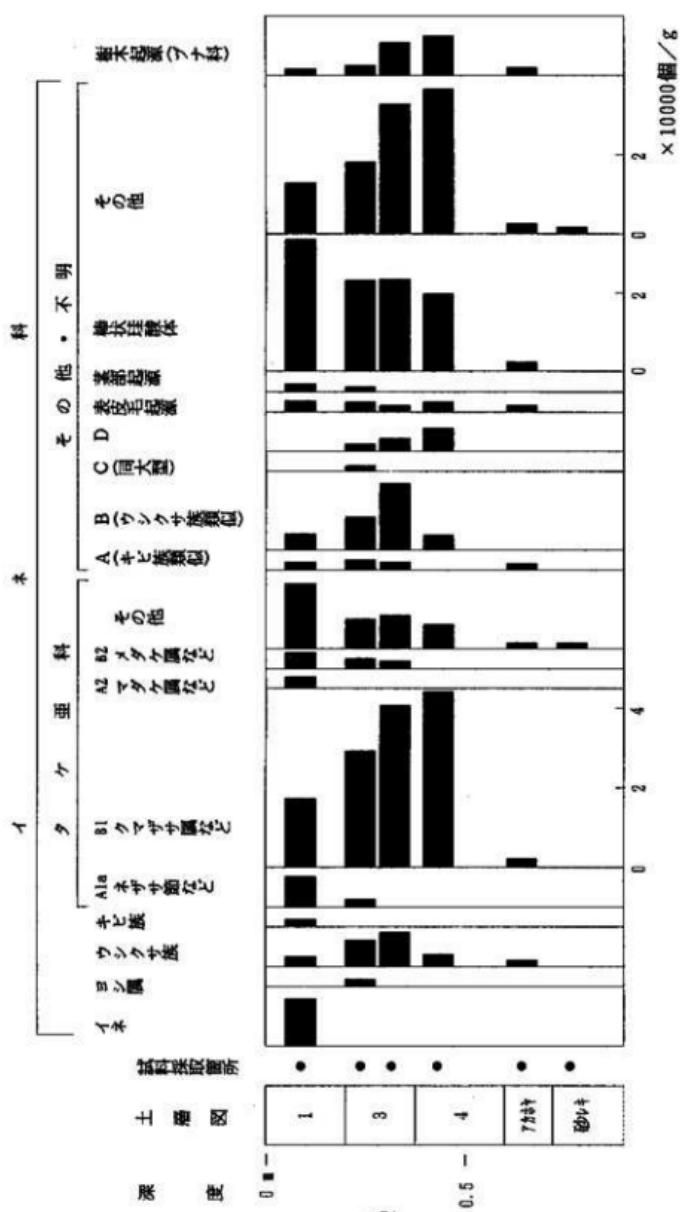


図1 須木村、田代ヶ八重遺跡C-18北壁におけるプラント・オ・パール（植物珪酸体）群集の分布図

科	タケ亜科						その他・不明	
	A1a	B1	B2	B3	D	被子植物體	その他	
紫木起葉(アナ村)								
メダケ属など								
アマダケ属など								
クマザサ属など								
ネザサ節など								
ウシクサ属								
試験採取所								
土層度								
深								
中								
浅								

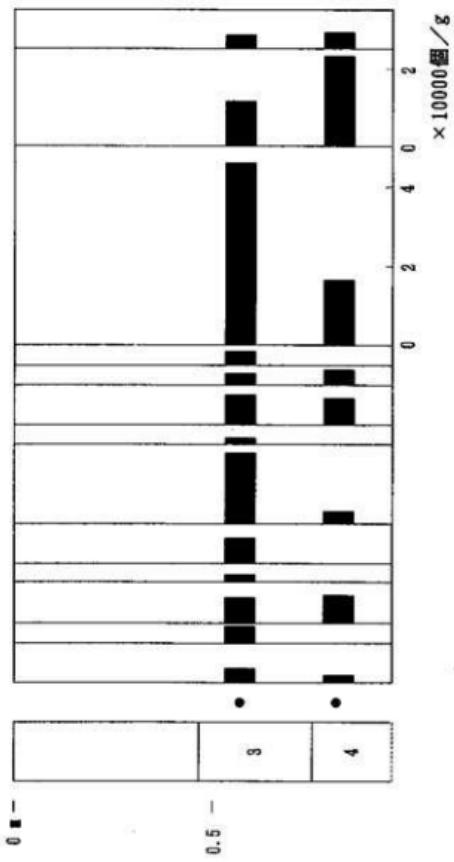
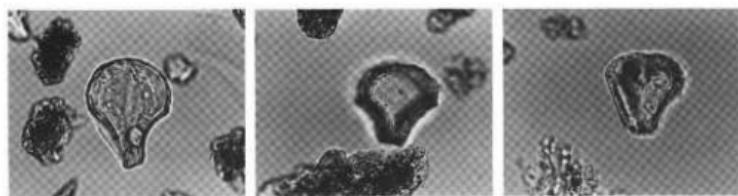


図2 田代ヶ八重遺跡A-1 9北壁におけるプラント・オバール(植物珪酸体)群集の分布図



1. イネ

2. イネ

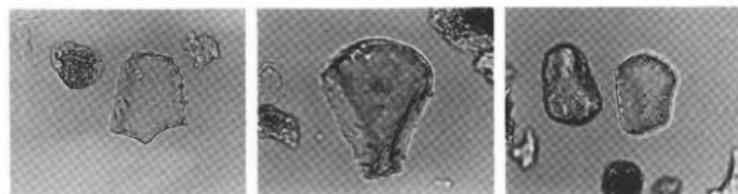
3. ウシクサ族(ススキ属など)



4. キビ族(ヒエ属など)

5. タケ亜科A1a(ネザサ節など)

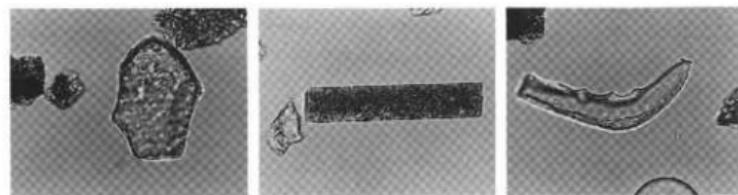
6. タケ亜科A2(マタケ属など)



7. タケ亜科B-1(クマザサ属)

8. タケ亜科B-2(メダケ属など)

9. 不明B(ウシクサ属類似)



10. 不明D

11. 棒状珪酸体

12. 樹木起源(ブナ科)

田代ヶ八重遺跡から検出されたプラント・オパールの顕微鏡写真(全てC-18区×400)

綾北川総合開発建設事業に伴う
埋蔵文化財調査報告書

TA SIRO GA HA E
田代ヶ八重遺跡

発行年月日 平成4年3月

発 行 宮崎県教育委員会

編 集 宮崎県教育庁文化課

印 刷 所 宮崎紙工印刷株式会社